

山梨県甲府市
榎田遺跡
ENOKIDA SITE

—ツリータウン千塚団地建設に伴う発掘調査報告書—



1995.3

山梨県教育委員会
山梨県住宅供給公社

序 文

本報告書は、ツリータウン千塚団地建設に先立って、実施された山梨県甲府市千塚5丁目9番地内に所在する櫻田遺跡発掘調査の成果をまとめたものであります。

本遺跡の所在する山梨県甲府市北西部の千塚地区は、荒川によって形成された扇状地の左岸、自然堤防上に立地し、縄文時代から平安時代にかけての遺跡が多く見られます。本市域では甲府市東部と並ぶ遺跡の密集地区で、中でも大型の横穴式石室をもつ加牟那塚古墳や万寿森古墳は今でも現存し、特筆されるものがあります。本遺跡周辺は、6世紀中頃から古墳築造が盛んになった地域で、「甲斐国志」に「無名ノ古塚多シ破壊シテ今分明ラナズ」とあるなど、本遺跡周辺は千塚の地名が示すとおり相当数の古墳が存在していたと推定されています。

櫻田遺跡は、金峰山麓に源を発する荒川によって形成された広大な扇状地の扇央部、自然堤防上に位置しております。調査の結果、弥生時代後期1軒、古墳時代前期1軒、古墳時代後期12軒、奈良時代8軒、平安時代5軒、時期不明1軒、合計28軒の住居跡や、古墳時代前期の方形周溝墓4基、土坑114基、溝状造構3基、掘立柱建物跡1棟などが検出されています。とくに、古墳時代～奈良時代の住居跡20軒と最も多く、当時の集落の一部を明らかにすことができました。本遺跡周辺にあったと推測される古墳築造の時期と重なることから、古墳を築いていた集落の一部が本遺跡ではないかと思われます。住居跡からの出土遺物は、土師器の壺・甕・高壺・瓶・須恵器の壺・甕などや、土製のスプーン・紡錘車・土鉢、また、砥石などの石製品も出土しております。方形周溝墓は、甲府市域では2例目の検出で、本遺跡から4基確認されております。出土遺物も、S字状口縁台付甕・台付甕・有段口縁臺・高壺・器台など、数多く出土しており当時の生活を知るうえで貴重な資料が得られました。また、本県であまり例を見ない「装飾隆帶壺」・「有透装饰器台」など貴重な発見が得られました。

以上、本報告書の概要を述べましたが、本書を古代史の学習や研究の資料として多くの方々にご利用いただけたら幸甚です。

末筆ながら、種々のご協力を賜った関係機関各位、地元の方々並びに、直接調査整理に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1995年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

1. 本報告書は、平成4年度に山梨県住宅供給公社から委託されて山梨県教育委員会が実施した、甲府市千塚5丁目9番地内に所在する櫛田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成の経費は、平成6年度の山梨県住宅供給公社と山梨県教育委員会の契約による。
3. 発掘調査並びに出土品等の整理及び報告書の作成は高野玄明、橋田重男が行った。
4. 本報告書の編集、執筆は高野玄明が行った。
5. 写真撮影は、遺構・遺物を高野玄明、橋田重男が行った。一部の遺構・全体写真及び航空写真はシン航空写真株式会社に撮影を委託した。
6. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 本報告書の作成にあたって、甲府市教育委員会の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

凡　　例

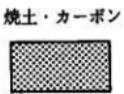
1. 掲載した図面の縮尺は、原則として、住居跡・土坑は60分の1、土器実測図・拓本は3分の1、4分の1、石器類・土製品は3分の1であるが、特殊な遺構及び遺物はこの限りではない。
2. 拓本で、両面を載せてあるものは、断面右側が表面、左側が内面である。
3. 捕図中のスクリーン・トーンの内容は次のとおりである。



地　山



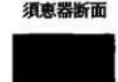
礫断面



焼土・カーボン



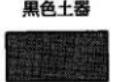
石器使用面



須恵器断面



赤彩土器



黒色土器



陶磁器

目 次

序 文
例 言
凡 例

第Ⅰ章 遺 跡 概 況	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の実施と経過	3
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査組織	3
第3節 調査方法	3
第Ⅲ章 遺構と遺物	6
第1節 縄文時代	6
1) 土 坑	6
2) 遺構外出土土器	6
3) 石 器	7
第2節 弥生時代	9
1) 住居跡	9
第3節 古墳時代	10
1) 住居跡	10
2) 方形周溝墓	37
3) 土 坑	58
4) 溝状遺構	60
5) 遺構外出土土器	63
第4節 奈良時代	66
1) 住居跡	66
第5節 平安時代	76
1) 住居跡	76
2) 遺構外出土土器	87
第6節 時期不明の遺構	88
1) 住居跡	88
2) 捶立柱建物跡	89
3) 溝状遺構	90
第7節 その他の出土遺物	98
1) 土 製 品	98
2) 砧 石	100
3) 鉄 製 品	100
第Ⅳ章 ま と め	101

図 版 目 次

- 図版1 片山より横田方面を望む、第2・3号住居跡遺物出土状況、第2号住居跡完掘状況、第5号住居跡疊混入状況、同左完掘状況、第7号住居跡遺物出土状況
- 図版2 遺跡調査風景、第14号住居跡土鈴・土製スプーン出土状況、第20号住居跡遺物出土状況、同左カマド周辺部遺物出土状況、第20号住居跡完掘状況
- 図版3 遺跡調査風景、第21号住居跡完掘状況、第22号住居跡完掘状況、第25号住居跡遺物出土状況（南東から）、同左（南西から）
- 図版4 第1号方形周溝墓完掘状況（上空より）、第1号方形周溝墓「有段口縁壺」出土状況、同左「台付壺」出土状況
- 図版5 第2号方形周溝墓完掘状況、第2号方形周溝墓「有段口縁壺」出土状況、同左焼成後底部穿孔状況、第2号方形周溝墓東側コーナー遺物出土状況、同左、第3号方形周溝墓作業風景、第3号方形周溝墓周溝内土坑完掘状況
- 図版6 第4号方形周溝墓完掘状況（上空より）、第4号方形周溝墓「装飾隆帶壺」出土状況、遺構外出土「装飾器台」出土状況
- 図版7 第1号住居跡出土土器、第2号住居跡出土土師器坏、第2号住居跡出土甕、同上、第2・3号住居跡出土土器、第2号住居跡出土鉢・甕類、第4号住居跡出土土師器坏、第5号住居跡出土土師器坏、第5号住居跡出土甕類、第7号住居跡出土土師器坏、第7号住居跡出土甕、第7号住居跡出土土師器・小型甕
- 図版8 第8号住居跡出土甕類、第9号住居跡出土土師器、第9号住居跡出土甕類、第10号住居跡出土土器、第11号住居跡出土土師器坏、第12号住居跡出土土師器坏、第13号住居跡出土土師器坏、第13号住居跡出土甕類、第15号住居跡出土土器、第20号住居跡出土高杯、第20号住居跡出土甕類、第20号住居跡出土小型甕・鉢類
- 図版9 第21号住居跡出土土器、第24号住居跡出土土器、第25号住居跡出土土器
- 図版10 第1号方形周溝墓出土土器
- 図版11 第1号方形周溝墓出土土器、第2号方形周溝墓出土土器
- 図版12 第2号方形周溝墓出土土器、第3号方形周溝墓出土土器
- 図版13 第4号方形周溝墓出土土器
- 図版14 土坑内出土土器、遺構外出土土器
- 図版15 土坑内出土繩文土器、遺構外出土繩文土器、繩文時代出土石器
- 図版16 遺構外出土柳痕土器、遺構外出土置きカマド、第14号住居跡出土土鈴、遺構外出土土製品、第14号住居跡出土土製スプーン状土製品、第7号住居跡出土土製スプーン状土製品、土製紡錘車、砾石

第Ⅰ章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置と地理的環境

櫻田遺跡は、甲府市千塚5丁目9番地内に所在する。甲府盆地北西部、湯村山と片山に挟まれた荒川左岸、荒川の流路にそって形成された帯状微高地の標高約305mの地点に立地する。

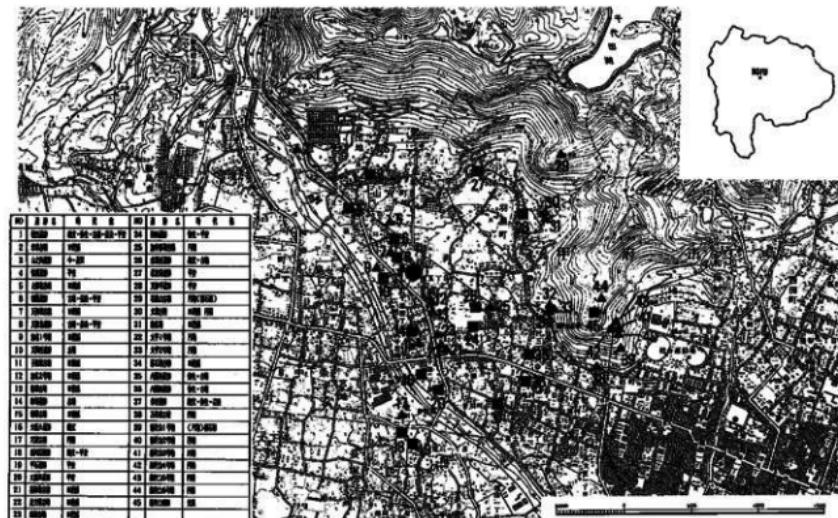
遺跡の所在する甲府市は、山梨県のはば中央に位置し、南北31.5km、東西12.5kmの南北に細長い市域をなしている。甲府市北部は、金峰山と国師ヶ岳の稜線を境に、長野県南佐久郡川上村に接し、東は東山梨郡牧丘町・春日居町・山梨市、東南から南にかけて、東八代郡石和町・中道町・豊富村、南西から西にかけては中巨摩郡玉穂町・昭和町・竜王町・敷島町、北巨摩郡須玉町を境に接している。

市域は、北部の山地と南部の盆地部に大別される。このうち北部・中央部は金峰山などを含む山岳山間地帯及び盆地との境に発達した扇状地地帯、荒川・相川・釜無川・笛吹川などの大小河川が形成した複合冲積地から構成されている。このように、現在の甲府市は山岳・山間地帯から盆地底部の低地まで変化に富んだ地形で構成されている。

遺跡の所在する甲府市北西部の湯村・千塚地区周辺では、荒川左岸標高280~305m程で北西から南東に向かい緩やかに傾斜しており、段丘及び小河川によって開析された微高地が発達した地域である。櫻田遺跡は、こうした荒川流域の自然堤防上に立地する。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

櫻田遺跡が所在する甲府市北西部の湯村・千塚地区は、現在では宅地及び商業用地が密集しているが、甲府市教育委員会が行った分布調査では、約50箇所に及ぶ遺跡の存在が確認されている。第1図で示したように、時代



第1図 櫻田遺跡と周辺の遺跡

は、縄文時代から中・近世に至るもので、その中でも、特に古墳時代後期における古墳群は特筆されるものがある。

縄文時代の遺跡は、荒川左岸の片山・湯村山に挟まれた微高地上に点在する。(26)金塚西遺跡、(16)大阪A遺跡、(18)西河原遺跡は、縄文中期の遺物が発見されている。本遺跡でも、縄文前期末・中期初頭・後期の土器片が見られ、その内、中期初頭の土坑が3基検出されている。また、平成4年度に発掘調査された(37)音羽遺跡でも縄文時代後期の遺物が確認されている。該期の遺構は検出されてないが、盆地内の微高地上の居住を知るうえでも貴重である。弥生時代の遺跡は、(24)神田遺跡、(35)八幡東遺跡、(36)八幡前遺跡などで、弥生時代後期の遺物が発見されている。本遺跡でも、弥生時代後期の住居跡が1軒検出されており、東海系の壺などが出土している。(37)音羽遺跡でも、弥生時代後期の住居跡が2軒検出されている。遺物は、櫛描波状文が施される土器片や、磨製石鑿・凹み石などが出土している。古墳時代の遺跡は、前期では、弥生時代に集落が形成されている千塚周辺を中心としながらも、盆地の北縁をなす山々にも集落が拡散している。本遺跡でも、古墳時代前期の住居跡が1軒確認され、東海系のS字状口縁台付壺などが出土している。また、同時期の方形周溝墓が4基検出されており、S字状口縁台付壺・有段口縁壺・器台・ひさご壺など豊富な遺物が出土している。古墳時代後期では、湯村・千塚周辺において6世紀中頃より古墳築造が盛んになった地域で、地名が示すように多くの古墳が存在していたものと思われる。現在では、県の史跡に指定されている(25)加牟那塚古墳、(38)万寿森古墳といった県内有数の大型横穴式石室をもつ古墳が存在している。加牟那塚古墳は、荒川によって形成された扇状地の左岸に位置し、直径約45mの円形を呈する。高さ約7m、石室は全長16.75mを測る。出土遺物は、須恵器・丸玉・鏡3面などが出土している。須恵器は6世紀の所産と考えられることから、古墳築造も同時期と思われる。加牟那塚古墳は甲府盆地において御坂町姥塚古墳に次いで第2位の石室規模をもち、外部施設に埴輪を伴う点が注目される。万寿森古墳は、湯村山南西の山裾、南傾斜面に構築されている。東西31.0m、南北38.0m、高さ5.0m程を測る円墳であるが、出土遺物は全く知られていない。また、本市域に特徴的な古墳としては墳丘を石で盛り上げた積石塚古墳があり、湯村山山麓(湯村山古墳群)や甲府市東部の甲連地区に集中し、分布している。湯村・千塚地区は「甲斐国志」に「無名ノ古塚多シ破壊シテ今分明ナラズ蓋村名起所ナリ」とあり、千塚の地名の由来について記している。現在ではそのほとんどが耕作及び宅地化によって消滅している。こうした古墳が盛んに築かれた6~7世紀代の集落跡の発見は今まで少なかったが、今回の櫻田遺跡の調査によって、古墳時代後期の住居跡が12軒検出されたことにより、集落の一部ではあるものの明らかになった。また、(6)御蔵遺跡、(8)天神北遺跡、(10)天神西遺跡、(14)跡部遺跡、(26)金塚西遺跡、(37)音羽遺跡、(35)八幡東遺跡、(36)八幡前遺跡などで古墳時代の遺物が発見されている。このことから、この地域に相当根強い経済力や政治的基盤をもった勢力の台頭が窺える。

奈良・平安時代の遺跡は、(4)鴨塚遺跡、(6)御蔵遺跡、(27)若宮前遺跡、(28)天神平遺跡、(8)天神北遺跡、(24)神田遺跡、(20)大阪B遺跡などで平安時代の遺物が確認されている。本遺跡においても該期の住居跡が検出され、壺・甕・須恵器などが出土している。

中・近世の遺跡は、(3)山之神遺跡は、中世の五輪塔が1基確認されており、館跡の可能性も考えられる。また、武田氏館防御の一翼を担う重要な城館跡として古くから知られている(45)湯村山城跡がある。湯村温泉の背後にある湯村山の山頂に位置し、標高約446mを測る。南方に盆地一帯、西方に北巨摩方面、東方には武田氏館跡を一望に見渡すことができる。湯村山城は、武田氏館防御を担う重要な城館跡として古くから知られ、立地条件からして眺望が優れ、また、武田氏館跡にも2.3kmと近いことから、監視的な機能に最適な条件を持ち合わせ、軍事的基地の一つとして重要な役割を担った城郭であるといえる。

引用・参考文献

- 1986 甲府市の遺跡「甲府市内遺跡詳細分布調査報告書」甲府市教育委員会 甲府市文化財調査報告書 4
1989 「甲府市史 史料編第一巻」 原始・古代・中世 甲府市史編さん委員会

第Ⅱ章 調査の実施と経過

第1節 調査に至る経過

櫻田遺跡は、昭和60年度に甲府市教育委員会が行った甲府市内詳細分布調査により、弥生～古墳時代の遺跡として報告されており、本遺跡範囲内において山梨県住宅供給公社により宅地造成事業が計画され、これに基づいて県学術文化課・住宅供給公社・埋蔵文化財センターの協議の上、本調査に先立ち試掘による範囲確認調査を実施することになった。試掘調査は、平成3年9月に行い、調査区域内に重機によるトレーナー掘削と、作業員による精査によって遺構・遺物の有無の確認及び、土層の観察などを行った。この結果、調査区南側を除くほぼ全域にわたり弥生時代後期～平安時代に及ぶ該期の遺構・遺物が濃密に検出されたことにより、本調査を行うことになった。

試掘範囲確認調査

- 平成3年8月30日 文化庁に発掘通知を提出する。
平成3年9月9日 試掘範囲確認調査を開始する。
平成3年9月20日 試掘範囲確認調査を終了する。
平成3年10月5日 埋蔵文化財発見届を甲府警察署に提出する。

本 調 査

- 平成4年4月15日 文化庁に発掘通知を提出する。
平成4年4月22日 発掘調査を開始する。
平成4年11月30日 発掘調査を終了する。
平成4年12月28日 埋蔵文化財発見届を甲府警察署に提出する。

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所長 磯貝 正義
次長 長谷川裕彦
調査研究課長 森 和敏

調査担当者 文化財主事 高野玄明・櫻田重男

発掘作業員 平 重蔵、清水健太郎、北原和江、長田光男、渡辺正年、灰原礼子、矢嶋玲子、滝田節子、滝田三枝子、細田正子、太田てる江、森下 豊、岡 伸子、石川弘美、青柳 清、兼子よし子、山本多美子、松川隆光、松川妙子、望月重昭、加藤智恵子、深沢さく江、小菅春江、野中はるみ、高見暉子、高坂博子、石原沙織、上笠邦子、柳本立美、久保寺亮、名取住子、高添美智子、奥石義幸、筒本 保、柳本みさ子

整理作業員 西脇 誠、米永 孝、寿森正雄、萩原光代、池谷さち子、石原はづ子、長田てる美、塙島富美子、名取洋子、北原和江、志村君子、石山久美子、林 美鈴、志村ひで江、伊藤順子、長田公子、横田万智子、渡辺早苗

第3節 調査方法

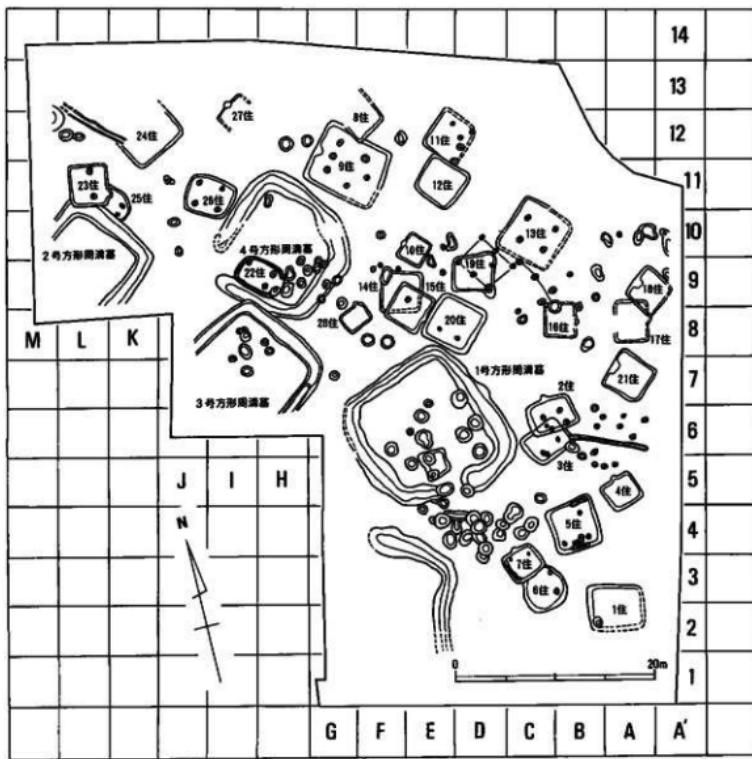
遺跡調査面積は約3,400m²あり、調査区域内の測量杭を基準とし、調査区全体に5m×5mのメッシュをかけ、

グリッド設定を行った。東西方向にA'・A・B～のアルファベットをふり、南北方向に1・2・3の算用数字をふった。これによって、各グリッドはA-1,M-13という名称になる。

調査は、まず始めに試掘データを基に重機によって表土を除去し、作業員がジョレンで丁寧に遺構確認面の精査を行い、遺構の検出に努めた。遺構確認面まで出土した遺物は、小破片は各グリッドごとに一括で取り上げ、必要に応じて平面図及びレベリングなどの記録作業後、取り上げた。遺構が確認できた段階で、他の遺構との重複関係を調べ前後関係の分かるものは、新しい遺構から掘り下げることにした。遺構出土の遺物は、遺物を残しながら記録作業終了後取り上げ、土層断面図、遺構・遺物平面図、遺物出土状況写真、遺構全体写真などの作業を経て、各遺構ごとに調査を終了している。なお、住居跡・土坑などの作図は、S=1/20、カマド実測図及び微細図はS=1/10を基本に作図している。なお、方形周溝墓など一部の遺構などはこの限りではない。



第2図 桜田遺跡全体図



第3図 横田遺跡遺構位置図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 繩文時代

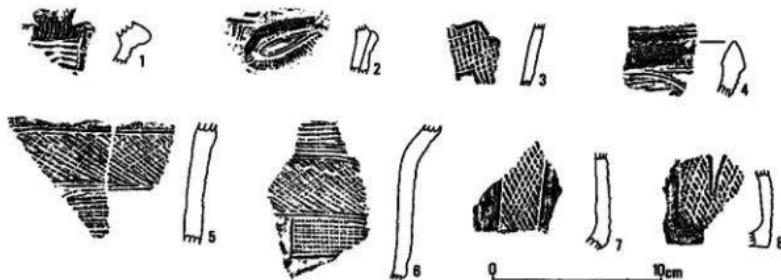
1) 土坑

本遺跡から縄文時代の遺構は、土坑が3基確認されている。

○36・40・42号土坑（第97・98図）（第1表 土坑一覧表）

○36・40・42号土坑出土遺物（第4図）

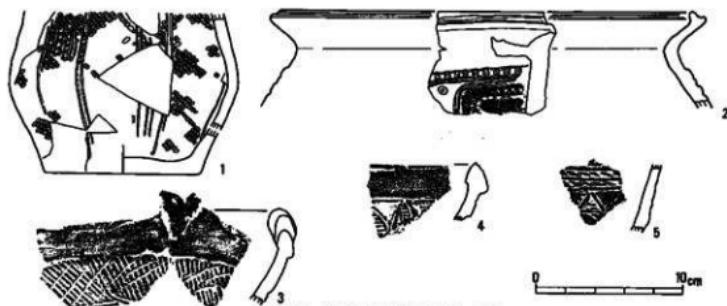
1～2が36号、3が40号、4～8が42号土坑出土のものである。1は口唇端部に刻みが施され、その下部には沈線文が施される。2は口唇部に木の葉状の貼付文が施される。3は沈線文を交差させて、格子目状の文様が施される。4は無文の口唇部であるが、下部には沈線文が施される。5・6は上部には斜位の沈線文を交差させて、下部には縦位、横位の沈線文を交差させて格子目状の文様を施す。7・8は底部付近で、斜位の沈線文を交差させて格子目状の文様を施す。1～8はいずれも、中期初頭の五領ヶ台式に位置付けられる。



第4図 第36・40・42号土坑出土遺物

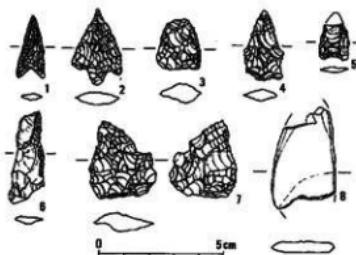
2) 遺構外出土遺物（第5図）

1は外面全体に縄文の地文が施され、その上から半截竹管による沈線が縦位に施される。2は口唇部に沈線が巡る。頸部には陸帯が巡り、その上から刺突文が施される。その下部には、沈線による区画文が見られ、区画内に縄文が施される。3は口縁部に把手状の装飾が施され、下部には、斜位の沈線文が交差し、格子目状の文様が施される。4は無文の口縁に、下部には沈線による三角形状の区画が施される。5は結節状浮線文が施される。1・3・4が中期初頭の五領ヶ台式、2が後期の堀之内式、5が前期末葉の十三菩提式に位置付けられる。



第5図 縄文時代遺構外出土土器

3) 石 器 (第6~第8図)

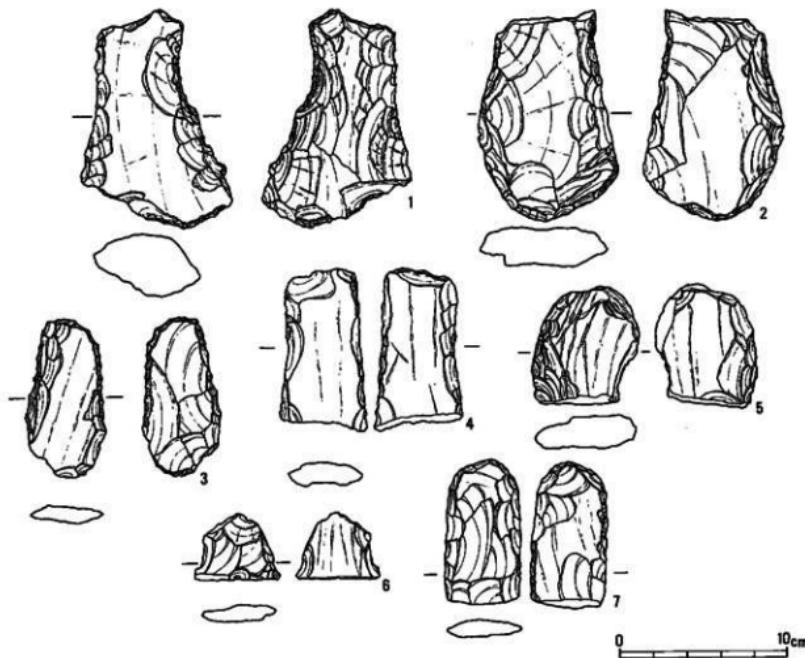


第6図 漢文時代遺構外出土石器(1)

本遺跡出土の縄文時代の石器は、遺構からの出土は見られず、遺構外出土及び古墳時代前期～平安時代の遺構から出土した石器がほとんどであり、混入遺物と捉えこの中に含めた。

◎石器(1) (第6図)

1は石鎌で長さ2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.5g。基部の形態は無茎鎌で、基部には深い抉りが見られる。先端部破損。黒曜石製。2は有茎鎌で、現存長2.9cm、現存幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ1.9g。片側脚部を欠損している。黒曜石製。3は石鎌の未製品と思われる。長さ20cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重さ1.4gを測る。黒曜石製。4は有茎鎌であるが、片側脚部及び基部を破損している。現存長2.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gを測り、黒曜石製。5は先端部を欠損している無茎鎌で基部に若干の抉りが見られる。現存長1.5cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.7gを測る。黒曜石製。6は片側に調整痕及び使用痕が見られる黒曜石製の剥片で、長さ3.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gを測る。7は両面調整が施される石器で、長さ3.0cm、幅2.7cm、厚さ0.8cm、重さ2.3g。黒曜石製。8は玉斧と思われる未製品で、蛇紋岩製。8.8gを測る。



第7図 漢文時代遺構外出土石器(2)

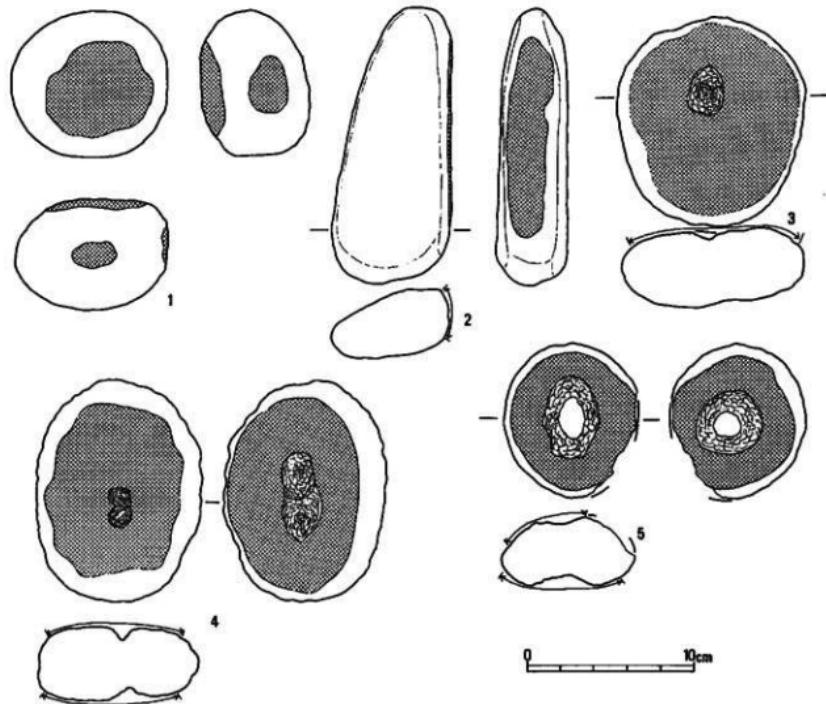
○石器(2) (第7図)

1～7は、打製石斧と思われるものを一括した。

1は、第13号住居跡出土。撥形で306.2gを測り、砂岩製。2は第13号住居跡出土。撥形で275.4gを測る。凝灰岩製。3はB-10グリッド出土。短冊形で61.6gを測る。頁岩製。4は第5号住居跡出土。短冊型で、96.9gを測る。砂岩製。5は第4号住居跡出土。117.7gを測る。粘板岩製。6も粘板岩製で第5号住居跡出土。21.0gを測る。7はD-9グリッド出土で、短冊型。64.7gを測り、凝灰岩製。

○石器(3) (第8図)

1・2は磨石、3～5は、凹石で、いずれも安山岩製である。1は第1号住居跡出土。3面使用で709.5gを測る。2は第19号住居跡出土。1面使用で、733.4gを測る。3は第20号住居跡出土。1面使用で、861.8gを測る。4は第2号方形周溝墓出土で、2面使用、699.7gを測る。5は第1号方形周溝墓出土。2面使用で、365.7gを測る。



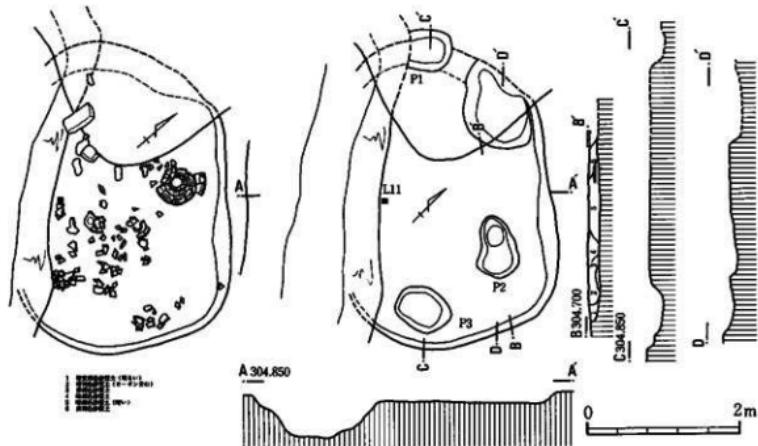
第8図 桐文時代遺構外出土石器(3)

第2節 弥生時代

1) 住居跡

○第25号住居跡（第9図）

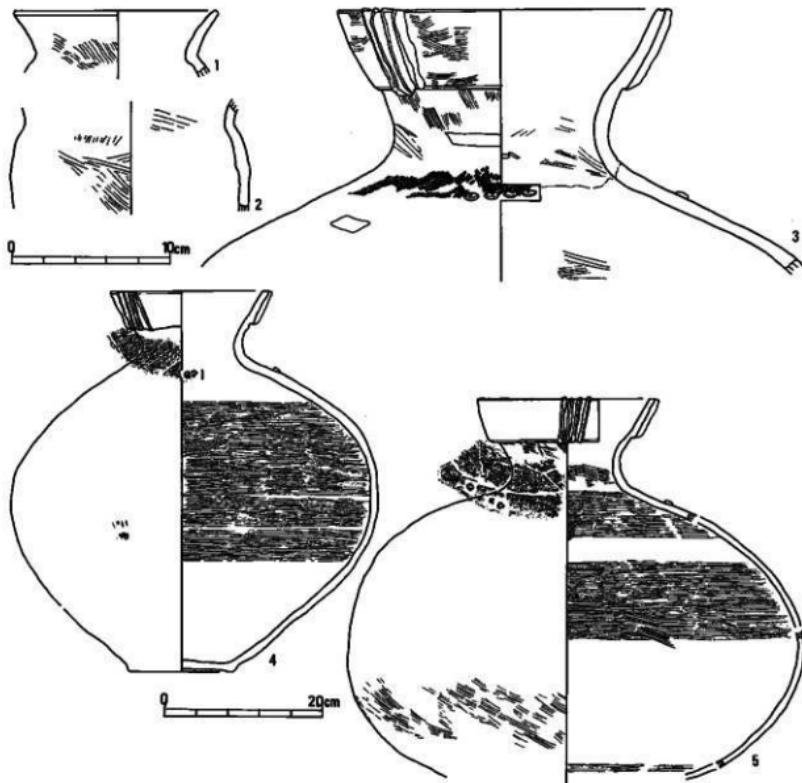
K-10・11、L-11グリッドに位置する。第2号方形周溝墓と第23号住居跡によって、住居跡南側～北西側が重複している。規模は、推定長径約4.1m、推定短径約3.0mを測り、小判型を呈するものと思われる。壁高は0.1m程度で緩やかに立ち上がり、覆土は暗褐色が主体をなす。床面は、住居跡全体に踏み固められた部分が認められ、床の状況は良好である。ピットは3基確認されている。ピット1は、推定長径0.70m、短径0.55m、深さ0.25m。ピット2は、長径0.85m、短径0.45m、深さ0.30m。ピット3は、長径0.75m、短径0.55m、深さ0.15mを測る。炉などの確認はできなかった。



第9図 第25号住居跡

○出土遺物（第10図）

1は壺の口縁部である。推定口径13.0cmを測る。口縁部にはナデ調整、頸部には縦方向のハケ調整が施される。胎土は、砂粒を含みやや粗く、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。2は壺の胴部破片で、頸部及び胴部外面には縦方向のハケ調整、内面には横ナデ及び横ハケ調整が施される。胎土は、砂粒含みやや粗く、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。3は幅広の複合口縁をもつ短頸の壺型土器である。推定口径21.1cm。口縁部に4本1単位とする棒状添付文が4カ所に施され、肩部には縄文を施し、ボタン状添付文が4点1単位2カ所に施される。外面全体には、ハケ調整後ミガキが施され、内面には横方向のハケ調整が見られる。胎土は緻密で、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。4も3同様幅広の複合口縁をもつ短頸の壺型土器である。口径20.1cm、器高48.0cm、底径13.6cm。口縁部に棒状添付文が4本1単位で施される。肩部には縄文が見られ、ボタン状添付文が2点1単位4カ所に施される。胴部外面には縦ハケ調整後、ミガキが施される。内面には横ハケによる調整が見られる。胎土は緻密で、長石・石英・赤色粒子含む。焼成は良好、色調は明褐色である。5も複合口縁をもつ短頸の壺型土器で、胴部は球形を呈する。推定口径21.6cm、口縁部に棒状添付文が4本1単位4方向に施される。肩部には縄文、ボタン状添付文が4点1単位2カ所に施される。外面には縦ハケ調整後、ミガキが施される。内面には横方向のハケ調整が明瞭に見られる。胎土は緻密で長石・石英・赤色粒子・金雲母を含み、焼成は良好、色調は明褐色を呈する。



第10図 第25号住居跡出土土器

第3節 古 墳 時 代

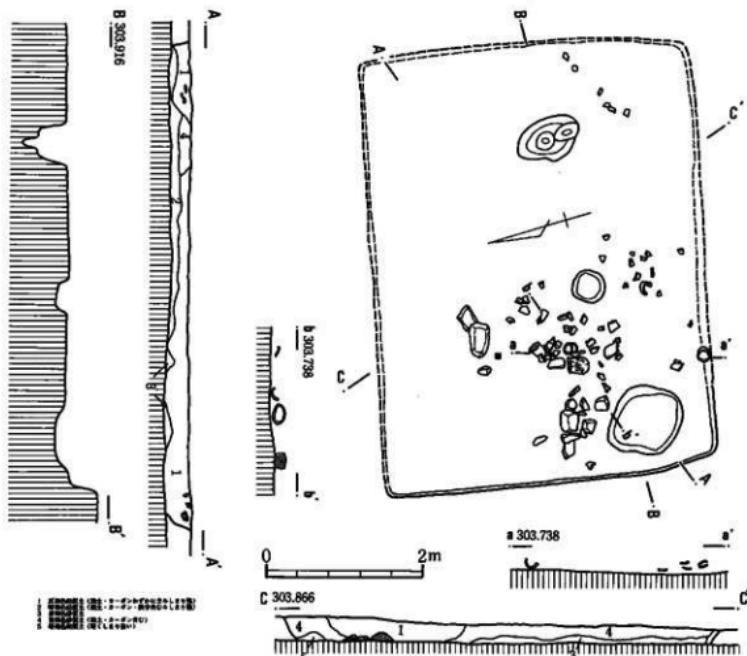
1) 住 居 跡

○第1号住居跡（第11図）

A・B-2・3グリッドに位置する。住居跡西側で壁が確認できたばかりは、推定プランである。推定長辺5.6m、短辺4.2mを測り、隅丸長方形を呈すると思われる。覆土は暗褐色土を呈する。床面は、黄褐色砂質土で貼り床や踏み固められたような痕跡は見られず、カマドなども確認できなかった。

○出土遺物（第12図）

図示したものは、15点で1～3は土師器坏で、1は口径11.0cm、器高3.5cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は暗褐色。2は口径10.8cm、器高3.9cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は褐色。3は口径11.8cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。いずれの土器も外面下半はヘラ削り、外面上半と内面はナデにより器面調整されている。4は小型壺で口径13.0cm、器高11.8cm、底径5.5cmを測る。胎土は砂粒含みやや粗く、焼成良好、色調は褐色を呈する。5は鉢で器体部外面及び内面はナデによる調整、外面底部はヘラ削りで器面調整されている。胎土は、砂粒含み、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。6は高坏で、口径15.4cm、器高11.3cm、底径9.4cm。器体

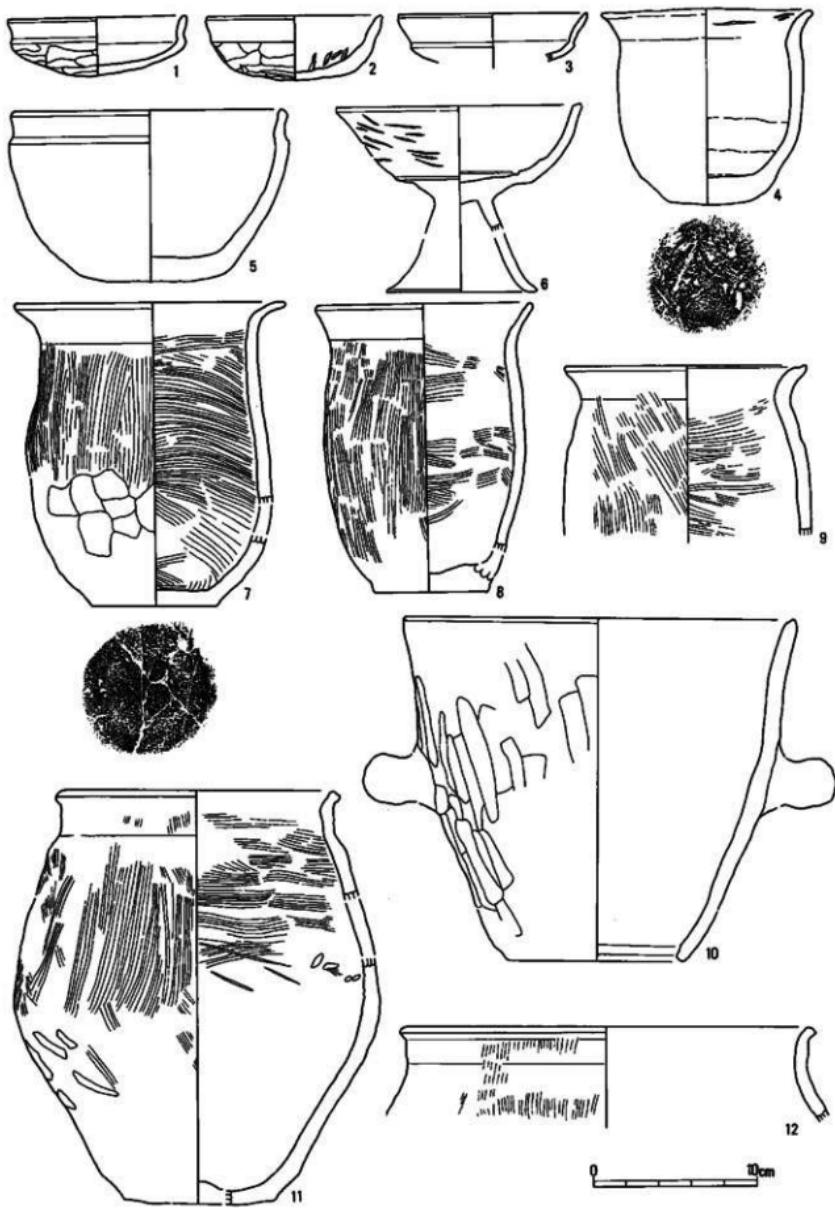


第11図 第1号住居跡

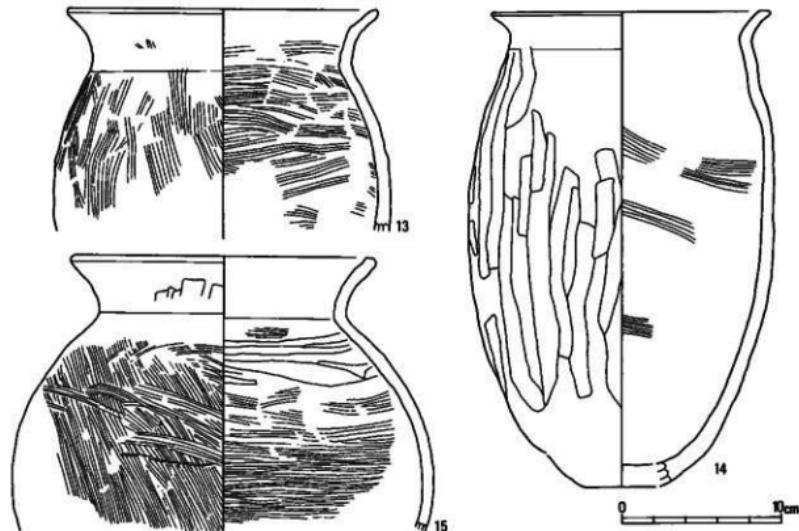
部及び脚部外面はヘラミガキ、器体部脚部内面はナデ調整が施される。胎土は緻密、焼成良好、色調は、茶褐色を呈する。7～9は小型甕で、7は口径16.7cm、器高18.5cm、底径7.8cmを測り、胴部下半に膨らみをもつ。胎土は砂粒含みやや粗く、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。8は口径13.6cm、器高17.5cm、底径7.5cmを測り、胎土は砂粒含み、焼成良好、色調は赤褐色。9は口径15.2cmで胎土は砂粒含み、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。いずれの土器も口縁部ナデ調整、器体部外面及び内面ハケ調整が施され、7については器体部外面下半部にヘラ削り、底部には木葉痕が見られる。10は甕で口径24.3cm、器高20.8cm、底径10.8cm。把手が2ヵ所に見られる。口縁部はナデ調整、器体部外面はヘラ削り、内面はナデ調整が見られる。胎土は、砂粒含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。11～15は甕で、11は、口径18.2cm、器高25.2cm、底径9.3cm。口縁部はナデ調整、器体部内外面ハケ調整が見られる。胎土は砂粒含みやや粗く、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。12は口径25.8cm、口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整。胎土は、砂粒含みやや粗く、焼成良好、色調は、赤褐色を呈する。13は口径19.8cm。口縁部ナデ、器体部内外面ハケ調整が見られる。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。14は口径17.0cm、器高30.2cm、底径4.5cm。口縁部ナデ、器体部ヘラ削り、内面ハケ調整。胎土は緻密で、やや焼きムラが見られ、色調は赤褐色を呈する。15は口径19.3cm。口縁部ナデ調整器体部内外面ハケ調整がみられ、胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。

◎第5号住居跡（第14図）

B-4・5、C-4グリッドに位置する。一辺が5.3mの隅丸方形を呈する。壁高は45cmで緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土主体で、焼土・カーボンが含まれる。覆土中には、多量の20～60cm大の礫が投げ込まれた状況が伺え、その間には土器も確認されている。住居跡北側コーナー付近と南側壁中央に周溝が見られる。北側の周溝



第12図 第1号住居跡出土土器 (1)



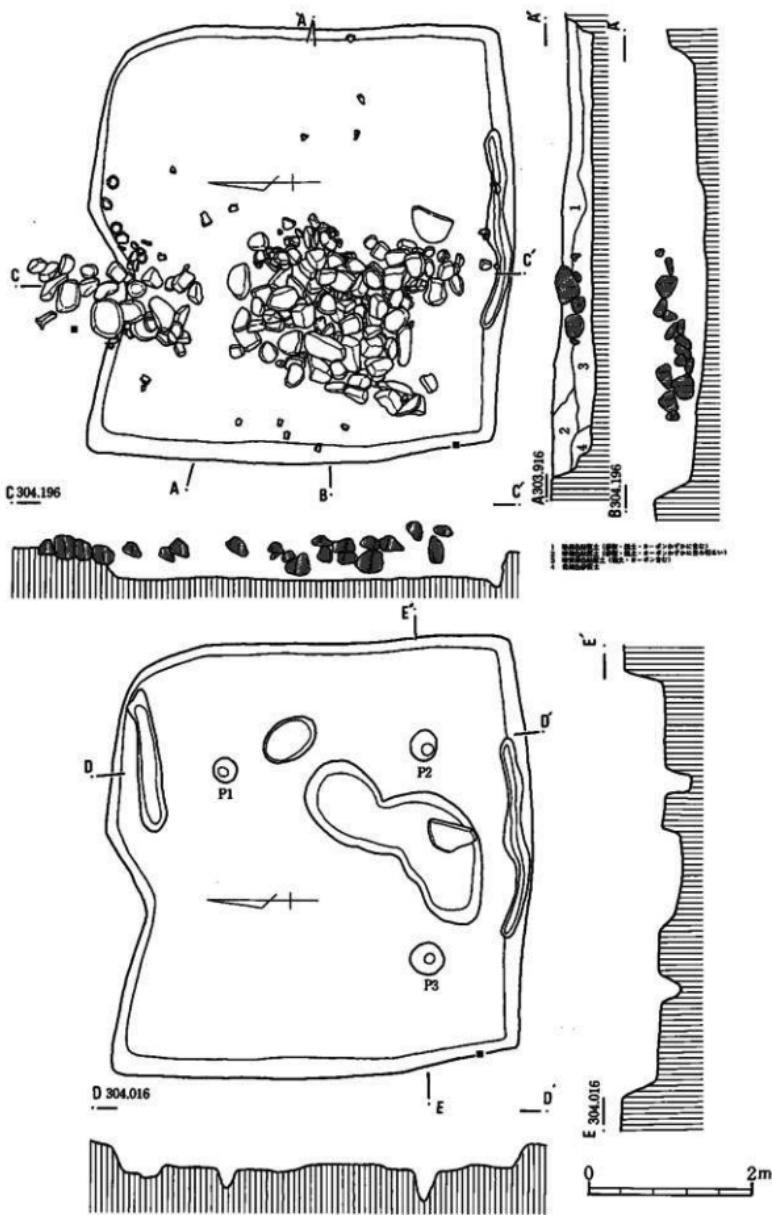
第13図 第1号住居跡出土土器（2）

は長さ1.8m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。南側の周溝は長さ2.45m、幅0.15~0.25m、深さ0.15mを測る。ピットは3基確認されており、ピット1は直径0.30m、深さ0.40m。ピット2は長径0.38m、短径0.30m、深さ0.24m。ピット3は長径0.42m、短径0.40m、深さ0.20mを測る。床面は黄褐色砂質土層で、踏み固められたような痕跡は検出できなかった。カマドは、住居跡北側壁の中央で、焼土が若干認められ、カマドが構築されていたと思われるが礫の混入などによって検出できなかった。

○出土遺物（第15図）

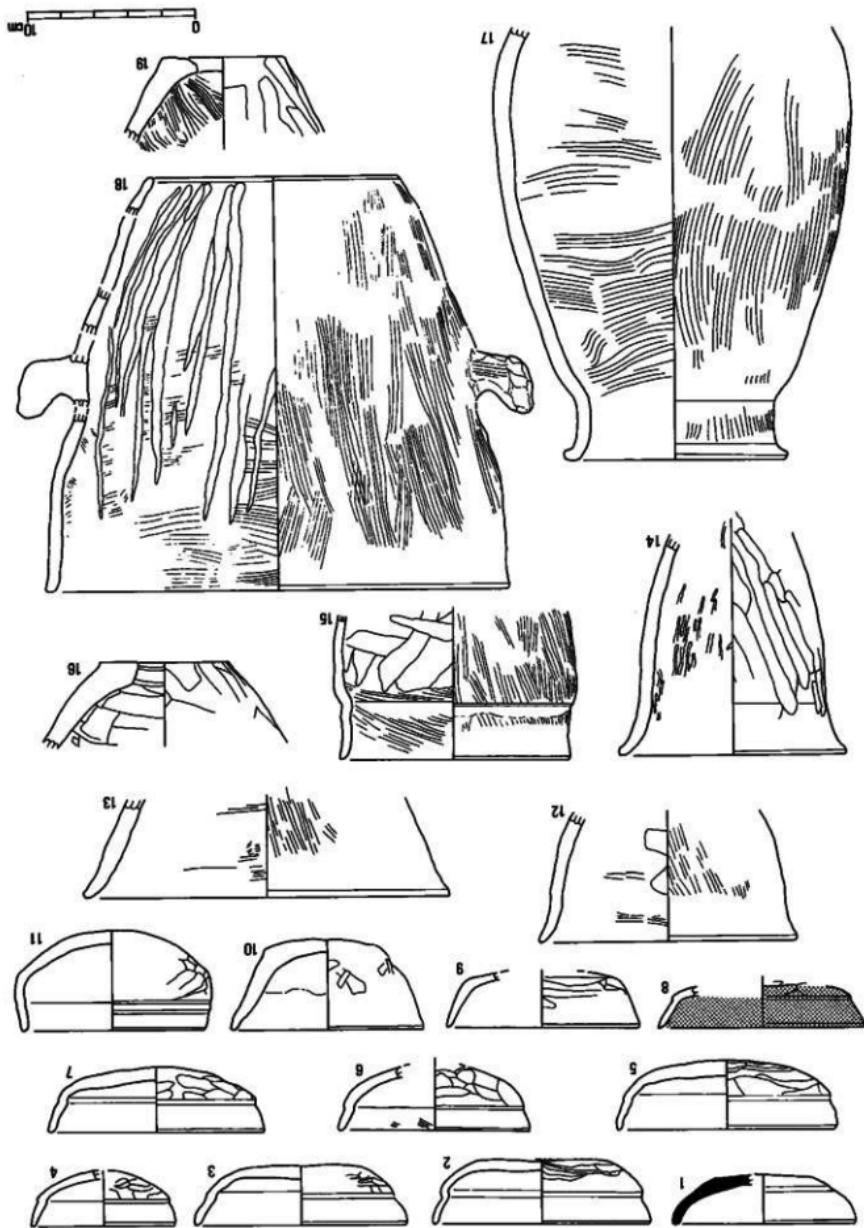
図示したものは壺・甕・瓶など19点である。

1は須恵器の壺で、口径11.0cm、器高2.9cm、底径5.8cm。器体部内外面ナデ調整、器体部底面は回転ヘラ削りが施される。胎土は緻密、焼成良好、色調は灰褐色を呈する。2~9は土師器の壺で、2は口径13.2cm、器高3.8cm、底径7.6cm。胎土は緻密で赤色粒子含む。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。3は口径12.8cm、器高3.6cm。胎土はやや粗く、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。4は口径8.6cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。5は口径13.2cm、器高4.1cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は黒褐色を呈する。6は口径11.6cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は明褐色を呈する。7は口径13.0cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は暗黒褐色を呈する。8は内外面とも赤色塗彩され、口径12.4cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。9は口径11.6cm。胎土は緻密、外面上半及び内面はナデ、外面下半部はヘラミガキが施される。2~8はいずれも外面上半及び内面はナデ、外面下半部はヘラ削りで器面調整されている。10~11は碗で、10は、口径11.4cm、器高5.5cm、底径2.7cmで、胎土は長石・石英・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は褐色を呈する。11は口径11.0cm、器高6.0cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。12~15は甕で、12は口径15.6cm。口縁部ナデ、外面及び内面ハケ調整が施される。胎土は長石含み粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。13は口径22.2cm。口縁部ナデ調整、内面及び外面ハケ調整が施される。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。14は口径13.8cmで、口縁部ナデ調整、外面ヘラ削り、内面ミガキが施される。胎土は、長石・石英・赤色粒子含み粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。15は鉢と思われ、口径15.0cm。口縁部はナデ、外面・内面

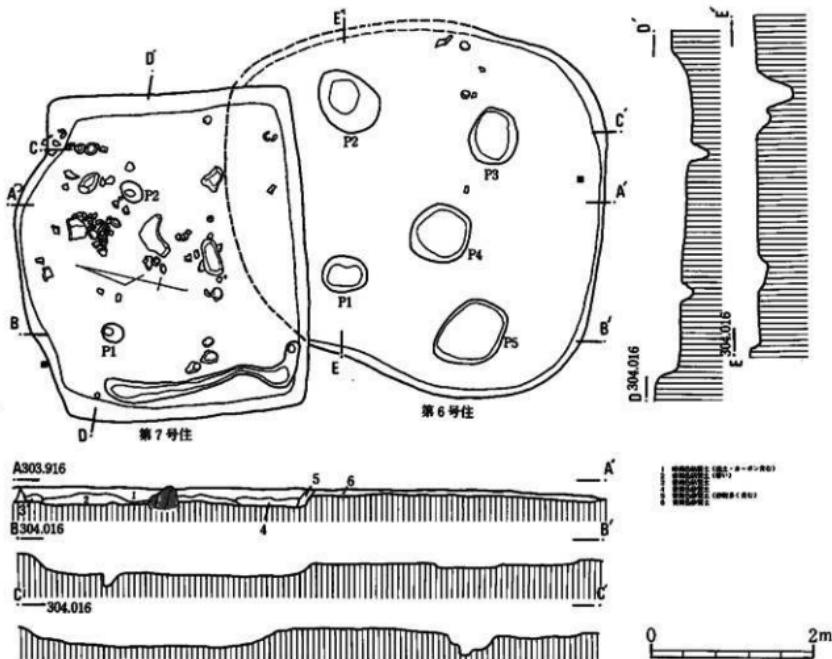


第14図 第5号住居跡

第15圖 第5住處所出土土器



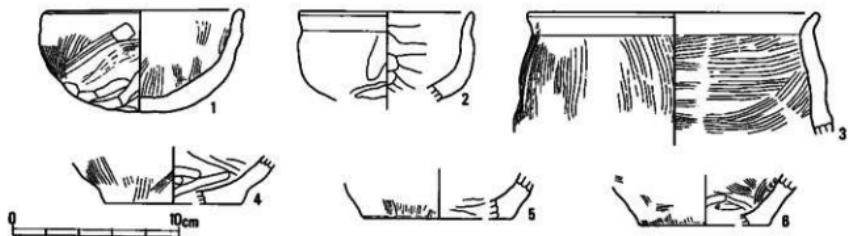
上半はハケ調整、下半はヘラ削りが見られる。胎土は緻密で赤色粒子含み、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。16は瓶で底径7.6cmで、内外面ヘラ削りが見られる。胎土は長石・赤色粒子を多く含み粗い。焼成良好、色調は褐色を呈する。17は甕で口径13.4cm。口縁部ナデ調整、内外面ハケ調整が見られる。胎土は長石多く含みやや粗く、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。18は瓶で口径27.8cm、器高24.5cm、底径15.0cm。把手が2カ所見られる。口縁部ナデ調整、内外面ハケ調整、内面はハケ調整後ミガキが施される。胎土は、長石・石英含み粗く、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。19も瓶で、底径7.2cmを測る。外面ヘラ削り、内面ハケ調整が見られる。胎土は、石英・長石含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。



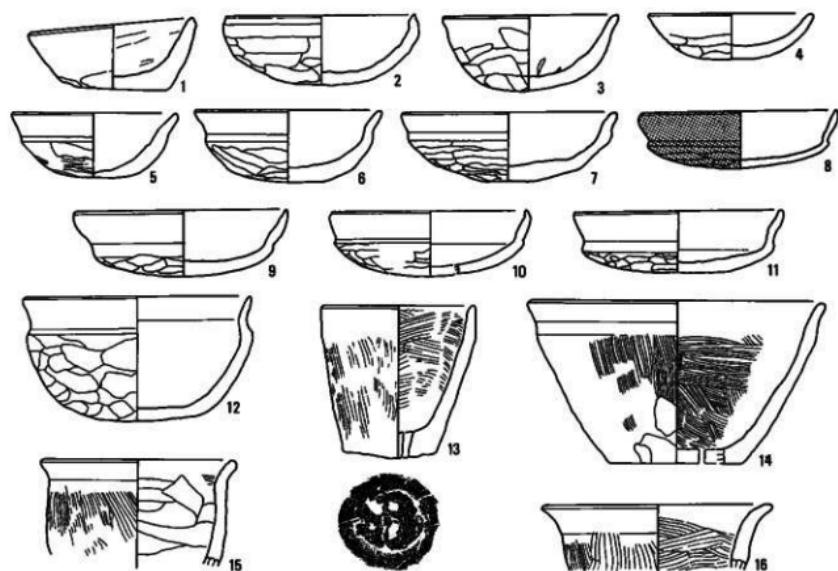
第16図 第6・7号住居跡

○第6・7号住居跡（第16図）

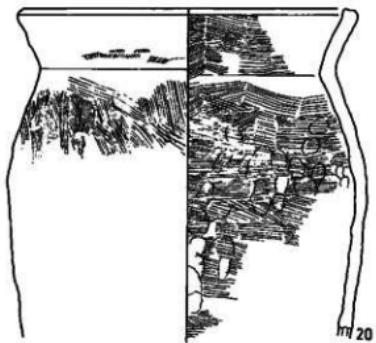
B・C-2・3、D-3、C-4グリッドに位置する。第6号・第7号住居跡は重複しており、第6号住居跡南側は第7号住居跡によって切られている。第6号住跡は推定長径4.6m、短径4.3mの不整円形を呈する。残存状態は悪く壁高は0.1mで覆土もほとんど見られない状況である。床は中央部が良好であるが、周辺では軟弱な状況であった。ピットは5基確認されている。ピット1は、長径0.55m、短径0.45m、深さ0.15m。ピット2は、長径0.85m、短径0.65m、深さ0.45m。ピット3は、長径0.70m、短径0.60m、深さ0.10m。ピット4は、長径0.80m、短径0.70m、深さ0.15m。ピット5は、長径1.00m、短径0.75m、深さ0.25mを測る。カマドは検出できなかった。第7号住居跡は、長径4.0m、短径3.5mの隅丸方形を呈する。覆土は、暗褐色土主体で、焼土・カーボンを含む。壁は、20cmで緩やかに立ち上がる。床は、中央部が良好であるが、周辺では軟弱な状況である。住居跡西側に周溝が見られ、長さ1.30m、幅0.1m～0.25mを測る。ピットは、2基確認され、ピット1・2とも長径0.30m、短径0.20m、深さ0.20mを測る。カマドは、北側に焼土が散在しており、付近に構築されていたものと思われる。



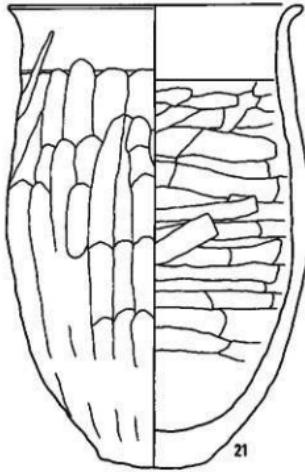
第17図 第6号住居跡出土土器



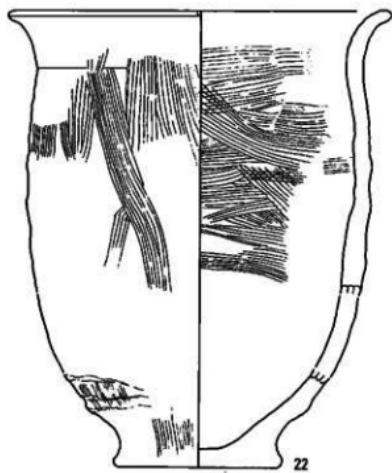
第18図 第7号住居跡出土土器(1)



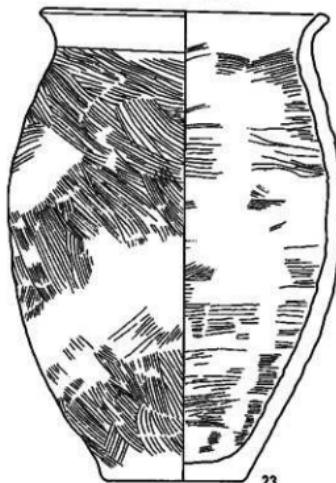
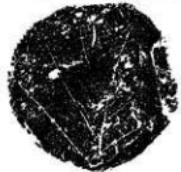
20



21



22



23

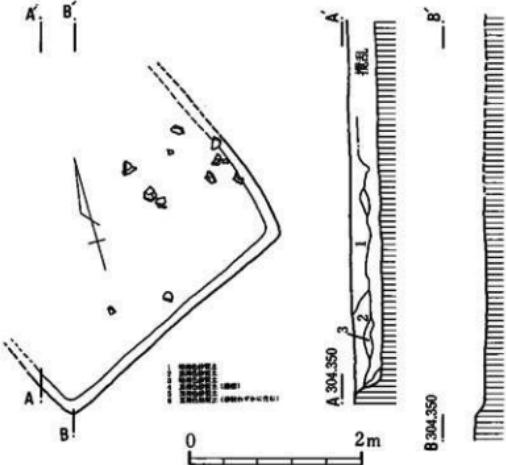


第19図 第7号住居跡出土土器 (2)

◎出土遺物（第6号住居跡 第17図・第7号住居跡 第18図）

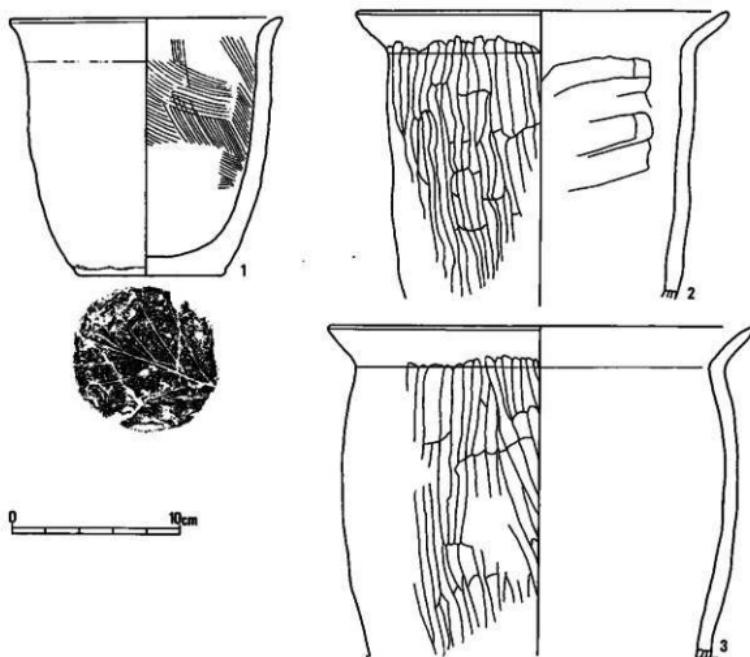
6号住居跡は6点図示した。1は土師器坏で、口径12.1cm、器高6.1cmを測る。口縁部ナデ調整、器体部上半及び内面ハケ調整、器体部下半にはヘラ削りで器面調整されている。胎土は、長石・石英・金雲母・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は黒褐色を呈する。2は楕で口径10.8cm。口縁部はナデ調整、器体部外面はヘラ調整が施される。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は暗褐色を呈する。3は甕で、口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施される。胎土は、長石含みやや粗く、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。4は甕の底部破片で、底径8.2cmを測る。外面ハケ調整、内面指ナデ調整が見られる。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は赤褐色を呈する。5も甕の底部破片で、底径8.8cm。内外面ハケ調整、胎土は長石多く含み粗い。焼成良好、色調は赤褐色を呈する。6も甕の底部破片で、底径7.8cm。胎土は緻密。焼成良好、色調は暗褐色を呈する。

7号住居跡は23点図示した。1~11は土師器坏で、いずれも外面上半及び内面ナデ調整、外面下半ヘラ削りの器面調整している。1は口径10.3cm、器高3.9cm、底径3.4cmを測る。外面及び内面ナデ調整、底部ヘラ削り、胎土は、長石・石英・赤色粒子・金雲母含み粗い。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。2は口径12.0cm、器高4.2cmを測り、胎土は長石含みやや粗く、焼成良好、色調は明褐色を呈する。3は口径10.8cm、器高4.5cmを測る。胎土は緻密で、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。4は口径10.2cm、器高2.8cm、底径4.0cmを測る。胎土は、緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。5は口径10.3cm、器高4.0cmで、胎土は長石・石英・金雲母・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。6は口径11.4cm、器高4.4cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。7は口径13.2cm、器高4.3cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。8は外面に赤色塗彩が施され口径12.2cm、器高3.7cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。9は口径13.0cm、器高4.0cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は黒褐色を呈する。10は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。胎土は緻密、焼成良好、色調は褐色を呈する。11は口径12.8cm、器高3.1cmを測り、胎土は緻密、焼成良好、色調は明褐色を呈する。12は楕で、口径14.0cm、器高7.7cmで、胎土は緻密、焼成良好、色調は明褐色を呈する。13~14は甕で口径9.6cm、器高6.0cm、底径9.2cmを測り、胎土は緻密で、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。14は口径18.4cm、器高4.9cm、底径8.2cmを測る。胎土は緻密で、焼成良好、色調は外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。15~23は甕で15は口径12.0cmで口縁部ナデ調整、外面ハケ調整、内面ヘラ削りが施される。胎土は長石・石英・金雲母・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。16は口径14.0cmで、口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整を施し、胎土は長石・石英・赤色粒子含み、焼成良好、色調は明褐色を呈する。17は口径18.0cmで口縁部ナデ調整、器体部内面及び外面はハケ調整を施す。胎土は緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。18は、甕の底部破片で、底径8.6cmを測る。外面ヘラ削り、内面ハケ調整が施される。胎土は、緻密で、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。底部に木葉痕が見られる。19は甕の底部破片で、底径9.4cm、外面ヘラ削り、内面ハケ調整、胎土は緻密、焼成良好、底部に木葉痕



第20図 第8号住居跡

が見られる。20は甕で、口径20.2cm。口縁部ナデ調整、内外面ハケ調整が見られる。胎土は、緻密、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。21も甕で、内外面ヘラケズリを施す。口径17.6cm、器高27.6cm、底径6.3cmを測る。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。底部に木葉痕が見られる。22も甕で、口径23.0cm、器高27.4cm、底径10.2cmを測り、口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整を施す。胎土は緻密、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。底部に木葉痕が見られる。23も甕で、口径20.2cm、器高27.6cm、底径6.3cmを測る。胎土は緻密、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。また、本住居跡から土製スプーン（第103図-4）が出土している。



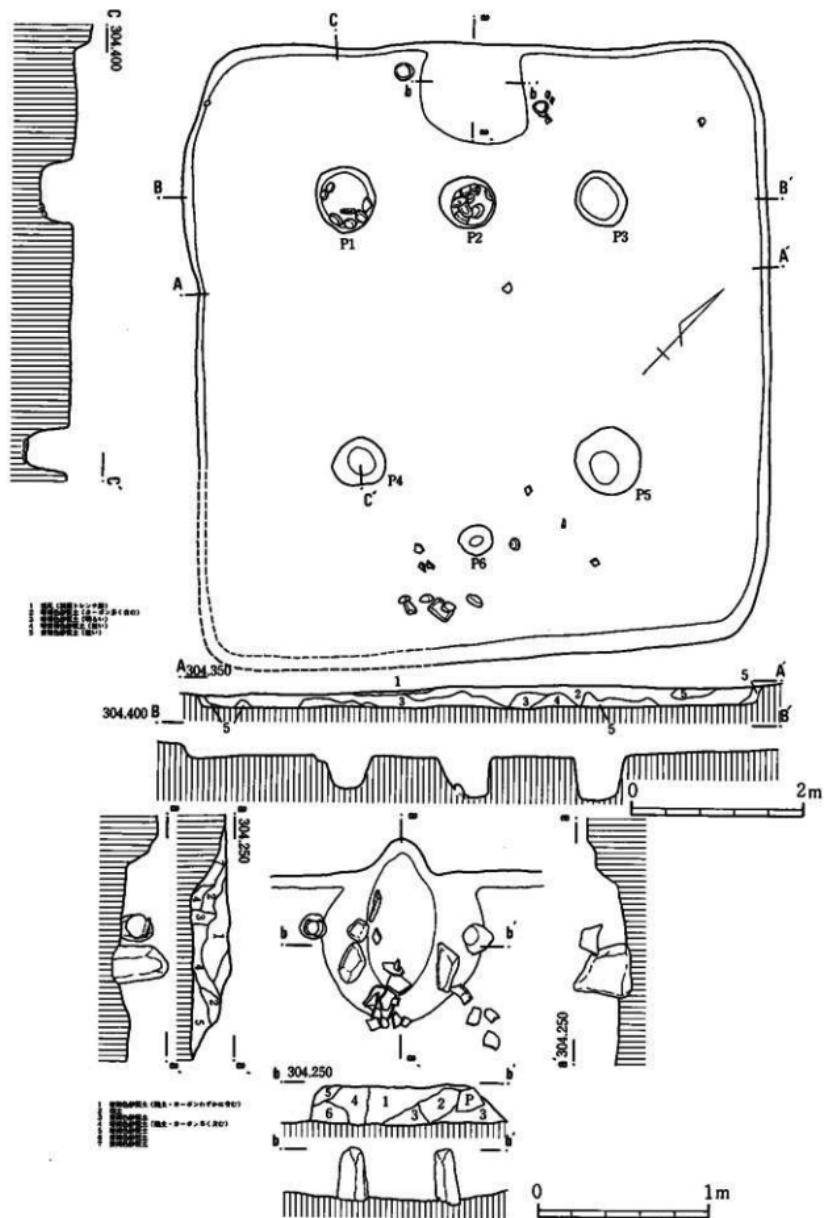
第21図 第8号住居跡出土土器

○第8号住居跡（第20図）

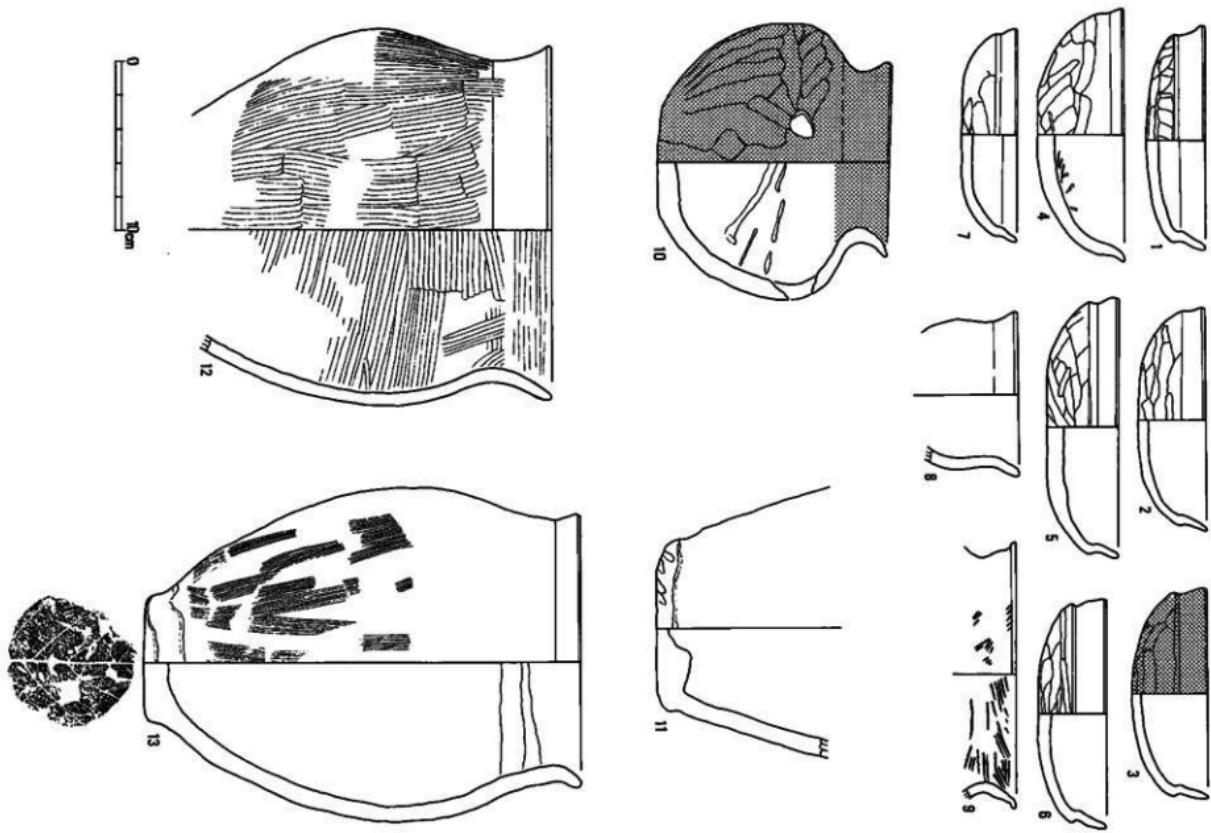
F-12・13、G-12・13グリッドに位置する。擾乱により住居跡北側プランは確認できなかったが、1辺が3.5m程の隅丸方形を呈すると思われる。覆土は暗褐色土を主体とし、壁は15cm程で立ち上がる。床は軟弱で、カマド及びピットは検出できなかった。

○出土遺物（第21図）

3点図示した。1～3はいずれも甕で、1は小型甕で、口径16.5cm、器高15.7cm、底径8.8cmを測る。外面は剥離により不明、内面はハケ調整が施される。底部には木葉痕が見られる。胎土は長石・石英含み粗く、焼成はやや良、色調は赤褐色を呈する。2は甕の口縁部で、口径22.4cm。口縁部はヘラによるミガキ、内面はヘラ削りが見られる。胎土は、長石・金雲母含み粗く、焼成はやや良で、褐色を呈する。3も2同様甕の口縁部で、口径25.4cm。器面調整も2と同じで、口縁部及び内面ナデ調整、外面はヘラによるミガキが施される。胎土は長石・石英を含み粗く、焼成良好、色調は明褐色を呈する。



第22図 第9号住居跡・同住居跡カマド



第23圖 第9号住居跡出土土器

◎第9号住居跡（第22図）

F・G-11・12、H-11グリッドに位置する。長辺7.3m、短辺6.9mの隅丸方形を呈する大型の住居跡である。南側コーナーはプランが検出できなかった。壁は20cm程でほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に良好である。ピットは6基確認されているが、そのうちピット2・6は支柱穴であろう。ピット1は、長辺0.80m、短辺0.70m、深さ0.35m。ピット2は、長辺0.70m、短辺0.60m、深さ0.50m。ピット3は、長辺0.70m、短辺0.60m、深さ0.45m。ピット4は、長辺0.65m、短辺0.55m、深さ0.50m。ピット5は、直径0.80m、深さ0.42m。ピット6は長辺0.45m、短辺0.35m、深さ0.25mを測る。カマドは住居跡北西側の壁に中央に構築されている。カマドの残存状態は良好で、30cm大の平石を使用している。堀り方は長辺1.10m、短辺1.00mを測る。焼土は10cm程堆積している。

○出土遺物（第23図）

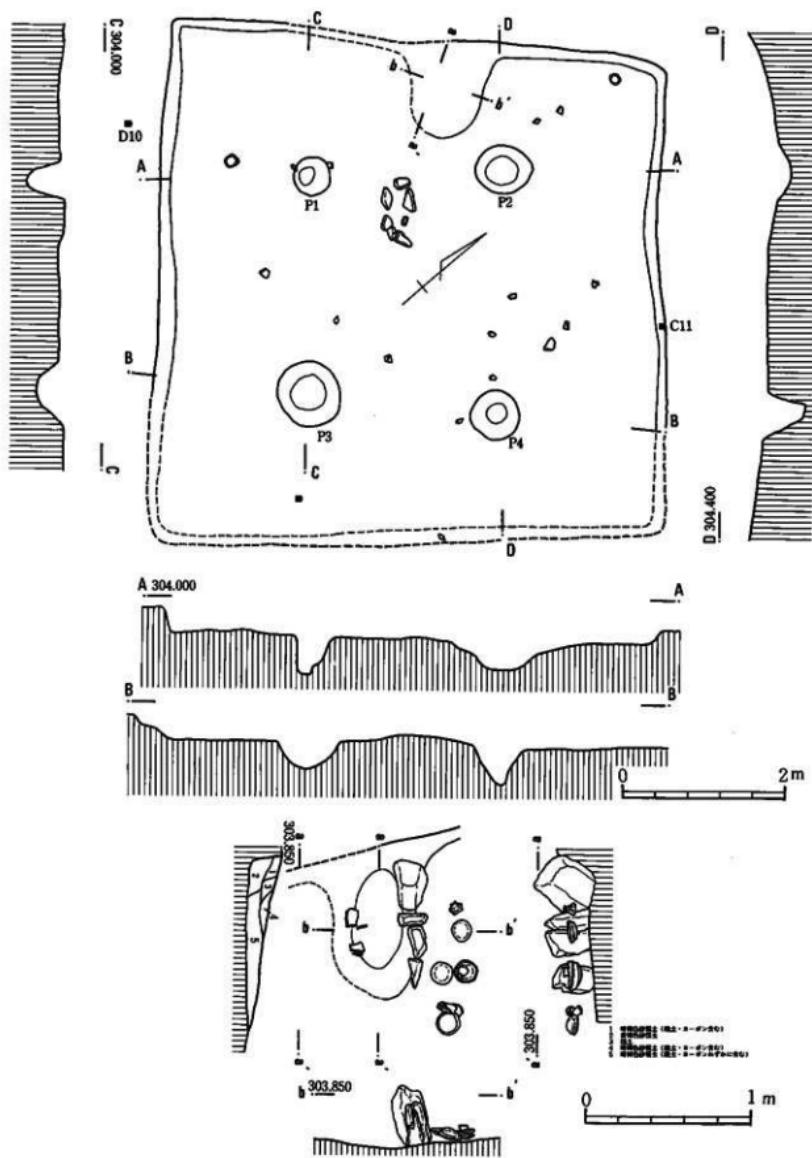
13点図示した。1～7は土師器坏。10は壺。8・9・11～13は甕。1～7はいずれも、外面上半及び内面、外面下半部にはヘラ削りによる器面調整が施されている。1は口径13.3cm、器高3.7cm。胎土は緻密で、焼成良好、色調は黒褐色を呈する。2は口径13.5cm、器高4.0cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は黄褐色を呈する。3は外面が赤色塗彩され、口径12.7cm、器高4.5cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。4は口径15.0cm、器高5.3cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。4は口径15.0cm、器高5.3cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。5は口径15.7cm、器高4.0cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。6は口径13.2cm、器高4.0cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。7は口径12.7cm、器高3.3cm。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。8は小型甕で口径10.0cm。外面ともナデ調整。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。9は甕の口縁部で、口径16.0cm。外面ともハケ調整が施される。胎土は砂粒含みやや粗く、焼成やや良、色調は赤褐色を呈する。10は壺で、口径11.6cm、器高13.7cm、底径6.2cm。口縁及び内面はナデ調整、外面下半はヘラミガキが施される。胎土は緻密、焼成良好、色調は黄褐色を呈する。外面全体、内面口縁部に赤色塗彩されており、胴部には、焼成後による穿孔が見られる。11は甕の底部破片で底径10.4cm。外面ともナデ調整、胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色である。12は甕で、口径21.0cm。口縁部外面はナデ調整、外面及び内面はハケ調整が施される。胎土は緻密、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。13は甕で、口径16.5cm、器高26.5cm、底径7.5cmを測る。外面上半及び内面ナデ調整、外面下半はハケ調整が施される。また、底部には木葉痕が見られる。

◎第13号住居跡（第24図）

B・C・D-10、C-9・11グリッドに位置する。一辺が6.2mの隅丸方形を呈する。住居跡北西側カマド左脇及び住居跡南側は攪乱により破壊されている。床の状況は中央部において良好であるが、周辺は軟弱である。壁は、西側及び東側で、ほぼ直角に約30cmほどで立ち上がる。ピットは4基確認され、ピット1は、直径0.45m、深さ0.30m。ピット2は、長辺0.70m、短辺0.60m、深さ0.20m。ピット3は、長辺0.80m、短辺0.75m、深さ0.50m。ピット4は、直径0.60m、深さ0.50mを測る。カマドは、住居跡北西側の壁に構築されるが、カマド左側は、攪乱により破壊されている。右側の残存している部分では、袖石が確認されている。袖石は25cm～40cm大の平石を用いている。焼土の堆積は10cmほど見られる。カマド右側には、坏が重なっている状態で出土している。

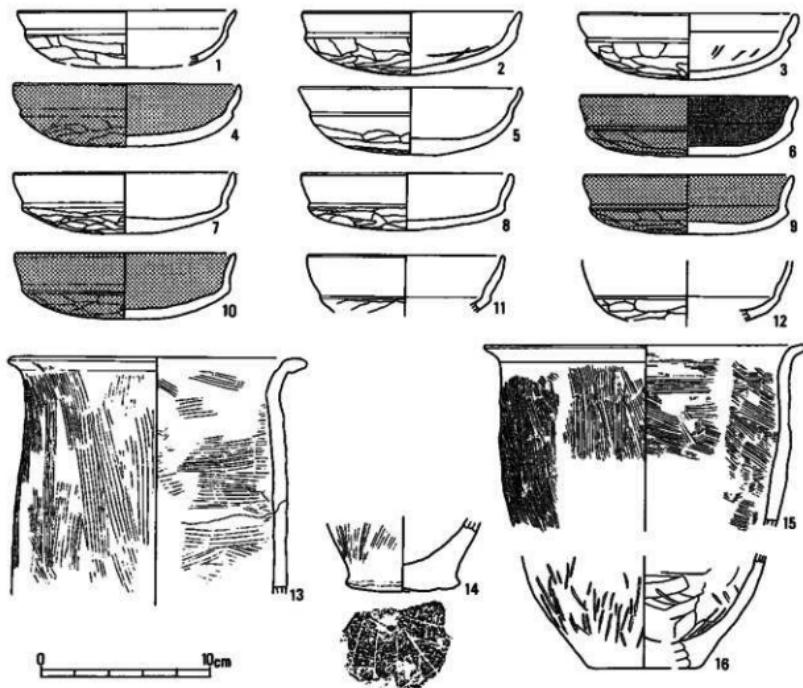
○出土遺物（第25図）

1～12が土師器坏、13～16が甕で、16点図示した。1～12は土師器坏で器体部上半及び内面はナデ調整、器体部下半はヘラ削りで器面調整されている。1は口径12.9cm。胎土は、長石・金雲母・赤色粒子を含み緻密である。焼成良好、色調は褐色を呈する。2は口径13.2cm、器高4.0cm。胎土は緻密で長石・金雲母・赤色粒子含み、焼成良好、色調は褐色を呈する。内面底部付近には、「X」の線刻が見られる。3は口径12.8cm、器高4.0cm。胎土は、長石・赤色粒子が含まれ緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。4は内外面赤色塗彩され口径13.5cm、器高3.8cm。胎土は、長石・赤色粒子・金雲母含み緻密で、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。5は口径13.3cm、器高4.0cm。胎土は赤色粒子・金雲母含み緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。6は外面赤色塗彩され、内面は黒色



第24図 第13号住居跡・同住居跡カマド

処理を施す。口径12.8cm、器高3.6cm。胎土は赤色粒子（大）・長石含みやや粗く、焼成良好、色調は外面赤褐色、内面黒褐色を呈する。7は口径13.1cm、器高3.7cm。胎土は、赤色粒子・金雲母を含み緻密で、焼成良好、色調は

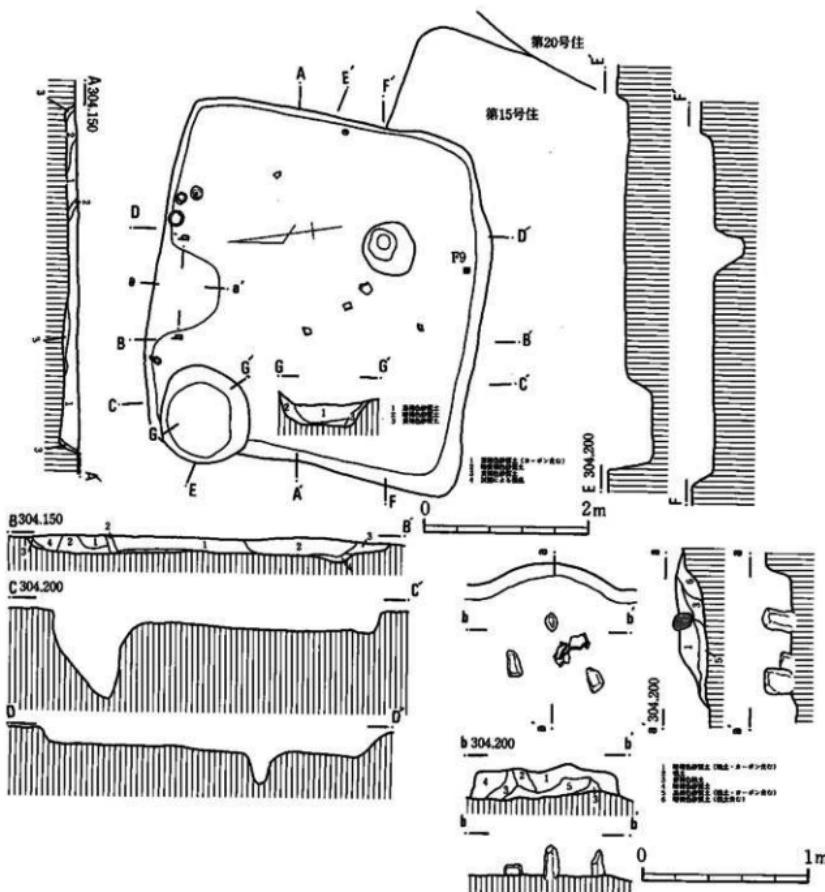


第25図 第13号住居跡出土土器

茶褐色を呈する。8は口径12.7cm、器高3.5cm。胎土は緻密で、金雲母・石英含む。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。9は内外面に赤色塗彩され、口径12.3cm、器高3.6cm。胎土は、緻密で金雲母・赤色粒子含む。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。10も内外面には赤色塗彩されている。口径13.2cm、器高3.9cm。胎土は赤色粒子・長石含み緻密。焼成良好、色調は赤褐色を呈する。11は口径11.6cm。胎土は赤色粒子・金雲母含み緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。12は口径12.6cm。胎土は緻密で赤色粒子・長石含み、焼成良好、色調は褐色を呈する。13は甕で口径18.0cm。口縁部ナデ調整、内外面ハケ調整が見られる。胎土は長石・赤色粒子含み緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。14は甕の底部破片で、底径6.8cm、外面ハケ調整が見られ、胎土は、長石（大）、赤色粒子（大）多く含みやや粗い。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。底部外面には、木葉痕が見られる。15は甕の上半部で、口径19.2cm。胎土は緻密で長石・赤色粒子含み、焼成良好、色調は褐色を呈する。16は甕の下半部で、口径12.6cm。胎土は緻密で赤色粒子含むが緻密で、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。

○第14号住居跡（第26図）

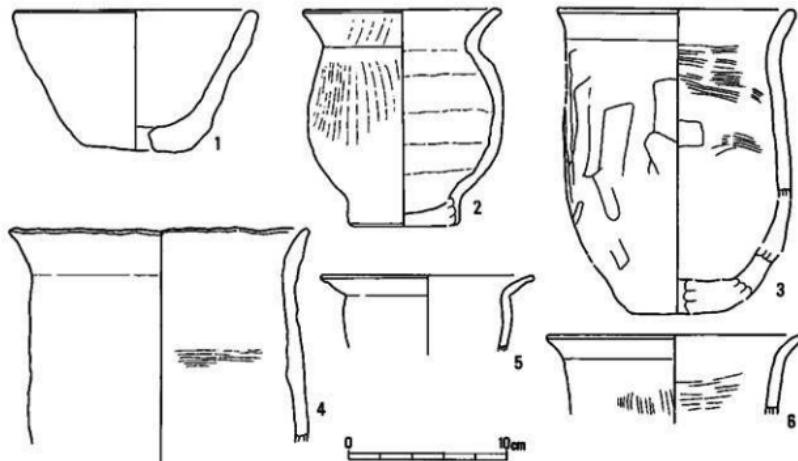
E・F-8・9グリッドに位置する。第14号住居跡は第15号住居跡と重複し、第15号住居跡に切られている。長辺4.1m、短辺4.0m、の隅丸方形を呈する。壁高は30cmでほぼ垂直に立ち上がり、覆土は黒褐色砂質土が主体となる。床面は全体的に軟弱で、しっかりとした床面は確認できなかった。カマド左脇住居跡コーナー付近には貯蔵穴と思われる土坑が確認されている。長径1.25m、短径1.10m、深さ0.40mを測り、覆土は、黒褐色砂質土が主体となる。ピットは1基確認され、直径0.65m、深さ0.40mを測る。カマドは、住居跡北側の壁中央部に構築され、袖石は両側に1カ所、カマド中央には石製の支脚が見られる。



第26図 第14号住跡・同住跡カマド

○出土遺物（第27図）

6点図示した。1は瓶で、内外面ナデ調整が施される。口径15.0cm、器高8.8cm、底径6.4cm。胎土は、長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。2は小型の甕で、口縁部及び内面ナデ調整が施され、口径12.4cm、器高13.7cm、底径7.2cmを測る。胎土は、長石・石英多く含み粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。3は甕で、口縁部内外面ナデ、器体部外面ヘラ削り、内面ハケ調整が見られ、口径15.2cm、器高19.2cm、底径5.6cm。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成はやや良、色調は赤褐色を呈する。4は、甕の胴部上半で、内外面ナデ調整、また、内面にはハケ調整が見られる。口径18.6cm。胎土は、石英・赤色粒子多く含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。5は、小型の甕で、口径13.6cm。内外面ナデ調整を施し、胎土は長石・含みやや粗い。焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。6は、口縁部ナデ調整、内外面ハケ調整が見られ、胎土は長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。また、土製のスプーン、土鉢が本住跡から出土している。（第103図1・3）。



第27図 第14号住居跡出土土器

○第18住居跡（第28図）

A-8・9、A'-8・9グリッドに位置する。長辺4.1m、短辺4.0mの隅丸方形を呈する。住居跡北側を除き、住居跡プランは、はっきりしない。また、住居跡東側のコーナーは、調査区域外に延びる。床は、黄褐色砂質土で、カマド周辺は固く踏み締められた痕跡が認められるが、全体的には軟弱である。壁高は、35cmで緩やかに立ち上がる。ピットは検出できなかった。カマドは、住居跡北西側の壁中央部に構築されている。袖石は、平石を両側一枚ずつ用いた状態で確認されている。また天井石が崩落している形で、検出されている。焼土は、最大で5cm程堆積している。

○出土遺物（第29図）

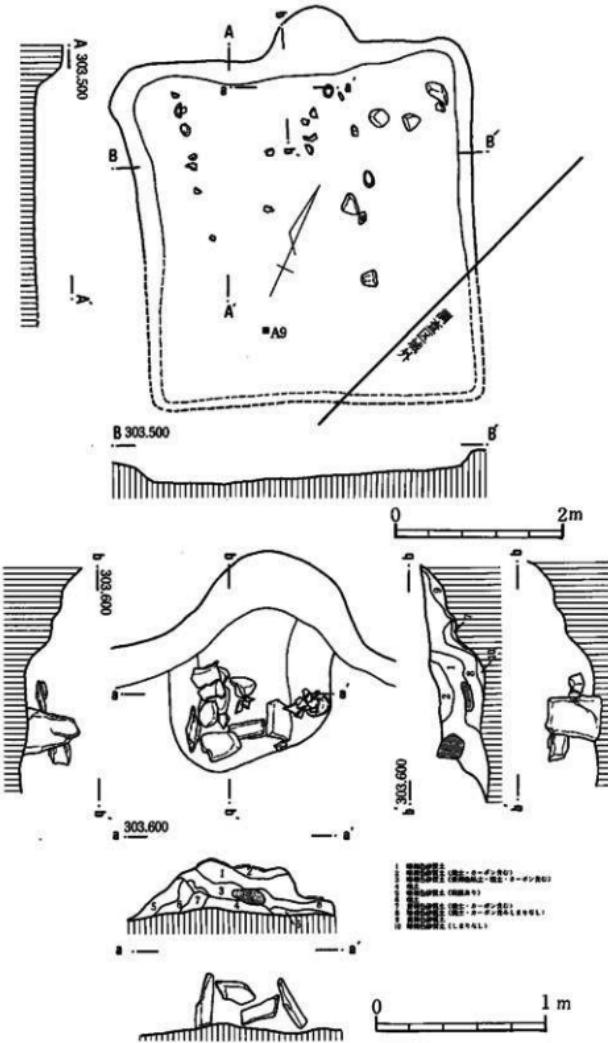
本住居跡の出土土器は、9点図示した。1は土師器坏で、口径12.4cmを測る。外面上半及び内面はナデ調整、外面下半はヘラ削りの器面調整が見られる。胎土は長石・金雲母・赤色粒子含み緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。2も土師器坏で、口径14.0cm、器高3.5cm、底径7.0cmを測る。器面調整は、外面下半及び内面ナデ調整、外面下半はヘラ削りが見られる。胎土は、緻密で長石を含む。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。3は須恵器模倣の土師器坏で、口径10.6cm、器高4.2cm、底径2.2cmを測る。内外面ナデ調整、底部にはヘラ削りが施される。胎土は、長石（大）含みやや粗く、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。4は鉢で、口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ調整が施される。胎土は、長石・石英・金雲母含みやや粗く、焼成良好、色調は明褐色を呈する。5は瓶で、口径16.0cm、器高9.7cmを測る。口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ調整が施される。胎土は、長石・石英・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は褐色を呈する。6は甌で、口径13.0cm、器高14.3cm、底径3.6cm。器体部外面上半及び内面ナデ調整、器体部外面下半ヘラ削りが見られる。胎土は、長石・石英・赤色粒子含みやや粗い。7は甌で、口径16.4cm、器高27.8cm、底径8.2cm。口縁部及び内面ナデ調整、外面ヘラ削りが施される。胎土は長石・赤色粒子・金雲母含みやや粗く、焼成良好、色調は、黄褐色を呈する。8は手捏土器で、口径4.6cm、器高4.9cm、底径3.6cmを測る。内外面ナデ調整が施され、長石・石英・赤色粒子・金雲母含み粗雑で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。9は甌の下半部で、底径4.4cmを測る。外面ヘラ削り、内面ハケ調整を施す。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は明褐色を呈する。

◎第20住居跡（第30・31図）

D-8・9、E-8・9グリッドに位置する。長辺5.0m、短辺4.9mの隅丸方形を呈し、第15号住と本住居跡北西側が重複している。遺物はカマド脇を中心に、遺物の出土量は多い。覆土は暗褐色砂質土が主体となる。床面は安定しており、全体的に良好である。壁高は45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。ピットは2基検出され、ピット1は、直径0.25m、深さ0.25m。ピット2は、長径0.50m、短径0.35m、深さ0.25mを測る。周溝などの施設は、検出されなかった。カマドは、住居跡北西壁中央に構築されているが、第15号住居跡により、本住居跡のカマド上部が崩壊している。袖石なども残存状態はよくないものの、検出されている。焼土の堆積も15cmと厚く堆積していた。

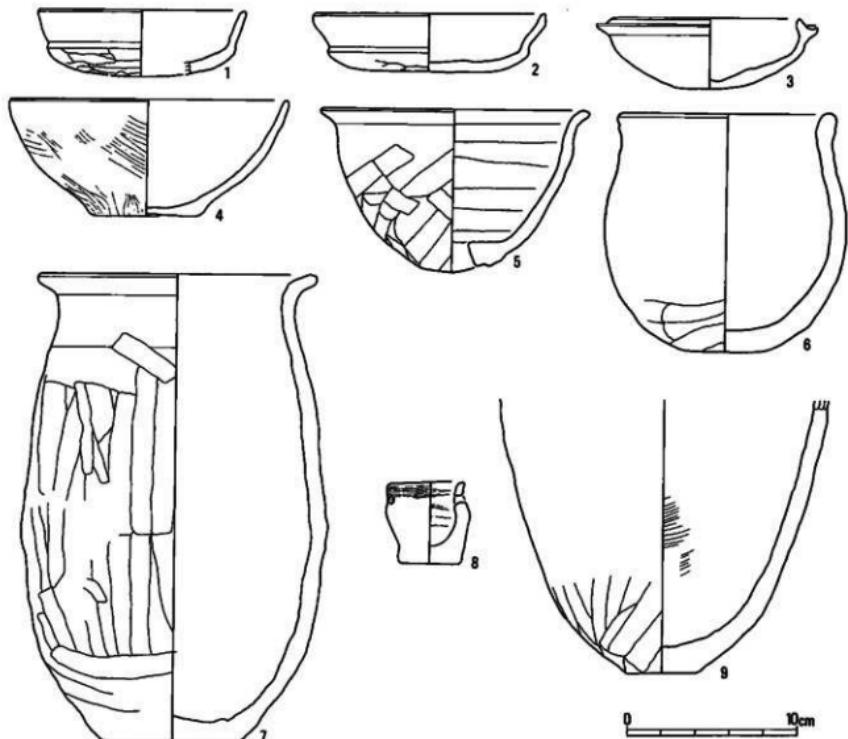
◎出土遺物（第32~33図）

本住居跡からは、遺物の出土量は多く、25点示した。1~9は土師器坏で、いずれも器体部外面上半及び内面ナデ調整、器体部外面下半はヘラ削りで、器面調整を施す。1は口径11.6cm、器高3.9cmを測る。胎土は、赤色粒子・金雲母含み緻密



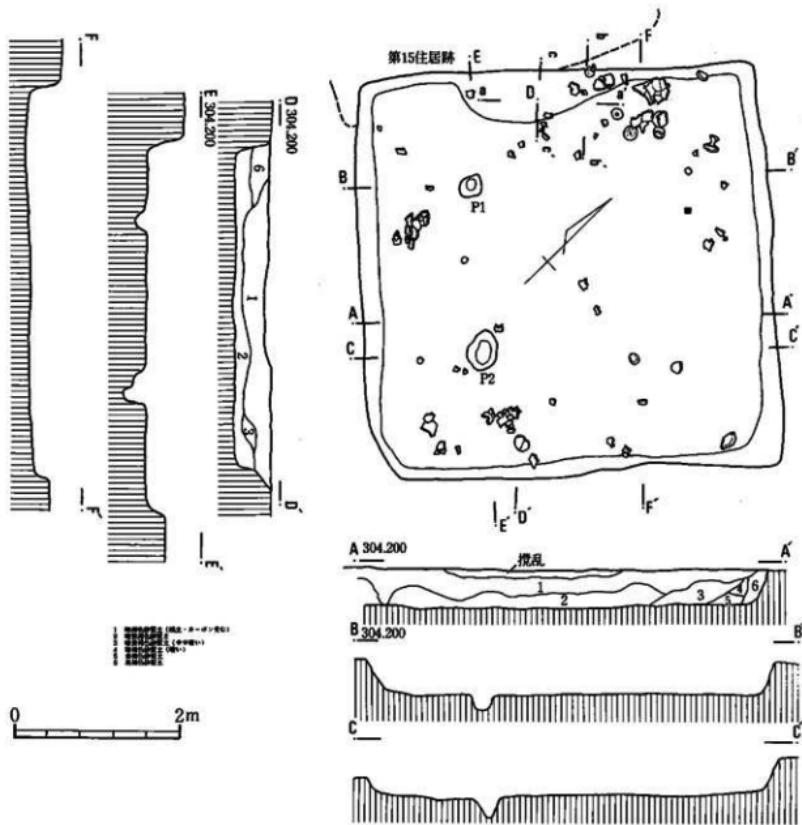
第28図 第18号住居跡・同住居跡カマド

で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。2は口径12.2cm、器高3.7cmを測る。胎土は、赤色粒子・金雲母含むが緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。3は内面が黒色処理されており、口径13.0cm、器高3.4cm。胎土は、赤色粒子・金雲母含み緻密で、焼成良好、色調は外面褐色、内面黒褐色を呈する。4は口径12.4cm。緻密で金雲母含む。焼成良好、色調は褐色を呈する。5は口径12.0cm、器高4.0cm。胎土は、長石・赤色粒子含み緻密。焼成良好、色調は褐色を呈する。6は口径12.0cm、器高3.8cm。胎土は金雲母・赤色粒子含み緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。7は口径11.8cm、器高3.2cm。胎土は、金雲母・赤色粒子含むが緻密で、焼成良好、色調は明褐色を



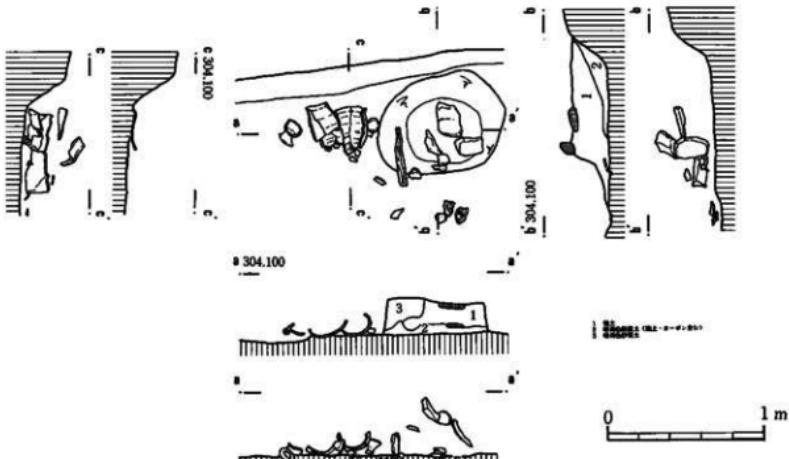
第29図 第18号住居跡出土土器

呈する。8は口径12.0cm、器高4.0cm。胎土は、長石・赤色粒子・金雲母含むが緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。9は口径12.3cm。胎土は緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。10は楕で、口径14.2cm、器高6.2cm、底径5.0cm。口縁部ナデ調整、器体部内外面はハケ調整が施される。胎土は石英・長石含みやや粗く、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。11は楕で口径13.8cm、器高8.5cm、底径7.7cm。口縁部及び内面上半ナデ調整、器体部外面ハケ調整、内面下半ヘラ削りが施される。胎土は、金雲母・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は黄褐色を呈する。12も楕で口径12.3cm、器高10.4cm、底径4.5cm。内外面ナデ調整が施される。胎土は、長石・赤色粒子・石英含みやや粗い。焼成良好、色調は褐色を呈する。13は鉢で内面黒色処理されている。口径17.6cm、器高10.0cm、底径4.6cm。口縁部ナデ調整、器体部外面ヘラ削り、内面上半ナデ調整、内面下半は暗文状のミガキが施される。胎土は、緻密で、焼成良好、色調は外面褐色、内面黒褐色を呈する。14は楕？で、内面は黒色処理されている。口径13.2cm。胎土は長石・赤色粒子含み緻密で、焼成良好、色調は外面明褐色、内面黒褐色を呈する。15は鉢で、口径27.0cm、器高13.7cm、底径9.0cmを測る。口縁部及びナデ調整、外面ヘラ削りが施され、器面調整されている。胎土は緻密で石英含み、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。16は瓶で、口径18.0cm、器高12.4cm、底径4.0cmを測る。口縁部ナデ調整、外面下半及び内面ハケ調整で器面調整している。胎土は石英・赤色粒子含む。焼成良好、色調は黄褐色を呈する。17は高环で、口径14.8cm、器高10.9cm、底径10.1cm。环部上半内外面、脚部下半内外面ナデ調整、环部下半及び脚部上半ヘラ削り、环部内面底部にはヘラによる成形痕が見られる。また、脚部内面には指頭によるナデ調整が見られる。胎土は長石・石英・赤色粒子・金雲母含むが緻密で、焼成良好、色



第30図 第20号住居跡

調は茶褐色を呈する。18も高環で、坏部内面黒色処理が施される。口径16.3cm、器高13.5cm、底径10.5cm。坏部上半及び器受部内面、脚部外面下半及び脚部内面下半はナデ調整、坏部下半及び脚部上半部はヘラ削り、脚部内面は指頭によるナデ調整が施される。胎土は、長石・赤色粒子含むが緻密。焼成良好、色調は、外面明褐色、内面黒褐色を呈する。19は甕で、口径22.7cm、器高24.2cm、底径8.0cmを測る。口縁部及び内面ナデ調整、外面ヘラ削りが施される。胎土は、長石・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は明褐色を呈する。21は甕の上半部で、口径20.0cm。口縁部ナデ調整、器体部外面ヘラ削り、内面ナデ調整が施される。胎土は長石・石英・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は明褐色を呈する。21も甕で、口径16.2cm。口縁部及び内面ナデ調整、器体部外面はヘラ削りが施される。胎土は、長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は明褐色を呈する。22も甕の上半部で口径18.4cm。口縁部及び内面ナデ調整、外面器体部ヘラ削りが施される。胎土は、長石・赤色粒子含むが緻密。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。23は甕で口径14.0cm、器高27.8cm、底径5.7cmを測る。口縁部及び内面ナデ調整外面ヘラ削りを施す。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。24は甕で、口径19.7cm、器高32.0cm、底径5.5cmを測る。口縁部及び内面ナデ調整、外面ヘラ削りが施され、輪積み痕が明瞭に残る。胎土は、長石・石英・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は黄褐色を呈する。25も甕で、口径



第31図 第20号住居跡カマド

16.4cm。口縁部及び内面ナデ調整、外面ヘラ削り、内面底部は、指頭によるナデ調整が施される。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は暗褐色を呈する。

○第21号住居跡（第34図）

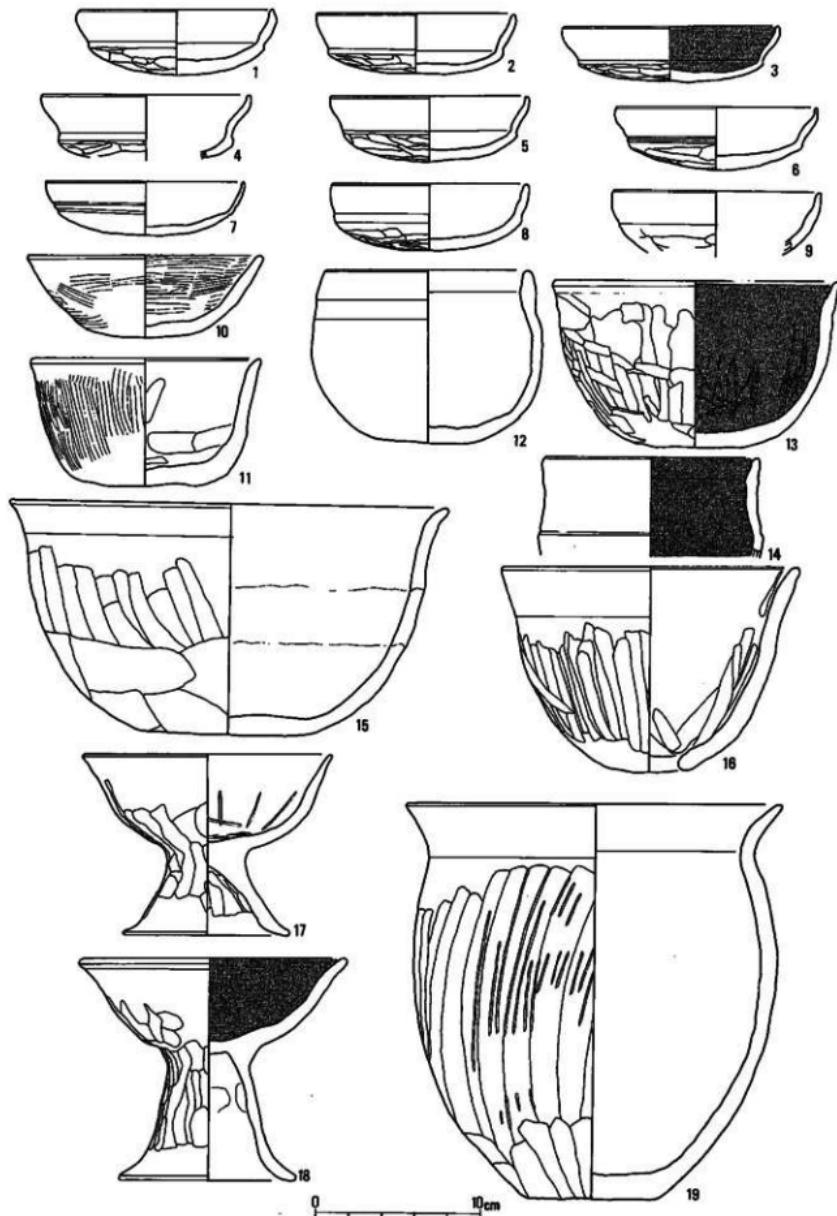
A-7・8、B-7グリッドに位置する。長辺5.5m、短辺4.3mの隅丸長方形を呈する。覆土は暗褐色砂質土が主体となり、焼土・カーボンが含まれる。住居跡北東壁際に、カーボンが床上に散在している。壁高は、25cm～40cmでほぼ垂直に立ち上がる。床面は、全体的に踏み締められ良好で安定している。カマドは住居跡北西壁中央に構築されており、袖石は長さ50cm、幅20cm程の平石を両側一枚ずつ用いている。また、天上石が2枚確認されたが、いずれも崩落している。カマド中央部に直径30cmほどの掘り込みが見られる。

○出土遺物（第35図）

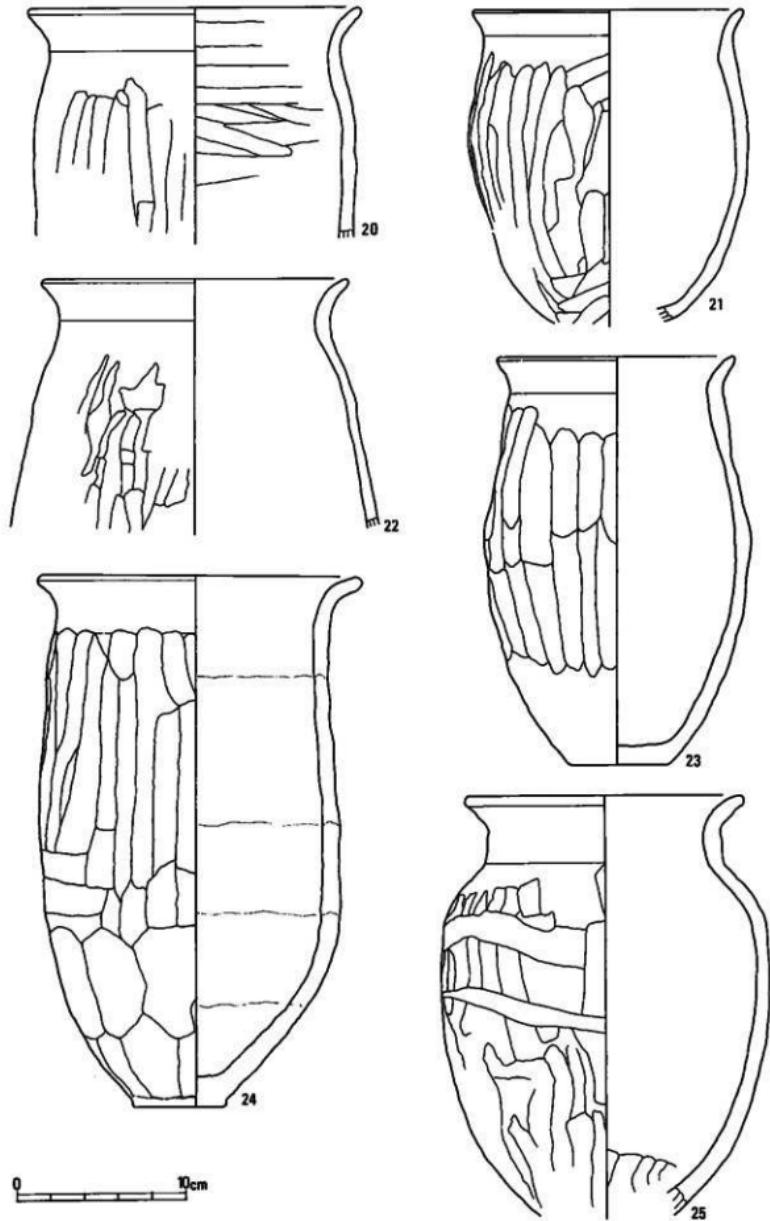
1は土師器坏で、口径12.0cm、器高4.4cm。器体部上半及び内面ナデ調整、器体部外面ヘラ削りで、器面調整を行う。胎土は、金雲母・赤色粒子含むが緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。2は椀で、口径13.6cm、器高7.1cm、底径8.5cm。内外面ともナデ調整を施す。底部には木葉痕が見られる。胎土は長石・赤色粒子・金雲母含むが緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。3は甕の口縁部で、口径21.6cm。外面ナデ調整、内面はミガキによる横方向と放射状暗文がみられる。胎土は長石・赤色粒子・金雲母含み緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。4は甕の底部破片で、底径8.7cm。内外面ともハケ調整を施す。底部には木葉痕がみられる。胎土は、長石・石英・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、色調は茶褐色を呈する。5も甕の底部破片で、底径8.2cm。外表面はミガキ、内面はナデ調整を施す。胎土は長石・赤色粒子含み緻密で、焼成良好、色調は褐色を呈する。6は甕の上半部で、口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整、内面上半は指頭痕、内面下半はハケ調整を施す。胎土は、長石・金雲母・赤色粒子含み緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。7は甕で、口径19.3cm、器高35.9cm、底径5.1cm。口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成良好、色調は褐色を呈する。8は甕の下半部で、底径8.8cm。外面ハケ調整後にミガキ、内面はハケ調整を施す。底部には木葉痕がみられる。胎土は緻密で、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。

○第22号住居跡（第36図）

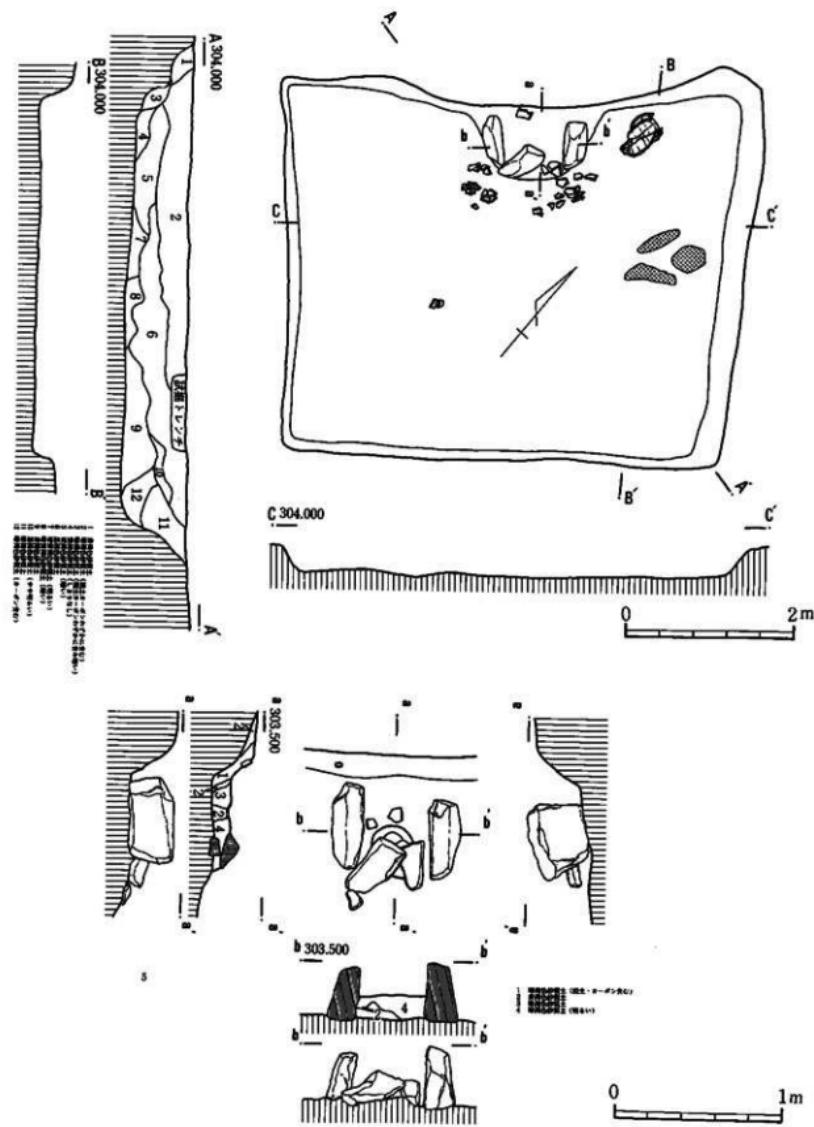
H-9、I-9・10グリッドに位置する。規模は、長辺4.7m、短辺3.3mの小判形を呈する。壁高は10cm程で緩やかに立ち上がる。床は、全体的に踏み締められ、黄褐色砂質土を呈する。住居跡東側には周堤がみられる。ま



第32図 第20号住居跡出土土器 (1)

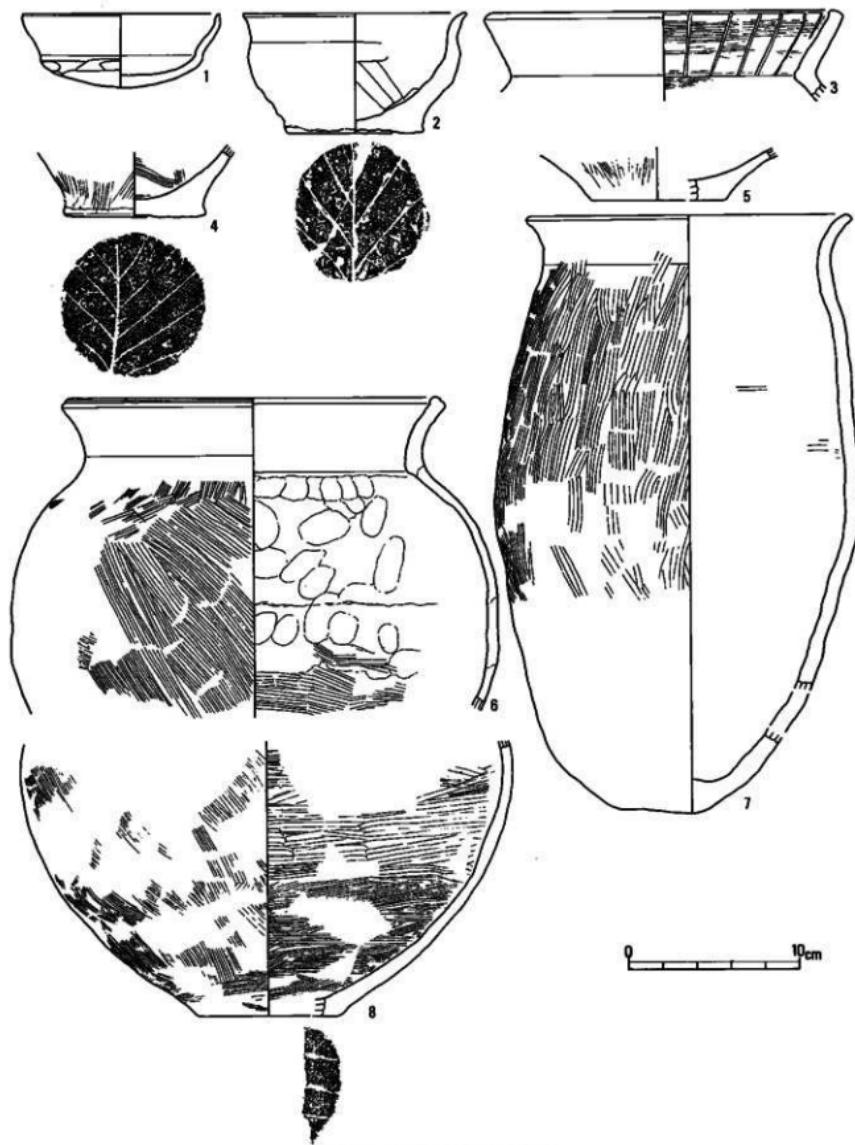


第33図 第20号住居跡出土土器（2）



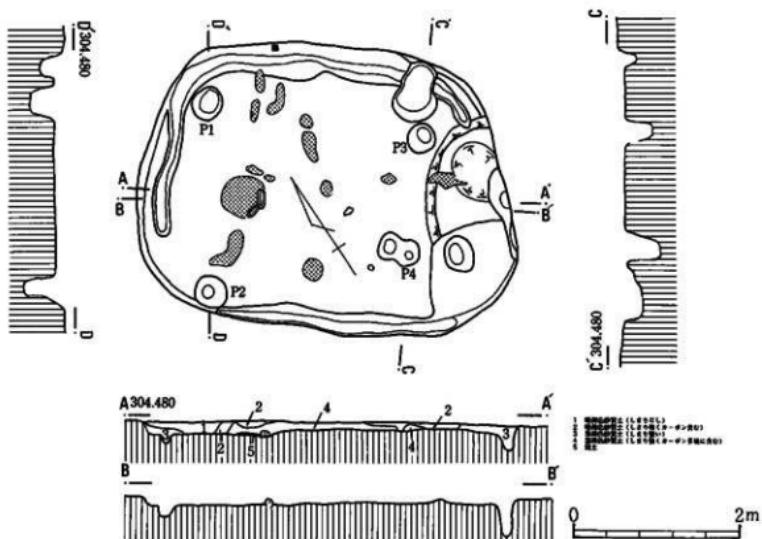
第34図 第21号住居跡・同住居跡カマド

た周溝がほぼ全周し、幅0.25m～0.4m、深さ0.1mを測る。ピットは4基確認され、ピット1は、長径0.40m、短径0.35m、深さ0.25m。ピット2は、直径0.40m、深さ0.40m。ピット3は、直径0.35m、深さ0.40m。ピット4は、



第35図 第21号住居跡出土土器

長径0.50m、短径0.35mの瓢箪型を呈し、深さ0.30mを測る。炉は、住居跡北西側中央部にみられ、直径50cmで枕石が検出されている。掘り込みは、10cmほどと浅く、焼土の堆積もほとんど見られなかった。また、炭化材が住居跡内に散在しており、火を受けた可能性も考えられる。



第36図 第22号住居跡

○出土遺物 (第37図)

1はS字状口縁台付甕の口縁部で、口径16.4cm。口縁部外面はナデ調整後、刺突文、内面はナデ調整後、ハケ調整が施される。胎土は、石英・金雲母長石含みやや粗い。焼成良好、色調は黒褐色を呈する。2は高环の口縁部で口径13.4cm。内外面ともナデ調整が施される。赤色粒子・石英含みやや粗い。

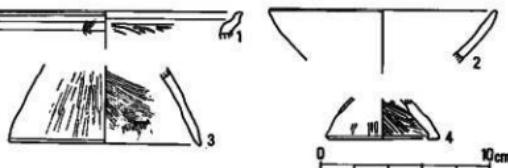
焼成良好、色調は暗黄褐色を呈する。3は台付甕の脚部で、底径11.4cm。外面はミガキ、内面はハケ調整がみられる。胎土は長石・石英・赤色粒子を多く含み粗い。焼成良好、色調は褐色を呈する。4も台付甕の脚部で、底径6.8cm。内外面ハケ調整を施す。胎土は長石・石英・金雲母多く含み粗い。焼成良好、色調は暗黄褐色を呈する。

○第24号住居跡 (第38図)

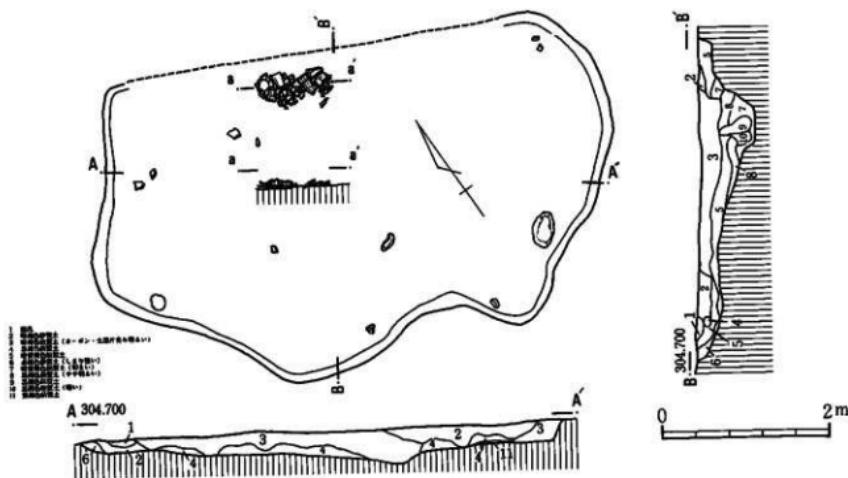
J-12、K-11・12グリッドに位置する。長辺6.1m、短辺3.9mの不定形を呈する。住居跡とは考えにくかったが、覆土に焼土・カーボンがふくまれていることや、住居跡北側が搅乱を受けており、カマドも、おそらく遺物集中箇所周辺に構築されていたものと考えられることから、住居跡とした。床面は、踏み締められた面は検出されず、不安定であった。壁は10cmほどで緩やかに立ち上がる。ピット・周溝などの施設は検出できなかった。

○出土遺物 (第39図)

1～4は土器器部で、いずれも器体部外面上半及び内面はナデ調整、器体部外面下半はヘラ削りが施される。1は口径12.8cm、器高4.2cm。内面は黒色処理されている。胎土は、赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は外側淡褐色、内面黒褐色を呈する。2は口径13.0cm、器高2.9cm。胎土は、長石・赤色粒子含みやや粗い。焼成良好、



第37図 第22号住居跡出土土器



第38図 第24号住居跡

色調は、暗黒褐色を呈する。3は口径12.1cm、器高4.2cm。胎土は、長石・赤色粒子含むが緻密で、焼成良好、色調は明褐色を呈する。4は口径12.6cm、器高3.6cm。内外面に赤色塗彩を施す。胎土は、長石・石英含み緻密で、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。5は鉢で、口径22.0cm、器高10.1cm、底径9.0cmを測る。内外面はナデによる器面調整がみられ、胎土は粗く、焼成良好、色調は、赤褐色を呈する。6は甕で、口径20.4cm、器高31.7cm。底径9.8cmを測る。口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施される。胎土は長石・石英含み粗く、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。底部には木葉痕がみられる。7は瓶で、口径28.0cm、器高25.7cm、底径9.0cm。口縁部内外面ナデ調整、器体部内外面ハケ調整を施し、把手が2カ所にみられる。胎土は長石・赤色粒子含みやや粗く、焼成良好、色調は暗褐色を呈する。

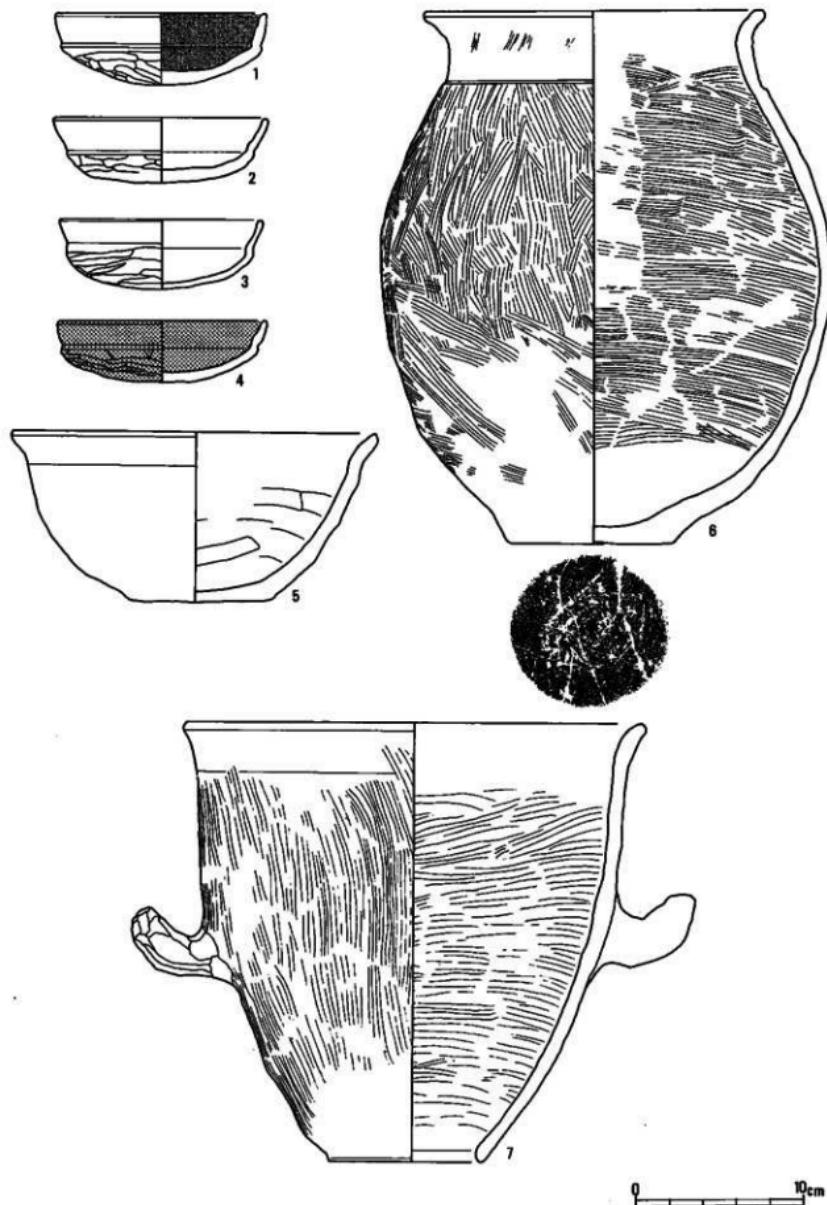
2) 方形周溝墓

○第1号方形周溝墓（第40~41図）

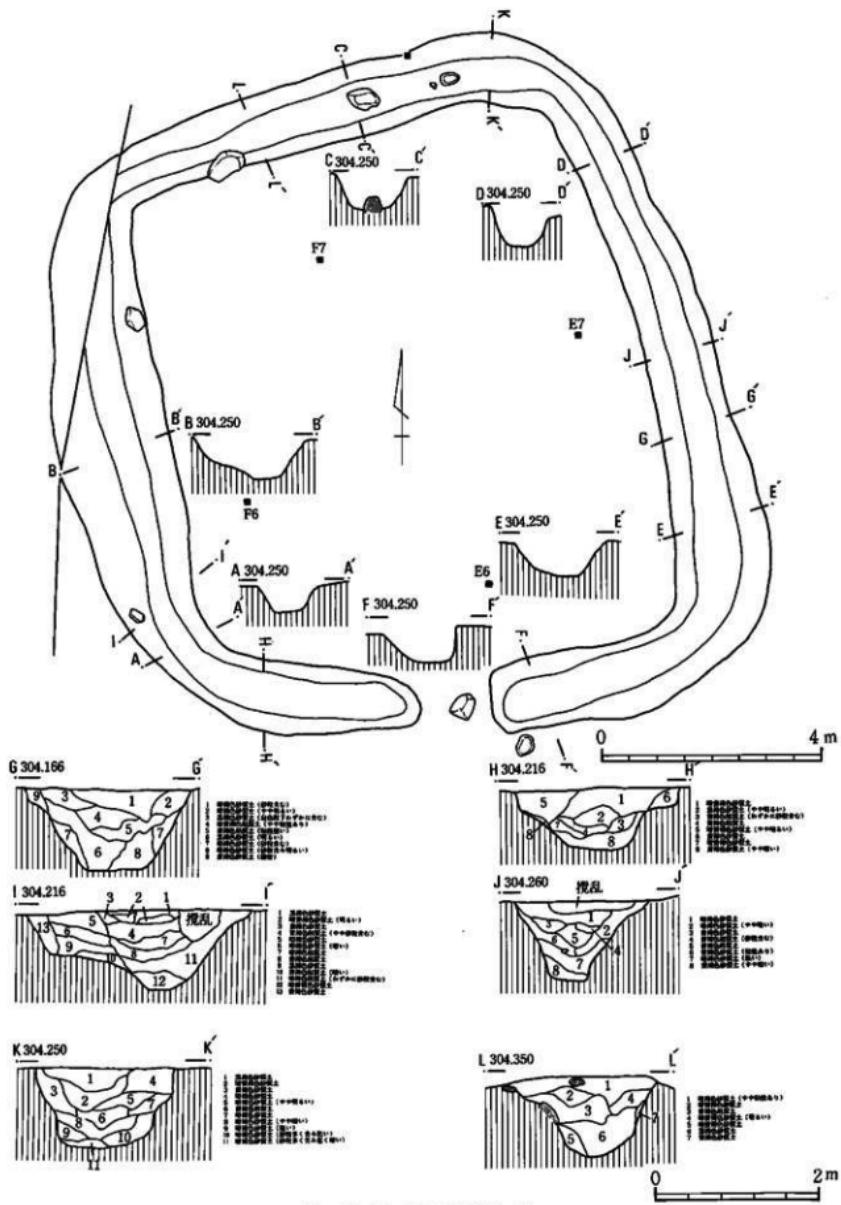
C-E-5~8グリッドに位置する。周溝北西コーナーの一部が調査区域外に延びる。調査された周溝から推定すると長辺16.8m、短辺16.2mの方形プランを呈すると思われる。周溝規模は、幅1.4m~2.8m、深さ1.0mを測る。周溝南側には、ブリッジが見られる。主体部は、後世の削平や重複する土坑などによって、確認できなかつた。出土遺物は周溝覆土中から、壺型土器・台付甕・高环・器台など数多く出土している。

○出土遺物（第42~45図）

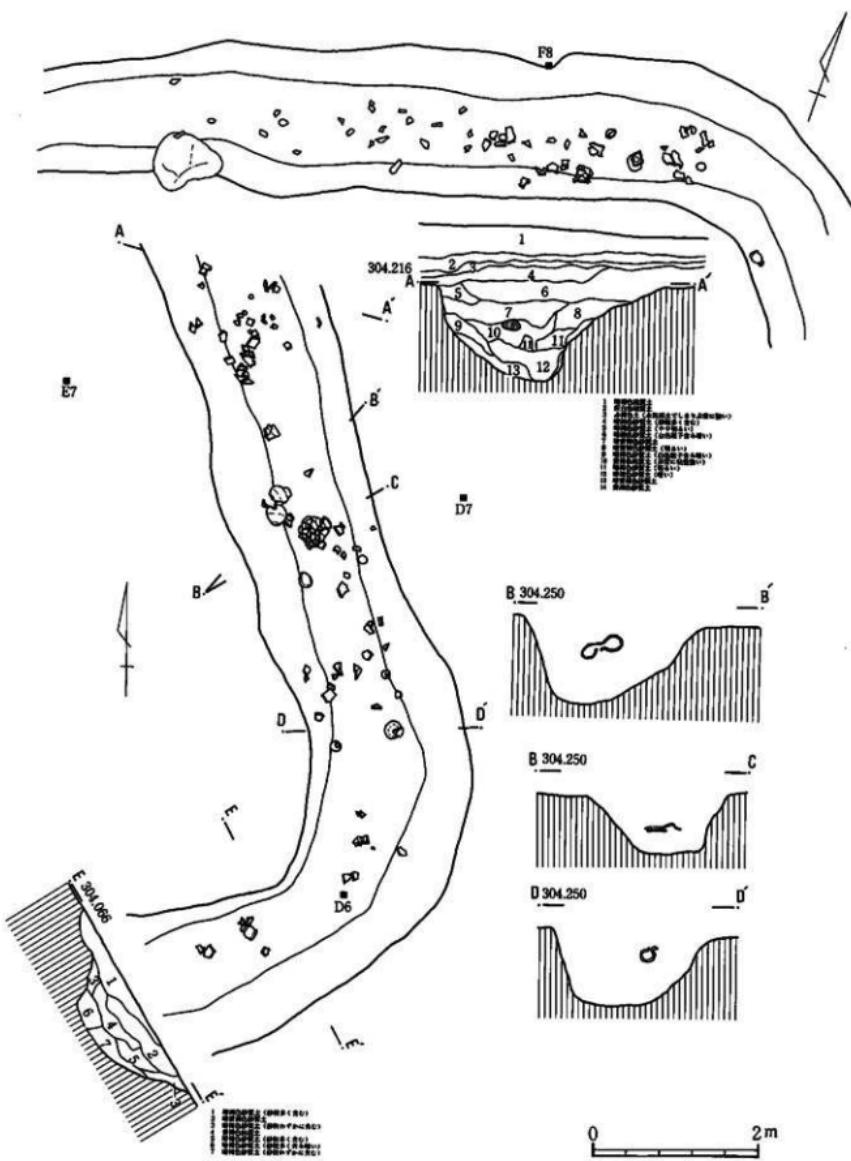
本周溝墓からは、数多くの出土遺物が検出されたが、そのうちの64点を図示した。第42図は壺型土器を一括したものである。1・2・4は有段口縁壺で、1は口径16.6cm、器高19.8cm、底径4.7cmを測る。頸部から肩部が屈曲し、直立頸部を有する。頸部には、隆帯が巡り、その上から、刺突文が施される。その直下には櫛描波状文が巡る。胴部に1カ所焼成後の穿孔が施される。色調は茶褐色を呈する。3は頸部が緩やかにくびれる。2・4は内外面にハケ調整が施され、2はハケ調整後、ミガキが施される。4は口縁部が外反しながら開き、若干折り返す。5~9はいわゆる広口の単純口縁壺で、5は頸部から肩部にかけて直立し、口縁部が外反しながら開く。6・7・9は頸部が「く」の字状に屈曲する。7は口径15.2cm、器高26.2cm、底径7.6cm、胴部最大径25.8cmを測る。頸部が「く」の字状に屈曲し、下膨れの偏平な胴部を呈する。口縁部ナデ調整、頸部及び胴部上半ハケ調整、内



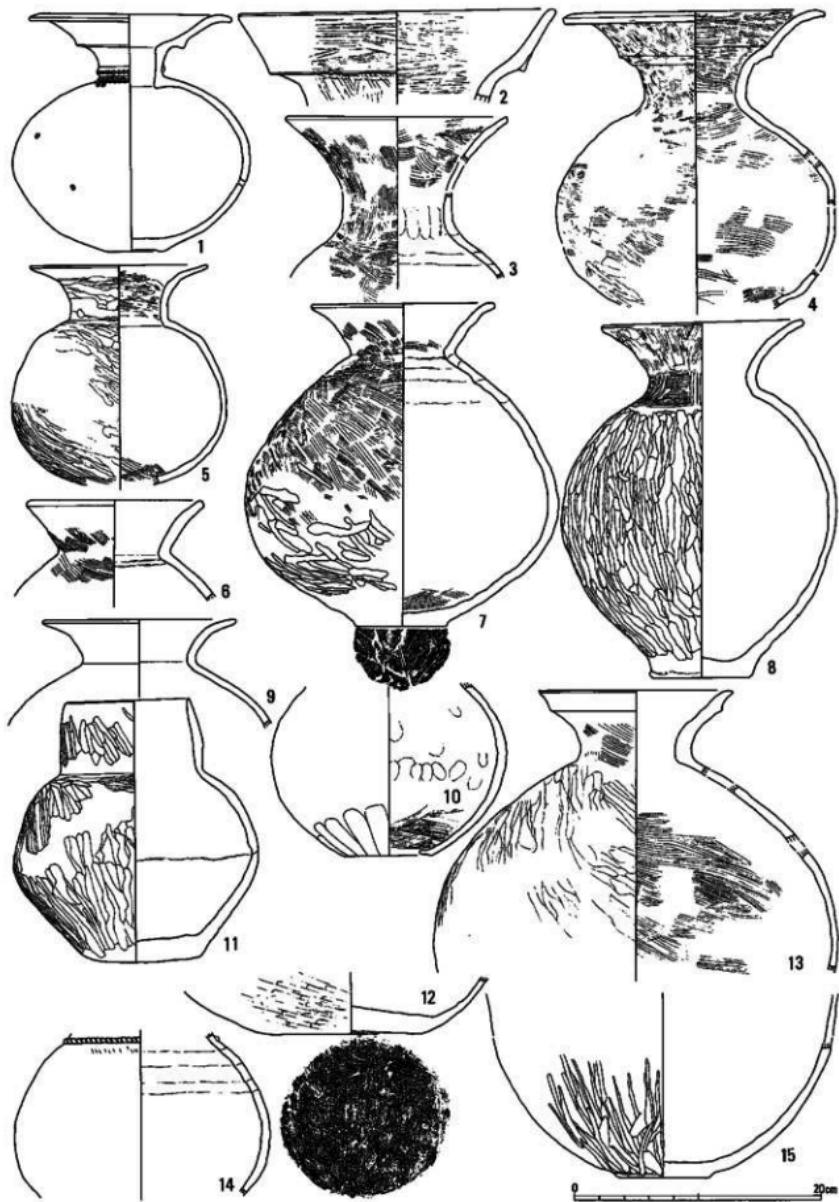
第39図 第24号住居跡出土遺物



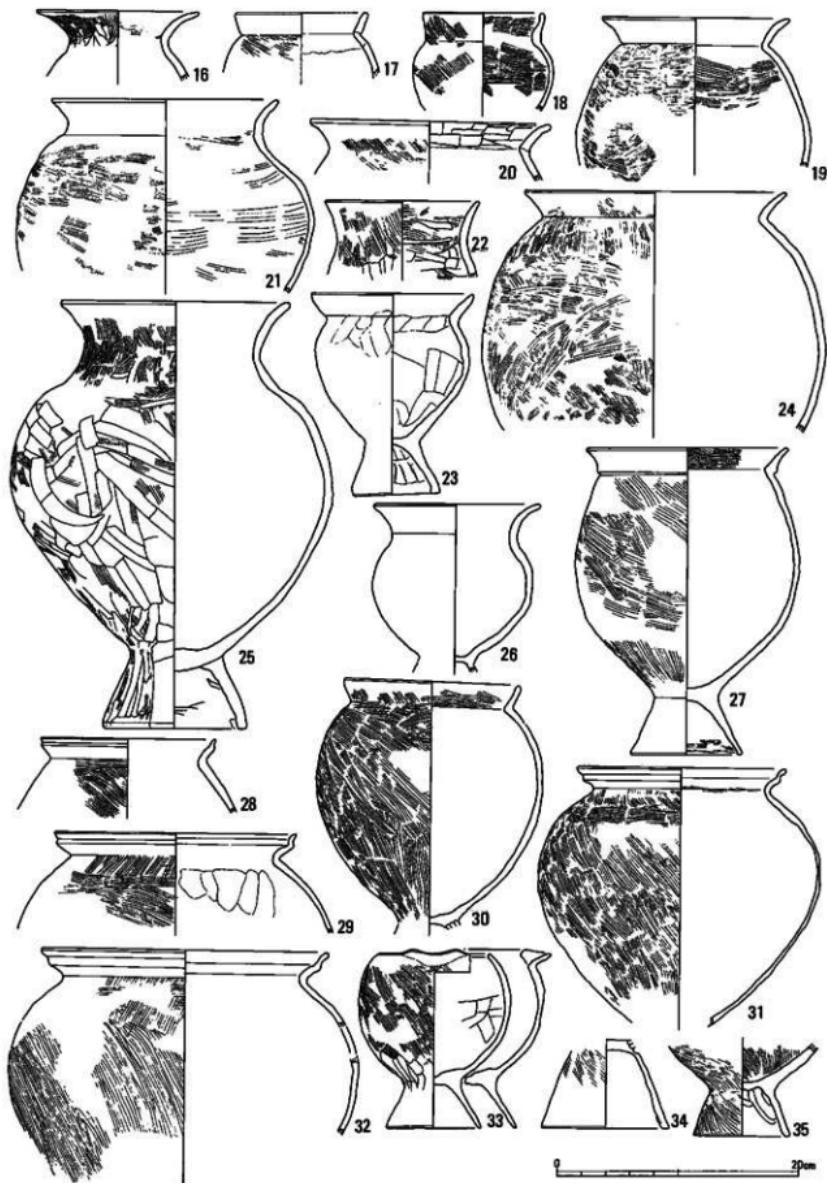
第40図 第1号方形周溝墓 (1)



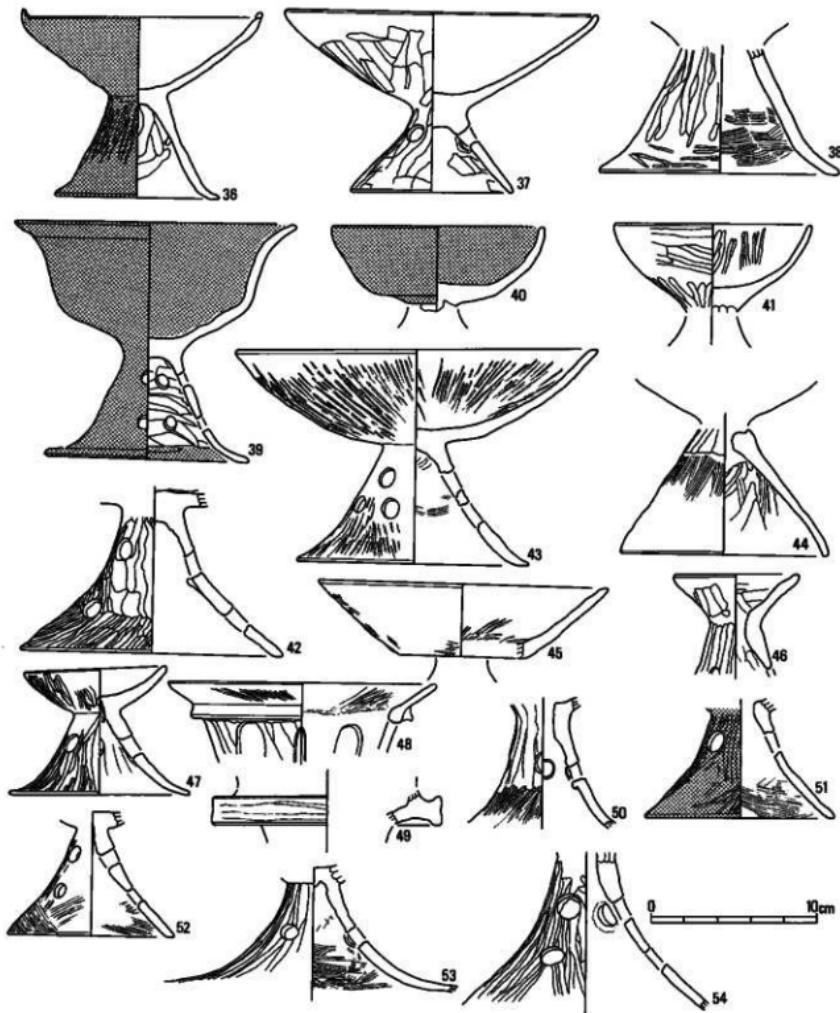
第41図 第1号方形周溝墓 (2)



第42図 第1号方形周溝墓出土土器（1）

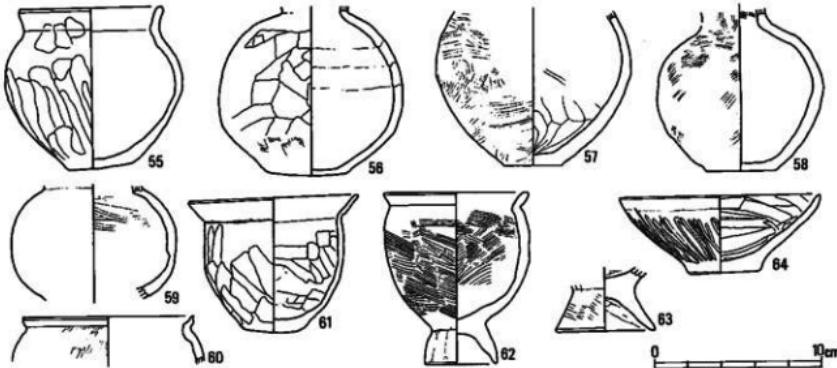


第43図 第1号方形周溝墓出土土器 (2)



第44図 第1号方形周溝基出土土器（3）

面頸部及び底部にハケ調整、胴部外面下半はミガキが施される。底部に木葉底がみられる。色調は明褐色を呈する。8は口径16.5cm、器高28.9cm、底径8.4cmを測る。頸部には横位と縦位の櫛描文、内面はナデ調整を施し、口縁部にはハケ調整、胴部には丁寧なミガキが施される。色調は褐色を呈する。10は球洞を呈する壺の下半部で、焼成前に底部穿孔されている。底径7.2cm、胴部最大径19.4cmを測る。胴部外面上半ナデ調整、下半ヘラ削り、内面上半指頭痕、内面下半ハケ調整が施される。11はヒサゴ壺で口径10.0cm、器高24.0cm、底径9.1cm、胴部最大径20.0cmを測る。口縁部上半が内湾し、下半が外傾している。器体部外面ナデ調整後ミガキ、内面はナデ調整が施



第45図 第1号方形周溝基出土土器(4)

される。色調は明褐色を呈する。12は大型の壺の底部破片で、外面ミガキ、内面ナデ調整が施される。底部には、布状の圧痕がみられる。13は複合口縁を有する土器で口径15.8cmを測る。肩部から頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁部及び内面上半部ナデ調整、胴部外面及び内面ハケ調整、胴部外面はハケ調整後ミガキが施される。14は壺の胴部で、肩部には隆帯が巡り、その上から、刺突文が施される。15は壺の下半部で、底部外面付近はミガキ、内面はナデ調整が施される。

第43図は、壺型土器を一括したもので、16~22・24は平底壺、23・25~35は台付壺とした。総体的に口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ調整で器面調整を施している。16は頸部が「く」の字状に屈曲する。17も頸部が「く」の字状に屈曲し、若干内湾しながら立ち上がる。18は頸部から肩部にかけて、ほぼ直立し、口唇端部が内湾する。19・20・24は「く」の字状に屈曲し、外反しながら開く。21・22は単純口縁で頸部は緩やかにくびれる。23は小型の台付壺で、口径13.5cm、器高16.8cm、底部7.3cmを測る。肩部から頸部にかけて屈曲している。器体部外面ナデ調整、口縁部内面ナデ調整、口縁部以下は、ハケによる調整が施される。色調は褐色を呈する。25は大型の台付壺で、口径18.9cm、器高35.2cm、底径11.9cmを測る。口縁は単純口縁で、頸部は緩やかにくびれる。口縁部及び内面ナデ調整、頸部はハケ調整、胴部外面はハケ調整後、ヘラ削り、脚部外面はミガキが施される。色調は、茶褐色を呈する。26も小型の台付壺で、頸部が緩やかに外反しながら開く。内外面ナデ調整。27は台付壺で、口径16.7cm、器高25.3cm、底径9.2cmを測る。口縁部は単純口縁で外反しながら開く。口縁部及び脚部外面ナデ調整、口縁部内面及び外面ハケ調整が施される。色調は茶褐色を呈する。28は受け口状口縁をもつもので、30は単純口縁の台付壺で、口縁部がやや内湾しながら立ち上がる。29・31・32はS字状の口縁をもつ台付壺で、いずれも口縁部屈曲がゆるやかに立ち上がり、31・32は口唇部が丸味をおびる。33は台付の片口土器で、口径9.4cm、器高14.3cm、底径10.9cmを測る。口縁部ナデ調整、外面胴部ハケ調整、外面下半及び内面ハケ調整が見られる。34・35は台付壺の脚部で、34は外面ハケ調整後、ミガキを施し、内面は、脚部端部を折り返す。色調は明褐色を呈する。35は外面及び内面ナデ調整、脚部内面指頭によるナデ調整が施される。

第44図は、高壺・器台を一括したものである。36~45・52~53は高壺、46~51・54は器台である。36は口径15.0cm、器高11.4cm、底径10.2cmを測る。壺部口縁に1対の突起を有し、外面全体に赤色塗彩される。脚部が円錐状に開く。壺部内外面、脚部外面ナデ調整、脚部内面には指頭によるナデ調整が施される。色調は外面赤褐色、内面褐色を呈する。37は口径19.2cm、器高10.9cm、底径10.0cmを測る。脚部に円孔が1カ所3方向に施される。口縁部及び壺部内面はナデ調整、壺部外面及び脚部内外面はヘラ削りが施される。色調は茶褐色を呈する。38は脚部が朝顔状に外反する。脚部外面ミガキ、内面ハケ調整が施される。39は壺型の壺部を有する高壺で、口径17.5cm、器高14.4cm、底径12.7cmを測る。外面全体及び壺部内面、内面脚部先端部に赤色塗彩が施される。壺部下半

に稜を有する。口縁部は外反しながら朝顔状に開く。脚部も外反しながら朝顔状に開く。脚部に円孔が上下2カ所4方向に施される。坏部内外面にはミガキが丁寧に施され、脚部内面にはヘラ削りが施される。色調は、外面赤褐色、脚部内面褐色を呈する。40も椀型の坏部を有する高坏で、坏部下半に稜を有する。坏部全体に赤色塗彩が施される。41も椀型高坏で、内外面ミガキが施される。42は高坏の脚部で、脚部円孔が2カ所4方向に施される。外面全体にミガキが見られ、内面には、ナデ調整を施す。色調は褐色を呈する。43は口径22.4cm、器高13.4cm、底径14.4cmを測る。坏部内外面及び脚部外面にミガキが施され、脚部内面にハケ調整がみられる。脚部に円孔が3カ所2方向に施される。色調は黄褐色を呈する。44は高坏の脚部で、脚部上半にヘラ削り、下半はハケ調整、脚部内面は、指頭によるナデ調整が施される。45は高坏の坏部で、坏部下半に稜を有する。内外面ミガキが施される。46は器台の上半部で、口径7.6cm、外面にはミガキが施され、内面にはナデ調整が見られる。器受部底部に円孔が見られ、脚部にも円孔が施される。47は口径8.7cm、器高8.0cm、底径11.0cmを測る。外面全体にミガキがみられ、器受部及び脚部内面はナデ調整が見られる。脚部は、外反し朝顔状に開く。脚部に円孔が1カ所3方向に見られる。色調は赤茶褐色を呈する。48は装飾器台の口縁部で口径16.4cmを測る。器受部に透かしが施される。内外面ミガキで器面調整を行い、色調は明褐色を呈する。49は装飾器台の脚部で、色調は明褐色を呈する。50は器台の脚部で円孔が1カ所4方向、器受部にも円孔が見られる。脚部上半ヘラ削り、下半はミガキが施される。内面はナデ調整を施す。51も器台の脚部で、外面全体に、赤色塗彩が施される。脚部円孔が1カ所3方向に施される。外面ミガキ、内面上部ナデ調整、下半部ハケ調整が施される。外面赤褐色、内面褐色を呈する。52・53は高坏としたが、器台の可能性も考えられる。52は脚部に円孔が2カ所3方向、53は1カ所3方向に施される。器面調整は、外面ミガキ、内面上半ナデ、下半部ハケ調整が見られる。54は器台の脚部と思われ円孔が2カ所3方向に施される。外面ミガキ、内面ナデ調整がみられる。

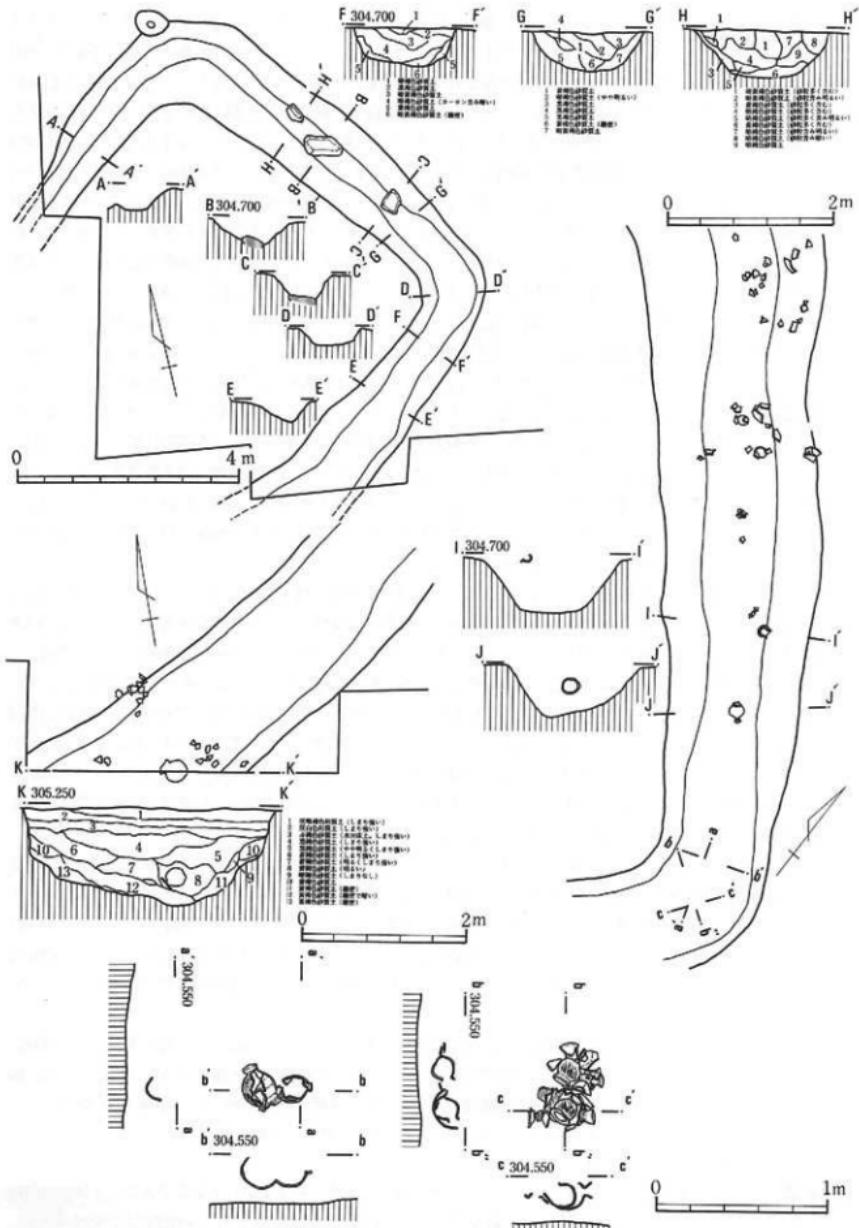
第45図は小型の壺・甕・椀を一括したもので、55・57・60~63は小型壺で、56・58・59は小型の甕、64は椀である。55は口径8.5cm、器高9.7cm、底径4.3cm。口縁部及び内面ナデ調整、器体部外面ヘラ削りが施される。色調は暗褐色を呈する。56は口縁部が欠損しており、下膨れの偏平な胴部を持つ。底径4.8cmを測る。器体部外面ヘラ削り、内面ナデ調整が施され、輪積み痕が明瞭に残る。色調は明茶褐色を呈する。57は甕上半部が欠損している。底径3.6cmで外面及び内面上半ハケ調整、内面下半は指頭による指ナデによる器面調整が施される。58は底径4.4cmで肩部が張り出す。器体部外面にはハケ調整後ミガキ、内面はナデ調整で器面調整を施す。色調は赤褐色を呈する。59は胴部に上半及び下半が欠損している。器体部外面ミガキ、内面ハケ調整が施される。60は口縁部が受け口状になり、口径10.4cmを測る。口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ調整を施す。色調は外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。61は甕で口径10.2cm、器高8.3cm、底径3.2cmを測る。口縁部がラッパ状に開く。口縁部内外面ナデ調整、胴部ヘラ削りが施される。色調は褐色を呈する。62は小型の台付甕で口径9.2cm、器高10.2cm、底径4.5cmを測る。口縁部ナデ調整、胴部内外面ハケ調整、脚部外面指頭による指ナデ調整が施される。色調は赤褐色を呈する。63は台付甕の脚部でやや外反しながら開く。外面ハケ調整、内面指頭痕によるナデ調整が施される。64は椀で口径12.2cm、器高4.7cm、底径4.4cmを測る。口縁部はやや内湾しながら開く。外面は放射状のミガキ、内面はハケ調整が施される。色調は明褐色を呈する。本周溝墓は、出土遺物から見ると、4世紀前半代に位置づけられる。

○第2号方形周溝墓（第46図）

K・L-9~11グリッドに位置する。第23・25号住居跡と重複している。周溝北西及び南東側が調査区域外に延びるため全体の規模は不明であるが、一辺が約11.0m程の方形プランを呈すると思われる。周溝の規模は、幅1.0m~2.0m、深さ0.6~1.2mを測る。埋葬主体部及びブリッジなどは確認されなかった。遺物は、東側コーナーにS字状口縁台付甕・器台・小型甕・壺が集中して出土している。遺物はいずれも覆土中位からの出土である。

○出土遺物（第47~48図）

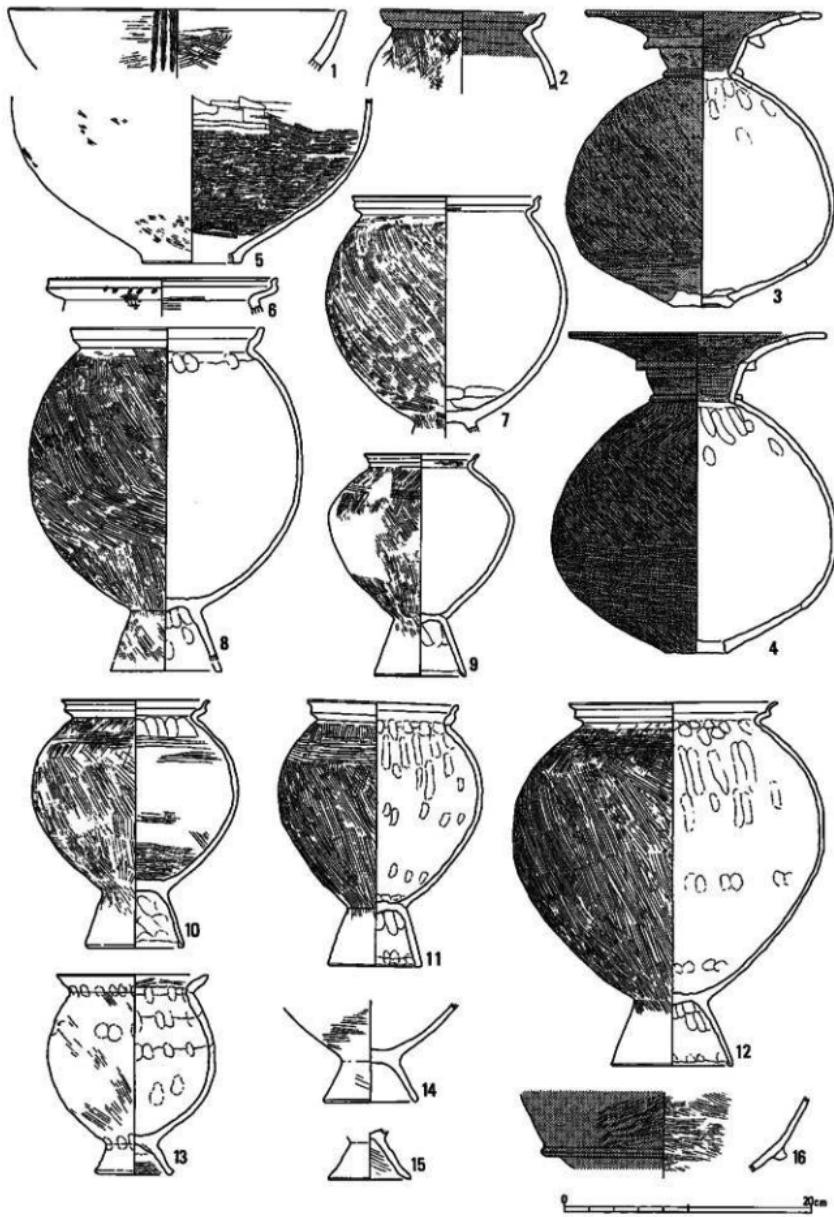
本周溝墓からは、28点図示した。1・3~5は壺、2・6~15は甕、16は手焙り型土器である。1は壺の口縁部で、口径27.6cmを測る。口縁部には3本の沈線が見られ、内外面にミガキが施される。色調は明褐色を呈する。2は受け口状口縁を呈し、外面及び内面上半に赤色塗彩が施される。口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ調整が



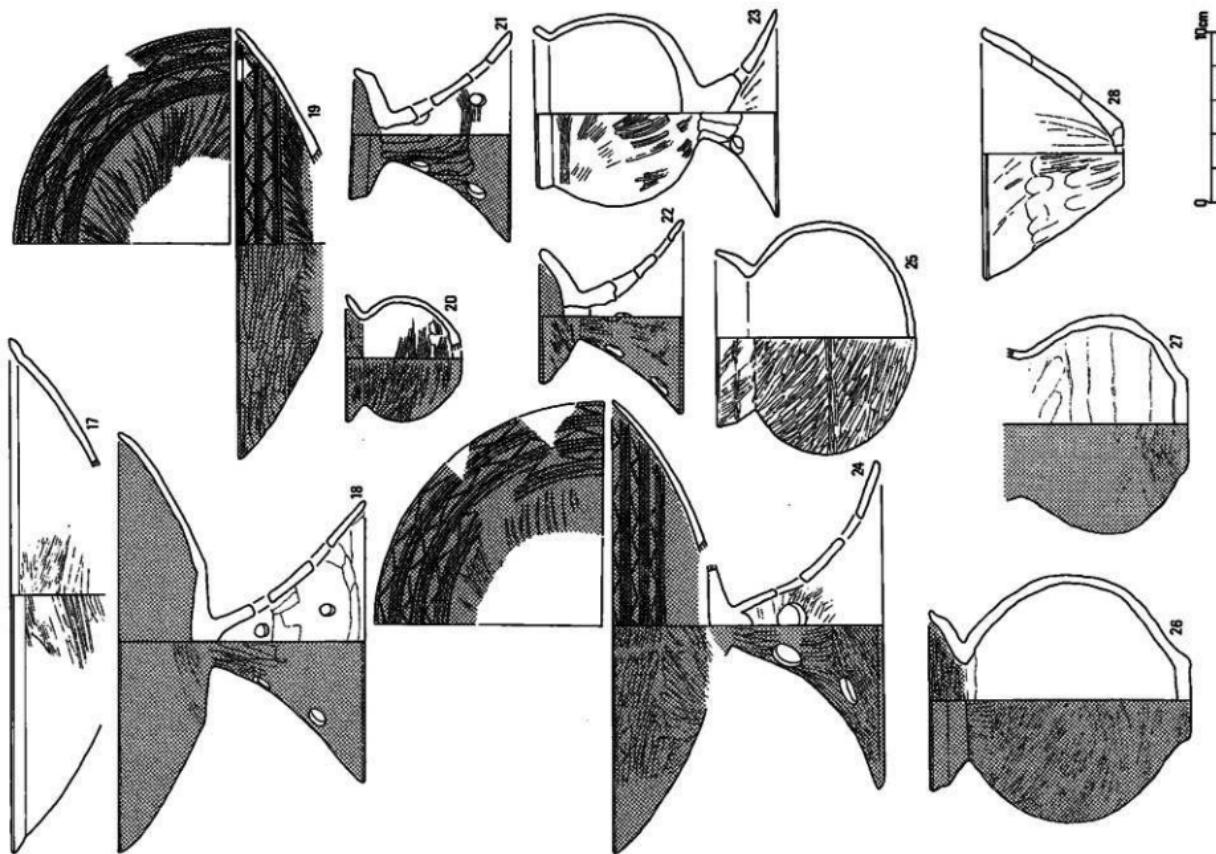
第46図 第2号方形周溝墓

施される。色調は褐色を呈する。3・4は有段口縁壺で、ほぼ同一の形態を持つ。3は口径19.0cm、器高23.6cm、底径4.6cm、胴部最大径は、16.8cm。頸部は細く、口縁はラッパ状に大きく外反する。口縁部中段と頸部に突帯がある。胴部は下彫れの上下偏平な胴部を持つ。底部は、焼成後、穿孔されている。4は口径21.0cm、器高25.6cm、底径4.8cmを測り、胴部最大径17.2cmを測る。3・4とも口縁部ナデ調整、胴部外面ミガキ、内面頸部ハケ調整、内面肩部指頭ナデ、胴部ナデ調整が施される。外面全体及び内面口縁と頸部に赤色塗彩がほどこされる。4も焼成後、底部穿孔されている。色調は明黄褐色を呈する。5は壺の下半部で底径8.0cmを測る。外面ハケ調整のあとミガキが施される。6は受け口状口縁で口縁部に刺文窓が見られ、ナデ調整が施される。7は台付壺で脚部が欠損する。口径15.4cm。口縁部はS字状口縁を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はナデ調整、外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。色調は黒褐色を呈する。8も台付壺であるが、口縁部が受け口状に立ち上がる。口径15.6cm、器高8.8cm、底径2.8cmを測る。口縁部ナデ調整、胴部及び脚部外面ハケ調整、頸部及び脚部内面指頭痕、胴部内面ナデ調整を施す。色調は明黄褐色を呈する。9は口縁部がS字状の口縁をもつ台付壺である。口径9.4cm、器高18.0cm、底径7.4cmを測る。口縁部は緩やかに立ち上がり、やや肩部が張り出している。口縁部及び内面ナデ調整、胴部外面ハケ調整、脚部内面指頭痕が見られる。色調は暗褐色を呈する。10もS字状口縁付壺で口径12.0cm、器高20.0cm、底径7.8cmを測る。口縁部中段は垂直に立ち上がり、口唇部先端は鋭く尖る。肩部のハケは縱方向のハケ調整後、横方向にハケ調整が全周する。胴部外面及び脚部外面にハケ調整、内面肩部と脚部に指頭痕、内面上部と下部にハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。11もS字状口縁を持つ台付壺で、口径12.4cm、器高21.2cm、底径8.0cmを測る。口唇部先端には鋭さは見られない。外面は10と同じで、内面には指頭痕が見られる。色調は黄褐色を呈する。12は口径16.8cm、器高29.8cm、底径9.8cmを測る。肩部が張り出し、胴部最大径25.0cmを測る。口唇部先端は鋭く尖る。13は単純口縁の台付壺で、口径12.2cm、器高16.4cm、底径6.4cmを測る。口縁部及び脚部ナデ調整、器体部外面脚部内面ハケ調整、器体部内面指頭痕が施される。色調は明褐色を呈する。14・15は台付壺の下半部で、15はやや外反しながらラッパ状に開く。16は手焙り型土器の下半部と思われ、外面にミガキが施され、赤色塗彩される。内面にはハケ調整が施される。

第48図は、17・18・19・24は高壺で、17は口径30.8cmを測り、口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、口唇部は外反し開く。外面はミガキが施される。18は口径24.9cm、器高14.6cm、底径16.8cmを測る。壺部外面、脚部外面に赤色塗彩が施される。壺部下半に稜を有し、脚部は朝顔状に外反する。脚部に円孔が上下2カ所4方向に施される。外面ミガキ、壺部内面ナデ調整、脚部内面ヘラ削りが施される。19は高壺の壺部で、内面にはバレス模様が施される。壺部内面上半には櫛描直線文が5本単位で3カ所施され、直線文の間に山形に施された沈線が2段みられる。壺部内下面下半には暗文状のミガキが放射状に施される。壺部外面にはミガキがみられ、外面に赤色塗彩が施される。20は小型の壺で口径7.4cm、器高6.8cm、底径2.6cmを測り、外面全体及び口縁部内面に赤色塗彩が施される。口縁部ナデ調整、器体部外面には丁寧なミガキが施され、内面下半にはハケ調整が施される。色調は、外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。21は器台で、口径7.8cm、器高9.4cm、底径12.5cm。外面全体及び内面器受部に赤色塗彩がみられる。口縁端部が直立ぎみに立ち上がる。脚部外面にはミガキが施される。脚部に円孔が2カ所4方向にみられる。22も器台であるが、21の様な口縁部の立ち上がりは見られず、やや内湾気味に広がる器受部を持つ。口径7.4cm、器高8.6cm、底径10.4cmを測る。脚部に円孔が2カ所4方向に施される。23は橢型の壺部をもつ高壺で、口径9.5cm、器高14.4cm、底径12.1cm。口縁部内面ナデ調整、外面ハケ調整後ミガキが施される。脚部に円孔が1カ所3方向見られる。色調は赤褐色を呈する。24は高壺で、口径27.0cm、器高16.1cm、底径19.6cmを測る。壺部上半にはバレス模様がみられ、山形の沈線が3カ所みられ、沈線に挟まれる形で櫛描直線文が、壺部下半には暗文状のミガキが施される。脚部外面にはミガキ、内面にはハケ調整で器面調整を行う。脚部には円孔が2カ所3方向に施される。色調は赤褐色を呈する。25は小型の壺で、口径10.4cm、器高12.0cm、底径3.0cmを測る。口縁は受け口状になり中段に稜を有し、内湾しながら立ち上がる。胴部は上下にやや偏平の球形を呈する。外面ミガキ、内面ナデ調整が施される。色調は黄褐色を呈する。26も小型の壺で、口径10.6cm、器高15.6cm、底径4.8cmを測る。外面及び内面に赤色塗彩が施される。25と同じように口縁は受け口状で、中段に稜がみられる。



第47図 第2号方形周溝墓出土土器(1)



第46图 第2号方形陶罐出土土器 (2)

肩部には張りが見られない。色調は赤褐色を呈する。27は口縁部が欠損しており、外面には赤色塗彩が施される。28は瓶で、口径14.4cm、器高8.5cm、底径3.6cmを測る。色調は明褐色を呈する。出土遺物などから、3世紀中～後半に位置づけられよう。

○第3号方形周溝墓（第49図）

G～J-7～9グリッドに位置する。第4号方形周溝墓と北側コーナー部分が重複しており、本周溝墓が4号方形周溝墓をきっている。周溝墓の南側及び西側が調査区外に延びるが、一辺が12.2mの方形プランを呈すると思われる。周溝の規模は、幅1.0～1.7m、深さ0.3～1.0mを測る。周溝南側には、周溝底部を掘り込んだ土坑が見られ、土坑内底部には台付甕（第50図11）が出土しており、おそらく周溝内における埋葬の施設と考えられる。埋葬主体部については確認できなかった。

○出土遺物（第50図）

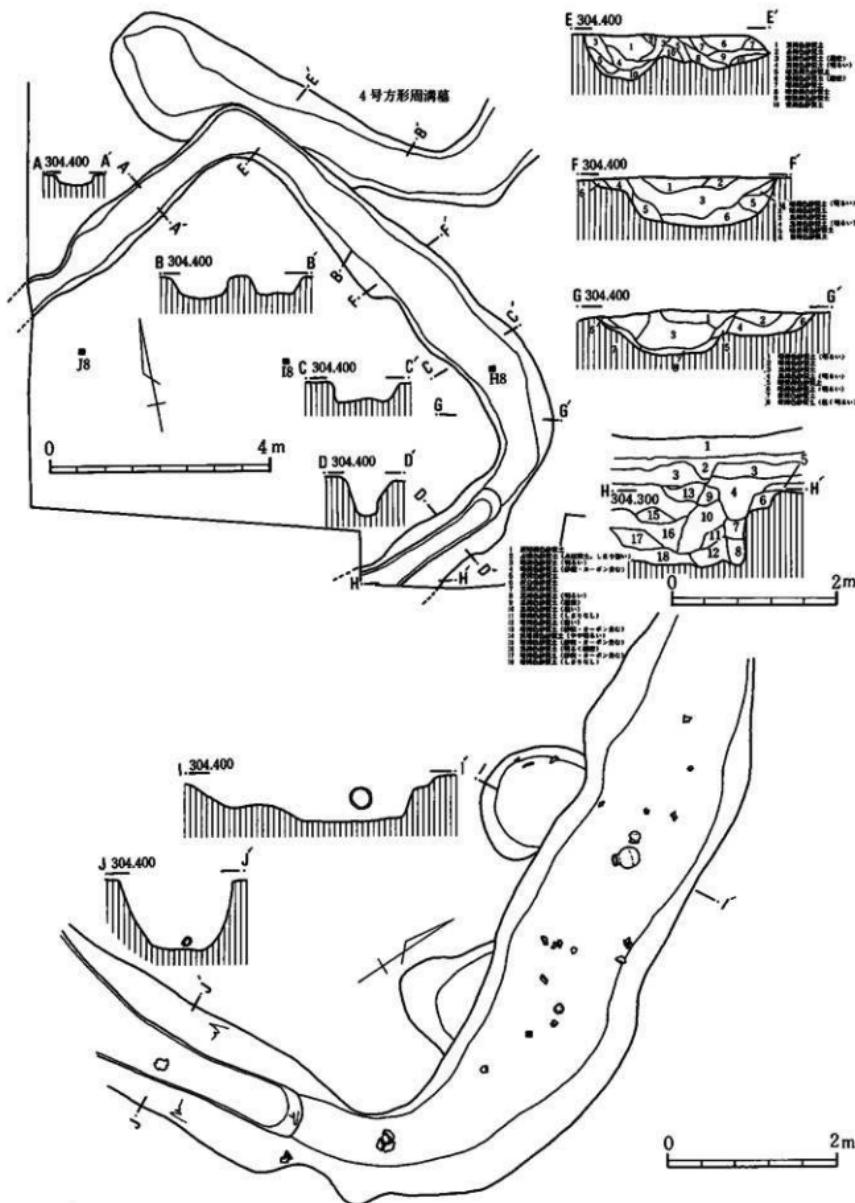
1・2・8が壺で、3～7、9～11、13・14・16が甕、12・15・19が高坏、17・18がミニチュア土器である。1は口径18.6cm、器高18.7cm、底径5.7cmを測る。口縁部が大きく開き、口縁部下部には稜を有する。頸部は細く、外反しながら直立する。胴部は球胴に近いが上下に偏平である。胴部には、隆帯による装飾がなされ、頸部から胴部下半にかけて縦方向に18本、胴部下半に横方向の隆帯が装飾される。外面及び口縁部内面に赤色塗彩され、底部は焼成前に底部穿孔されている。色調は赤褐色を呈する。2は壺の胴部破片。3・4・5・9は甕の口縁部で、いずれも内外面にハケ調整がなされる。6は甕の上半部で、口径16.8cmを測る。口唇部にはハケ状工具による刻み目が巡る。外面にはハケ調整が施される。8は壺の完形品で口径15.8cm、器高28.9cm、底径9.0cmを測る。口縁は単純口縁をなし、頸部は緩やかに立ち上がる。器体部外面はハケ調整後、ヘラ削りを施し、内面はナデ調整で器面調整がなされる。色調は茶褐色を呈する。10は小型の台付甕で口径11.2cm、器高13.6cm、底径5.7cmを測る。頸部は屈曲し、口縁部ナデ調整、胴部にはヘラ削り、胴部内面には明瞭に輪積み痕が見られ、器体部底面にはハケ調整を施す。色調は外面暗褐色、内面明褐色を呈する。11も小型の台付甕で、口径10.1cm、器高14.2cm、底径6.5cmを測る。口唇部はハケ状工具による刻み目が巡り、頸部は緩やかに立ち上がる。脚部は端部が内湾する。色調は暗褐色を呈する。12・15は高坏の破片で、いずれも坏部下半に稜が見られる。12は外面及び坏部に赤色塗彩が施される。13・14は台付甕の脚部で、14は脚部が内湾する。16は口径18.3cm、器高23.2cm、底径8.6cmを測る。口縁は単純口縁で、頸部は屈曲し立ち上がる。口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整を施す。色調は外面は明褐色、内面は淡褐色を呈する。出土遺物から、本周溝墓は、3世紀末頃と思われる。

○第4号方形周溝墓（第51～52図）

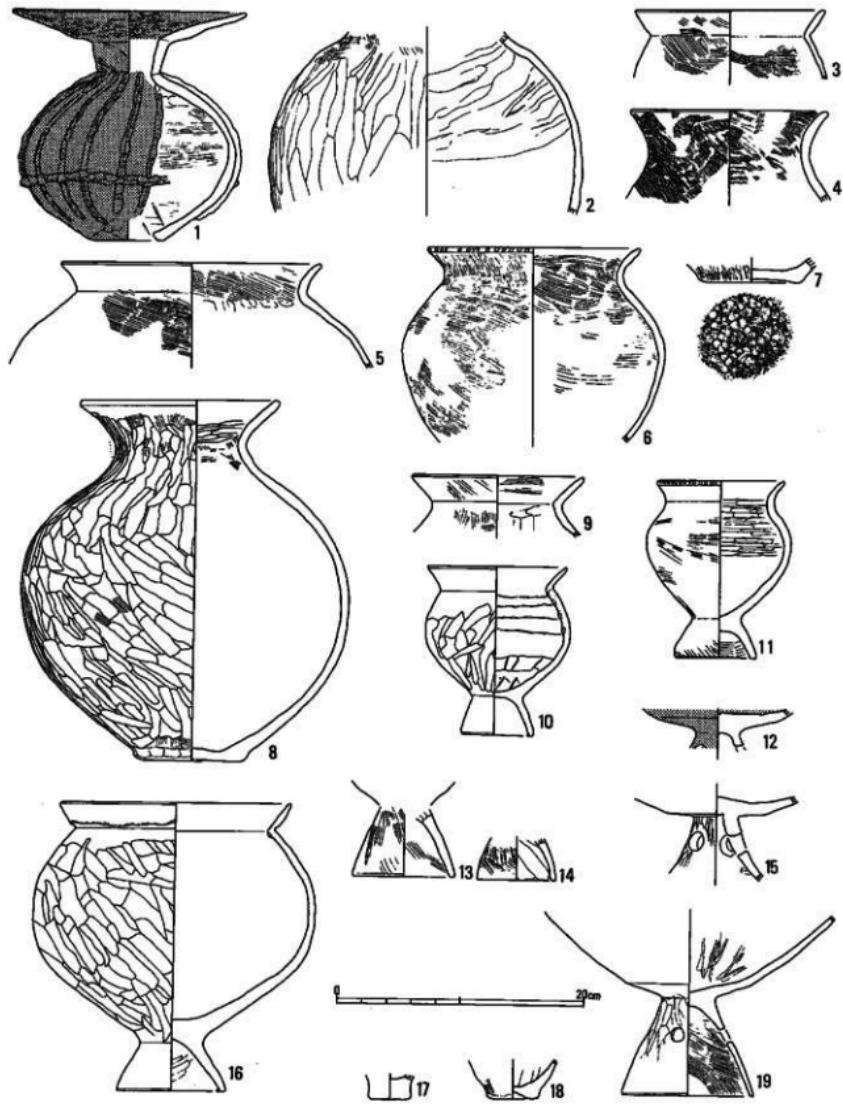
G～I-8～11グリッドに位置する。本周溝墓南西側が第3号方形周溝墓と第22号住居跡と重複し、南東が土坑と重複している。また、北西側が攪乱によって検出できなかったが、長辺13.6m、短辺12.6mのほぼ方形プランを呈すると思われる。周溝の規模は幅1.3～2.2m、深さ0.6～1.2mの規模を持つ。周溝墓西側コーナーにブリッジを持つ。埋葬主体部や埋葬施設などは検出できなかった。また、出土土器は周溝内より壺・甕・高坏などが豊富に出土している。

○出土土器（第53～55図）

第53図は壺型土器、第54図は甕型土器、第55図は小型壺、楕、高坏、器台など55点を図示した。1・2は同一の形態を持つ壺であるが、第3号方形周溝墓より1点出土しているものと同一の形態を持つ。（第50図・1）1は口径19.0cm、器高18.5cm、底径5.5cmを測る。口縁部下半に稜をもちラッパ状に大きく開く。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、胴部はやや上下に偏平の球胴を呈する。外面全体及び口縁部内面に赤色塗彩を施す。胴部には隆帯による装飾が頸部から胴部下半にかけて縦方向に18本、胴部下半に横方向の隆帯が1本施される。色調は、暗赤褐色を呈する。2は口径18.8cm、器高17.0cm、底径5.2cmを測る。口縁部下半は1よりも稜がはっきり見られ、ラッパ状に大きく開く。頸部は1よりも、外反し開く。胴部は球胴を呈し、隆帯による装飾は縦方向が20本、横方向が1本施される。1・2とも焼成前に底部穿孔されている。3は壺の胴部で口縁部が欠損している。胴部下半が張り出し、下膨れを呈する。底径11.7cmを測る。4は長頸壺で口径10.0cm、器高17.5cm、底径4.4cmを測る。漏

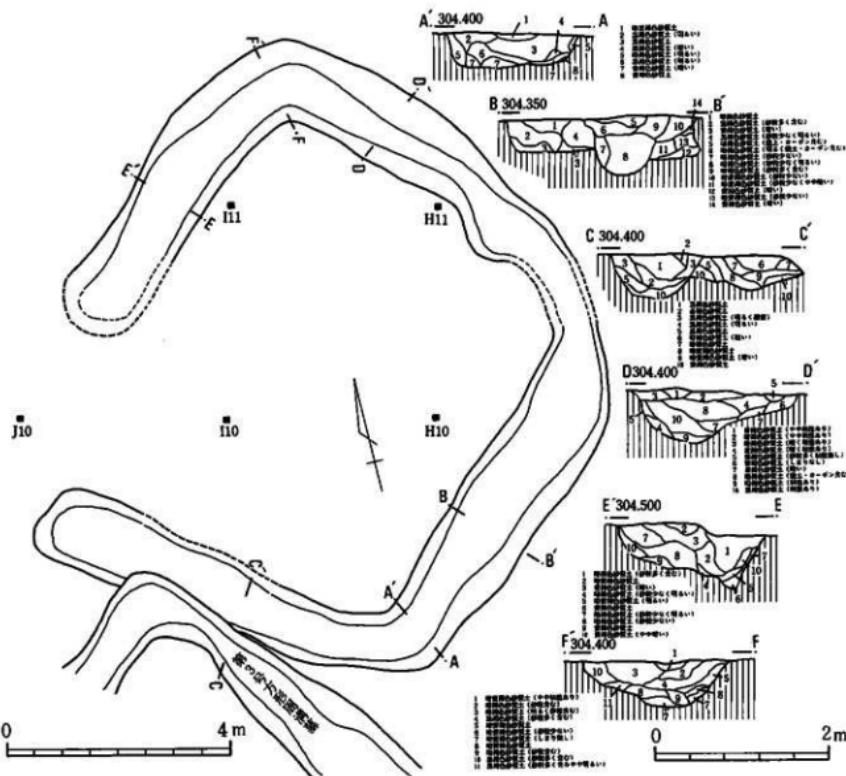


第49図 第3号方形周溝基



第50図 第3号方形周溝墓出土土器

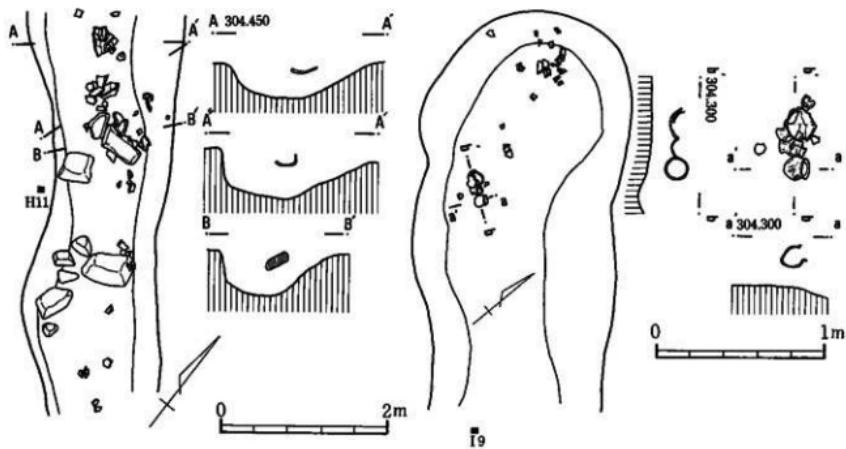
状に広がる長い口縁を持ち、上下にやや偏平の球形を呈し、胴部下半に稜を有する。外面に丁寧な磨きが施され、内面には指頭痕によるナデ調整が施される。色調は明赤褐色を呈する。5は口径12.4cm、器高21.0cm、底径5.4cmを測る。口唇先端が鋭く尖り、頸部が「く」の字状に屈曲し、胴部は球形を呈する。胴部外面及び口縁内面にミガキが施される。色調は明黄褐色を呈する。6は壺の胴部で口縁部が欠損する。底径8.0cmを測る。胴部外面は



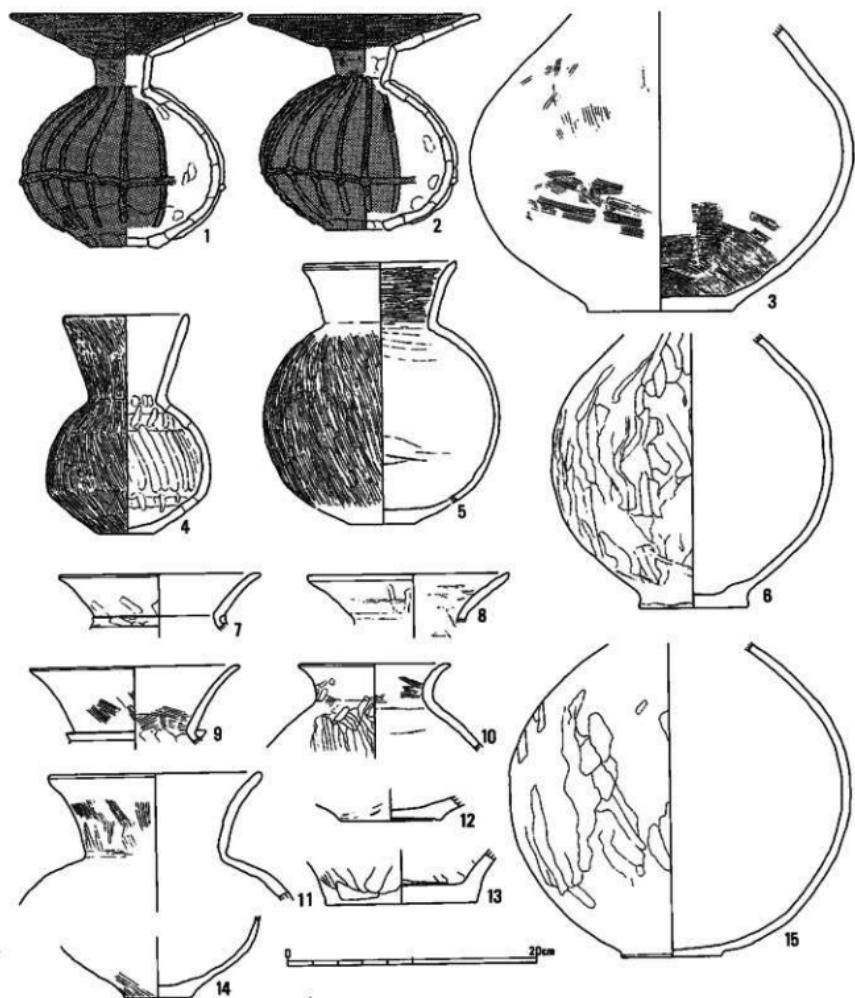
第51図 第4号方形周溝墓（1）

はヘラ削りが施され、内面はナデ調整がみられる。7~11は壺の口縁部で、7・9は口縁が外反しラッパ状に開く。頸部に縦帶が巡り、「く」の字状に屈曲する。9はハケ調整後ミガキが施される。色調は褐色を呈する。10は口径12.2cmを測る。頸部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。口縁部ナデ調整、胴部ミガキが施され、内面ナデ調整がみられる。11は口径16.8cm。口縁部が外反しながら開き、口唇端部は丸みをもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。色調は褐色を呈する。12~14は壺の底部破片で、15は壺の胴部で、口縁部が欠損している。胴部最大径27.4cm、底径8.6cmを測る。外面はヘラによるミガキ、内面はナデ調整がみられる。色調は明褐色を呈する。

第54図は、甕を一括したものである。16~22・24・29・30・38が単純口縁をもつ甕型土器で、23・27・28・35・36がS字状の口縁をもつ台付甕で、31・33・34・37が台付甕の脚部である。いずれも、口縁部はナデ調整、外面はハケ調整が施される。18は甕の胴部上半で、口径15.6cmを測る。口縁部は、外反し、頸部が「く」の字状に屈曲する。色調は、暗褐色を呈する。20は口縁部が外反するが、頸部は18ほど屈曲はみられず、ラッパ状に開く。21も甕の胴部上半部で口径19.6cmを測る。頸部は屈曲し、やや内湾し立ち上がる。22の頸部は「く」の字状になるものの、口縁部はあまり開かない。23は口縁部がS字状を呈し、大きく外反する。口唇先端は丸みをもち、口縁部は各段が明瞭な屈曲が見られ、肩の張りは強い。25は口径22.2cmを測り、口縁部が大きくやや内湾しながら開く。色調は暗褐色を呈する。27もS字状の口縁をもつもので、23ほどの口縁部各段の屈曲は明瞭ではない。口唇部先端は鋭く尖り、肩の張りは弱い。29は単純口縁をもつ台付甕で口径18.0cmを測る。口縁部ナデ調整

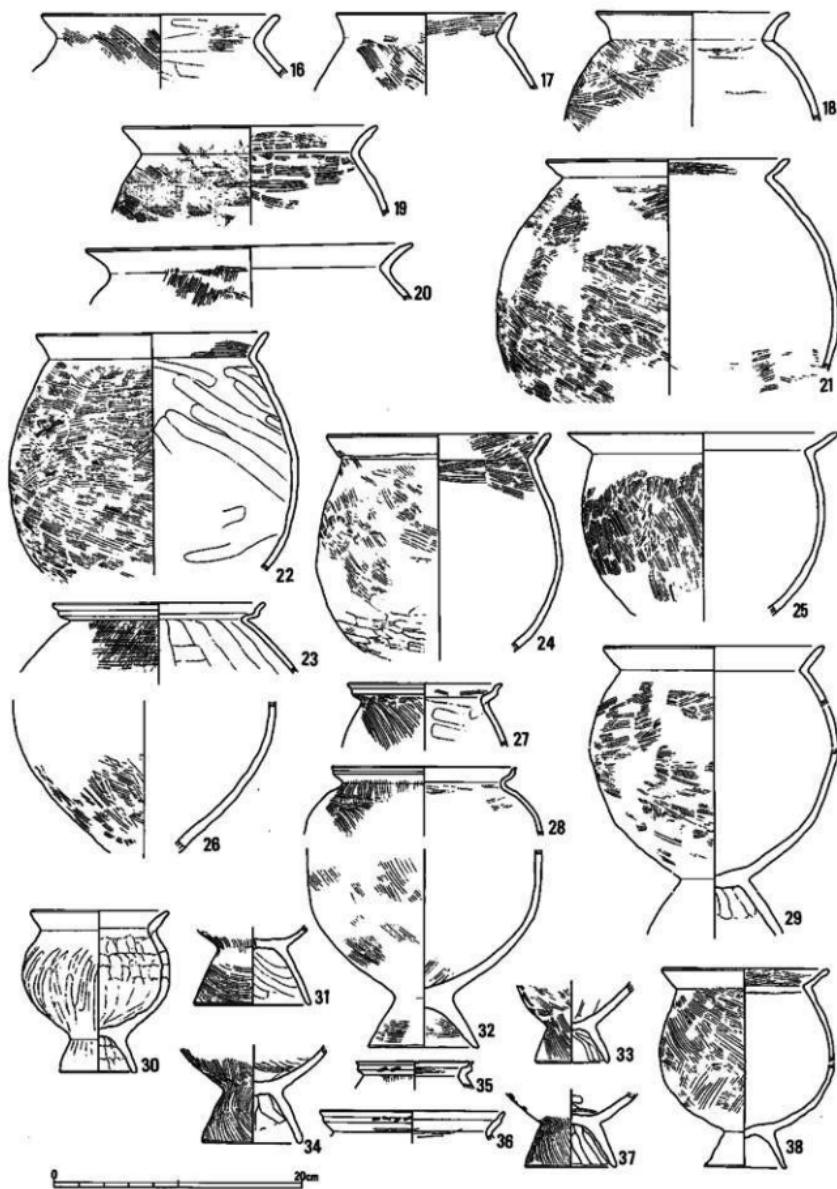


第52図 第4号方形周溝墓 (2)

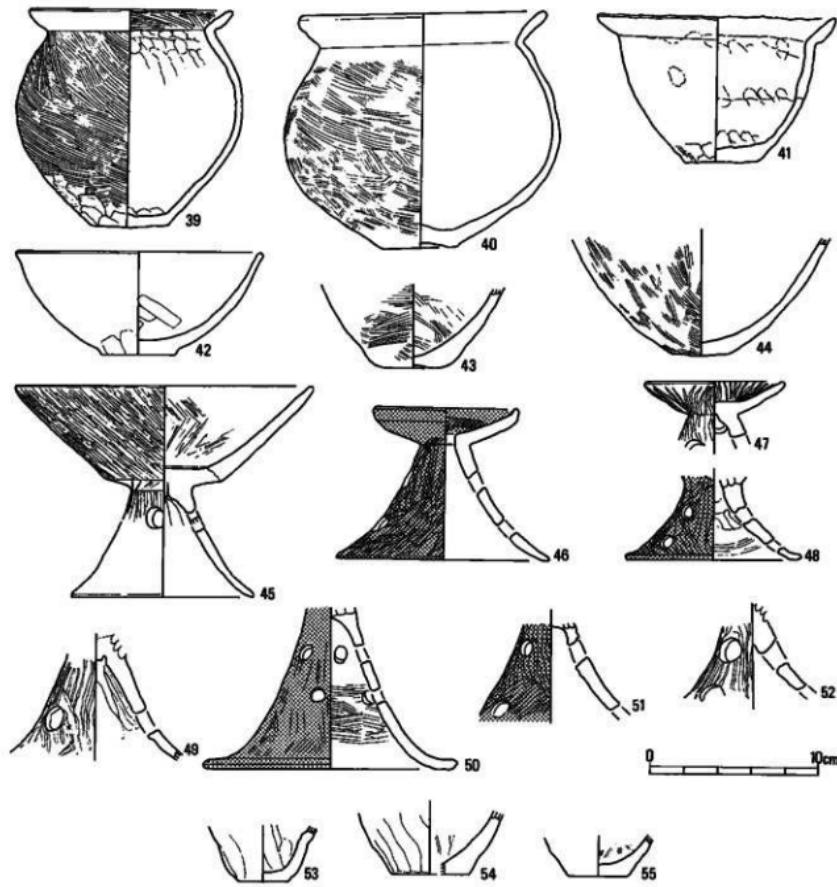


第53図 第4号方形周溝墓出土土器（1）

整、器体部ハケ調整が施され、脚部内面は指頭によるナデ調整が施される。30は小型の台付壺で、口径10.8cm、器高13.2cm、底径6.2cmを測る。器壁は全体的に厚く、輪積み痕が明瞭に見られる。口縁部ナデ調整、器体部外面はミガキ、内面には指頭痕による器面調整が施される。35・36はS字状の口縁をもつもので、35は口縁部の各段は明瞭であるが、36は不明瞭である。35は口唇部先端が鋭く尖る。35・36ともに中段には刺突文が施される。38は単純口縁の台付壺で、口径13.4cm、器高16.1cm、底径6.6cmを測る。口縁部外面ナデ調整、口縁部内面及び器体部外面にはハケ調整が施される。脚部は、外反しながらラッパ状に開く。色調は黒褐色を呈する。



第54図 第4号方形周溝墓出土土器 (2)



第55図 第4号方形周溝出土土器(3)

第55図は甕・楕・高坏・器台・ミニチュアを一括したものである。39は単純口縁の平底甕で、口径12.0cm、器高13.0cm、底径4.2cmを測る。頸部が「く」の字状に屈曲する。口縁部外面がナデ調整、口縁部内面及び器体部外面に、明瞭なハケ調整が施され、外面下半は、ヘラ削りが施される。色調は明黄褐色を呈する。40は口径14.9cm、器高13.9cm、底径4.5cmを測る。口縁部は先端が肥大し頸部が「く」の字状に屈曲する。胸部下半が膨らみ、底部がわずかに凹む。口縁部及び内面ナデ調整、器体部外面ハケ調整が施される。色調は明黄褐色を呈する。41は平底の鉢形の甕で、口径14.4cm、器高8.6cm、底径4.6cmを測る。口縁が大きくラッパ状に開く。内外面にはナデ調整と指頭痕による器面調整が施される。色調は明褐色を呈する。42は楕で、口径14.8cm、器高6.1cm、底径4.4cmを測る。器体部上半ナデ調整、器体部下半はハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。43・44は甕の底部破片でいずれも外面ハケ調整を施す。45は高坏で、口径19.6cm、器高12.7cm、底径10.8cmを測る。坏部下半に稜を有する。脚部は朝顔状に外反する。脚部円孔は1カ所3方向に施される。内外面にミガキが明瞭にみられる。色調は赤褐色を呈する。46は器台で口径8.2cm、器高9.1cm、底径12.6cmを測る。口縁部が直立気味に短く立ち上がる。器受

部底部に円孔を有し、脚部にも2カ所4方向の円孔が施される。外面全体及び器受部内面に赤色塗彩が施される。外面及び器受部内面にミガキが施される。色調は赤褐色を呈する。47はやや内溝気味に広がる器受部をもつもので、口径8.4cmを測る。全体にミガキが施される。脚部円孔が現存で1カ所3方向に施される。48は器台の脚部と思われ、外反しながら朝顔状に開く。外面に赤色塗彩が施され、内面には上半にヘラ削り、下半にハケ調整が施される。脚部円孔が2カ所4方向に施される。色調は赤褐色を呈する。50は高壇の脚部で、底径15.4cmを測る。脚部は朝顔状に大きく外反し開く。外面に赤色塗彩が施され、外面ミガキ、内面ハケ調製が施される。脚部円孔は上段が5カ所、下段が4カ所に施される。色調は赤褐色を呈する。53・54・55はミニチュア・甕の底部破片で53は底径3.2cm、54は底径4.8cm、55は底径3.8cmを測る。内外面は指頭によるナデ調整が施される。

本周溝墓は、出土遺物から見ると、3世紀中頃～3世紀後半位に位置づけられる。

3) 土 坑

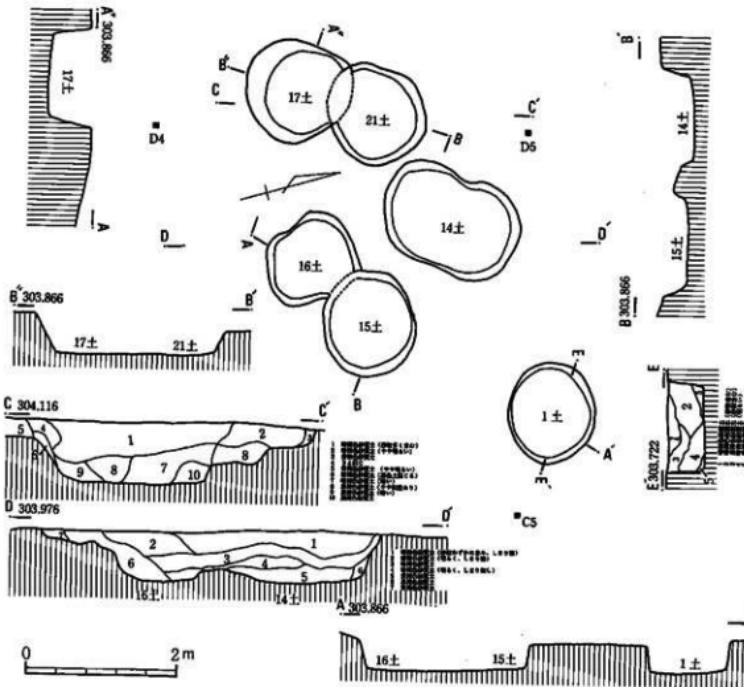
古墳時代の土坑は、114基のうち4基確認されている。(第1表 土坑一覧表)

◎第2号土坑(第57図)

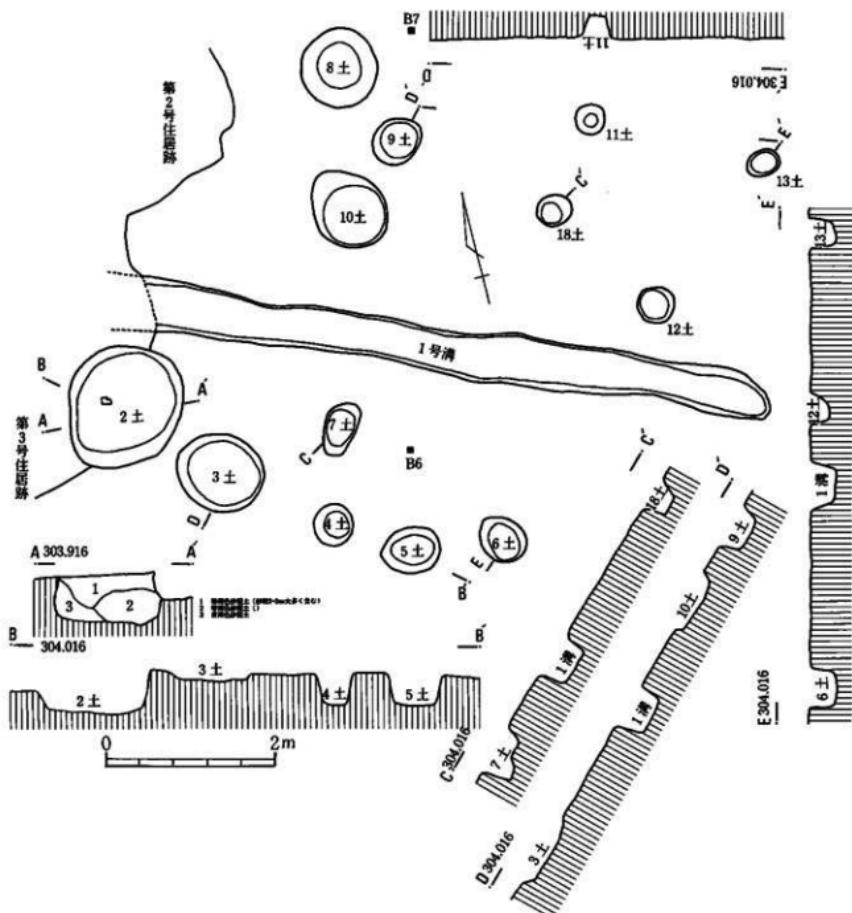
B-6グリッドに位置する。第2・3号住居跡と重複する。長径0.95m、短径0.85mの円形を呈し、深さ0.55mを測る。断面形態は鍋形を呈する。出土遺物は(第59図5)が覆土中から検出されている。

◎第14号土坑(第56図)

C-4グリッドに位置する。第16号土坑と重複する。長径1.88m、短径1.20mの梢円形を呈し、深さ0.38mを測る。断面形態は鍋形を呈する。



第56図 第1・14~17・21号土坑



第57図 第2~13・18号土坑・1号溝

○第16号土坑（第56図）

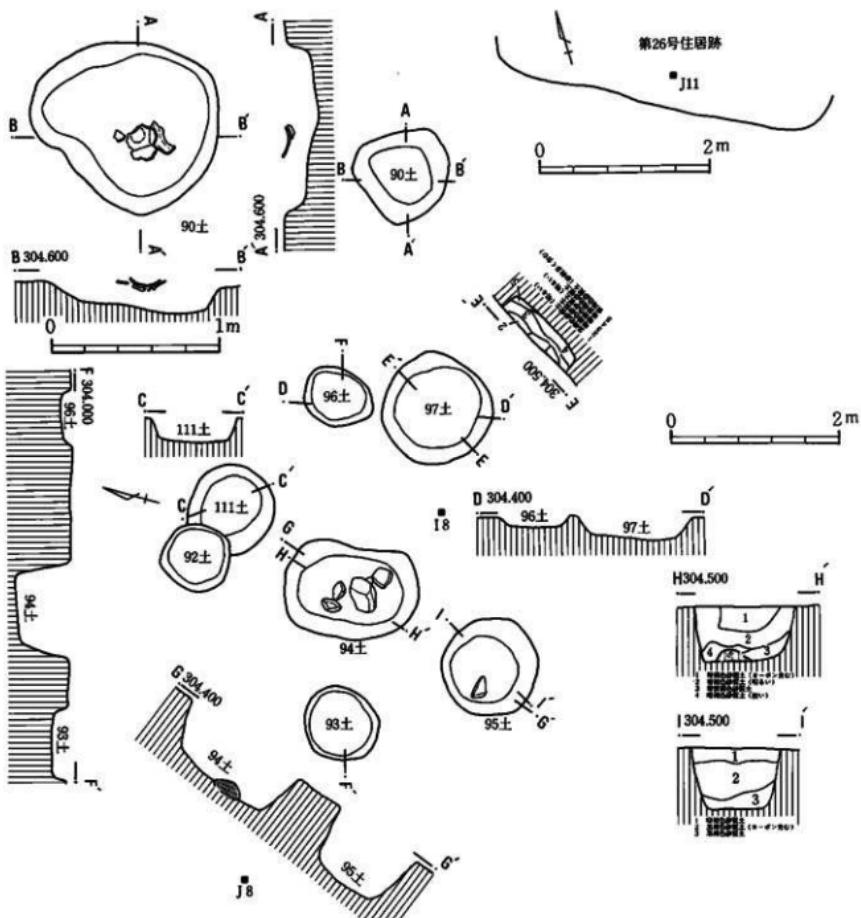
C-4 グリッドに位置する。第14号土坑と重複する。長径1.32m、短径1.00mの不整円形を呈し、深さ0.40mを測る。断面形態は鍋形を呈する。

○第9号土坑（第58図）

J-9 グリッドに位置する。長径1.13m、短径0.95mの楕円形を呈し、深さ0.20mを測る。断面形態は摺鉢形を呈する。

○出土遺物（第59図）

1 は第16号土坑出土の広口壺の上半部で口径28.0cmを測る。口縁部が外反し、頸部は緩やかにくびれる。口縁部及び内面ナデ調整、外面はミガキが施される。色調は、褐色を呈する。2 は第14号土坑出土の壺形土器の上半部で口径14.8cmを測る。口縁部下半に稜をもつ。頸部が「く」の字状に屈曲する。頸部及び胴部内面にハケ調整、外面にはミガキが施される。色調は赤褐色を呈する。3 は第9号土坑出土の壺形土器の下半部で、底径10.8cmを



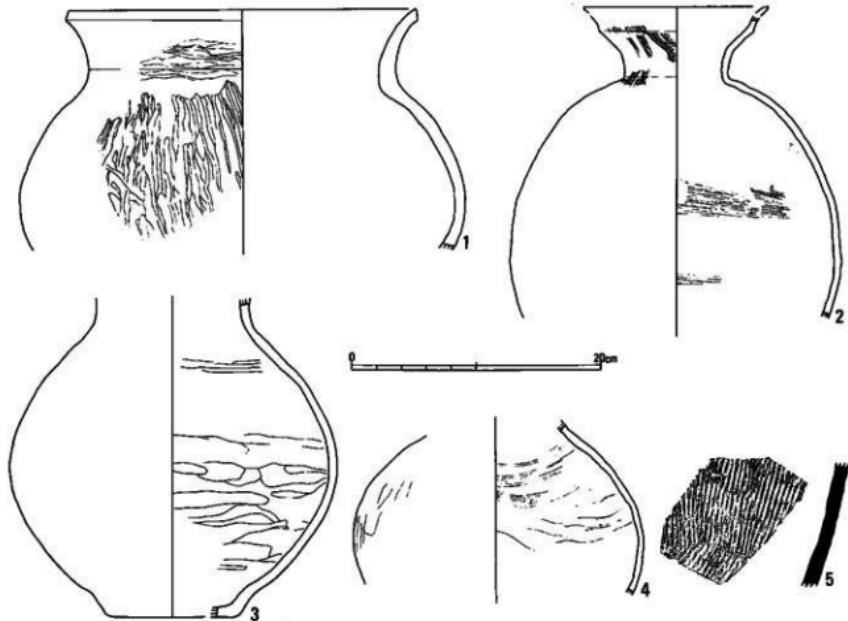
第58図 第90～92～97・111号土坑

測る。内外面ミガキ、ハケ調整が施される。4も第90号土坑出土の、壺形土器の腹部破片である。5は第2号土坑出土の須恵器甕の破片で外面にタタキメが施される。

4) 溝状造構

○第2号溝 (第61図)

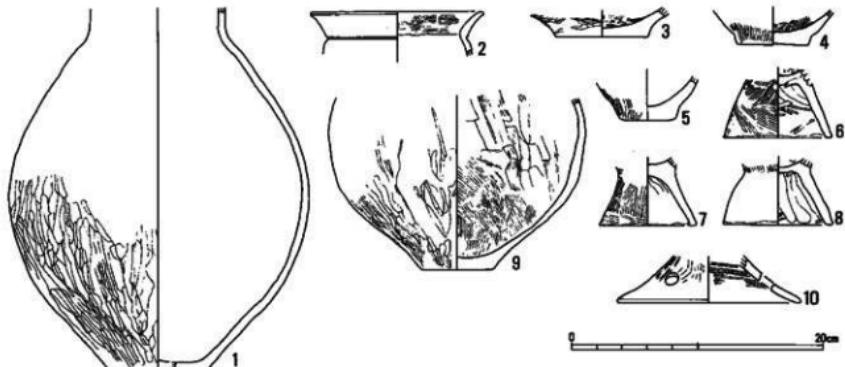
D～F-2～4グリッドに位置する。調査区の北側及び西側にかけ弧状にやや湾曲しながら延びる。溝の南側は疊層により、全体の形状規模は不明である。幅1.45m～3.20m、深さ0.2～0.75mを測る。遺物は、壺形土器・甕・台付甕などが出土している。



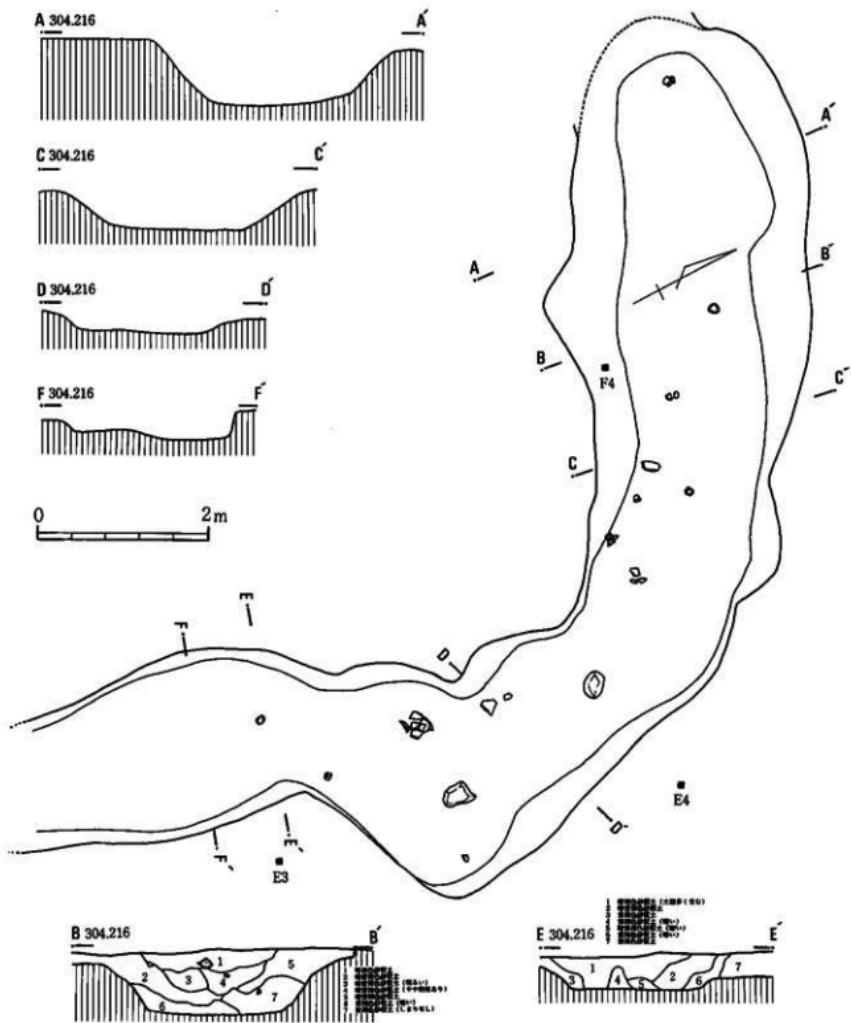
第59図 土坑出土土器

○出土土器（第60図）

1は壺形土器で口縁部が欠損している。底径7.8cmを測る。肩部はなだらかで張りをもたない。器体部外面下半ミガキ、内面はナデ調整が施される。2は壺の口縁部で口径13.9cmを測る。口縁部が外反し、頸部が「く」の字状に屈曲する。口縁部外面ナデ調整、内面ハケ調整が施される。3は壺の底部破片で、底径7.2cm。外面ミガキ、内面ハケ調整が施される。4・5は壺の底部破片で、ハケ調整が施される。4は底径5.6cm、5は底径4.6cmを測る。6・7・8は台付壺の脚部で、6は底径8.6cmで、外面ハケ調整、内面は指ナデ調整が施される。7は底



第60図 第2号溝出土土器

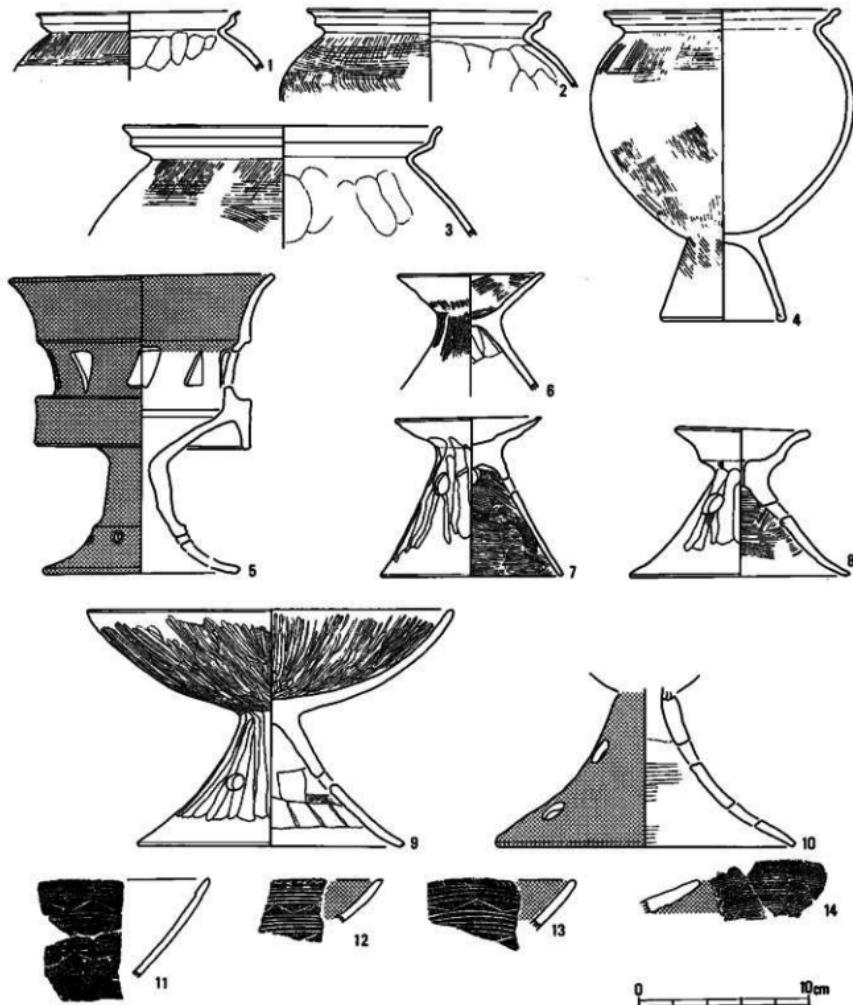


第61図 第2号溝

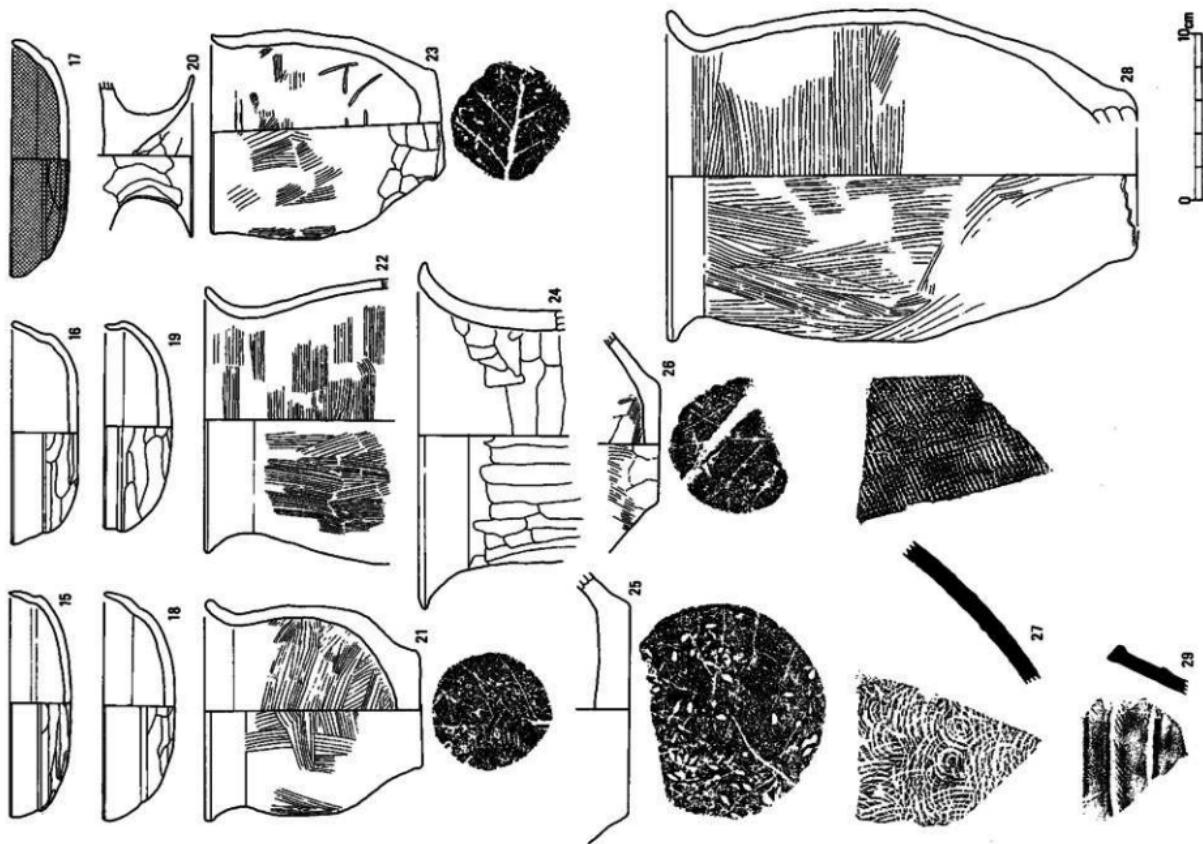
径7.7cmでやや外反しながら開く。外面ハケ調整、内面指ナデ調整が施される。8は底径8.7cm、外面ナデ調整、内面指ナデ調整が施される。9は壺形土器の胴部下半で、底径5.6cmを測り、胴張りの器形を呈する。外面ミガキ、内面上半ハケ調整後、ヘラ削りが施され、下半はハケ調整が施される。10は高環の脚部で、底径14.6cmを測る。脚部は外反しラッパ状に開く。脚部に円孔が1カ所3方向に施される。色調は赤褐色を呈する。

5) 古墳時代造構外出土土器 (第62・63図)

造構に伴わない土器を29点図示した。1～4が台付甕、5～8が器台、9・10が高坏、11～14がバレス模様が施される高坏及び壺形土器の破片である (第62図)。15～19は土師器坏、20は高坏、21～29は甕であるが、そのうち27・29は須恵器甕の破片である (第63図)。1～4は口縁がS字状になる台付甕で、1は口径12.2cmを測り、口縁先端部は鋭く尖り、口縁部各段は明瞭である。口縁部ナデ調整、肩部外面縦横方向のハケ調整、内面には指頭痕が見られる。2は口径14.6cmで、口縁先端部は丸みを持ち、口縁部各段は明瞭である。口縁部ナデ調整、肩部外面には縦横方向のハケ調整が施される。内面には、指頭痕による調整が施される。3は口径19.2cm。口縁部



第62図 古墳時代造構外出土土器 (1)



第63圖 古堆時代遺物出土土器 (2)

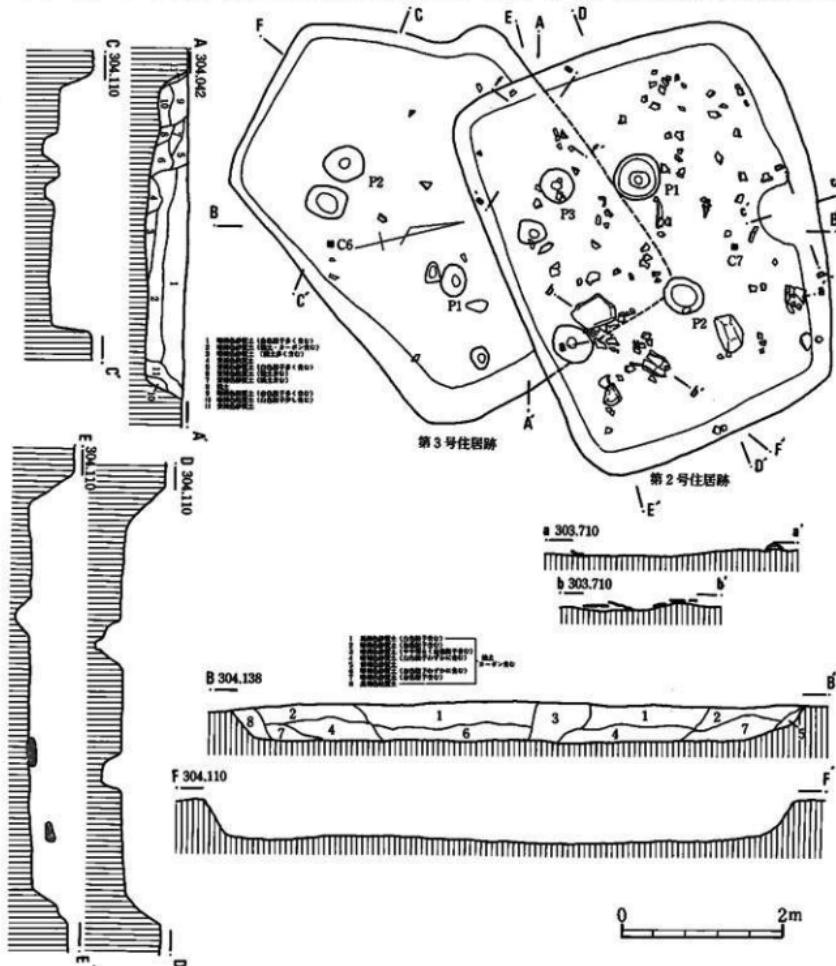
先端は丸みを持ち、口縁部各段はあまり明瞭ではない。口縁部ナデ調整、肩部外面には縦横方向のハケ調整が施される。4は口径13.9cm、器高18.4cm、底径7.0cmを測る。口縁部先端は丸みを持ち、大きく開く。口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。色調は外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。5は特殊器台であるが、口径15.9cm、器高17.9cm、底径11.8cmを測る。口縁部がやや外反しながらラッパ状に開く。器受部には三角形状の透かしが互い違いに10カ所に施される。器受部底面には円孔が見られる。脚部は大きく外反しながらラッパ状に開き、円孔が2カ所2方向に施される。外面全体及び内面口縁部に赤色塗彩が施される。6は脚部が欠損しており、口径8.8cmで器受部が皿状に広がり器受部底面に円孔は見られない。口縁部ナデ調整、内外面ハケ調整が施される。7は口径8.7cm、器高9.6cm、底径10.9cmを測る。器受部がやや内湾気味に広がり、脚部は円錐状に開く。器受部はナデ調整、外面にはミガキ、脚部内面ハケ調整が施される。脚部に円孔が1カ所3方向に施される。色調は明褐色を呈する。8は口径7.8cm、器高8.9cm、底径12.9cmを測る。器受部下半に稜が見られ、口縁部が外反し、脚部が朝顔状に開く。器受部底面には円孔が施され、脚部円孔が1カ所3方向に施される。口縁部ナデ調整、脚部外面にミガキ、内面ハケ調整が施される。色調は淡褐色を呈する。9は口径21.7cm、器高14.1cm、底径15.8cmを測る。坏部が内湾しながら開き、脚部はやや外反しながら開く。坏部内外面には放射状のミガキが施される。脚部は内面ヘラ削り、外面にはミガキが施される。脚部に円孔が1カ所3方向に施され、色調は褐色を呈する。10は坏部が欠損している。脚部は底径17.7cmを測り、外反しながら開く。円孔は2カ所4方向に見られ、外面には赤色塗彩が施される。11~14はパレス模様が施される高坏及び壺の破片で、いずれも櫛描直線文が2~5本見られ、その間に山形文が施される。12~14には赤色塗彩が施される。15は口径13.3cm、器高3.7cmを測り、口縁部先端は内湾する。色調は、赤褐色を呈する。16は口径13.4cm、器高4.0cm、底径6.0cmを測り、口縁部は、ほぼ直立する。17は口径13.9cm、器高3.5cmを測り、口縁先端部が内湾する。また、内外面には赤色塗彩が施される。色調は、外面赤褐色、内面褐色を呈する。18は口径13.0cm、器高4.3cm、底径3.4cm。口縁部はほぼ直立し、色調は明褐色を呈する。19は口径12.3cm、器高4.0cm、底径2.6cmを測る。須恵器坏身を模倣した器形で、色調は明褐色を呈する。15~19の器面調整はいずれも、外面上半及び内面はナデによる調整が、外面下半にはヘラ削りが施される。20は高坏の脚部で、底径9.6cmを測る。脚部内外面にヘラ削りを施す。色調は淡褐色を呈する。21は口径13.0cm、器高12.8cm、底径7.0cm。口縁部ナデ調整、器体部外面及び内面にはハケ調整が施される。また、底部には木葉痕が見られる。色調は赤褐色を呈する。22は口径16.1cmを測り、口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施される。色調は淡褐色を呈する。23は口径12.0cm、器高13.8cm、底径6.6cmを測る。口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施され、器体部下半にはヘラ削りが施される。また、底部には木葉痕が施される。24は口径20.9cmで、ラッパ状に開く。口縁部ナデ調整、器体部にはヘラ削りが施される。色調は茶褐色を呈する。25は底部破片で、底径12.6cmを測る。底部には木葉痕や初痕が見られる。26は底径6.8cm。内外面にハケ調整を施し、底部には木葉痕が見られる。27は須恵器の壺の破片で、内外面にタタキメが見られる。色調は灰褐色を呈する。28は口径20.0cm、器高28.3cm、底径10.0cmを測る。口縁部ナデ調整、胴部にはハケ調整が施される。色調は灰褐色を呈する。29は須恵器の壺の口縁部で、色調は灰褐色を呈する。

第4節 奈良時代

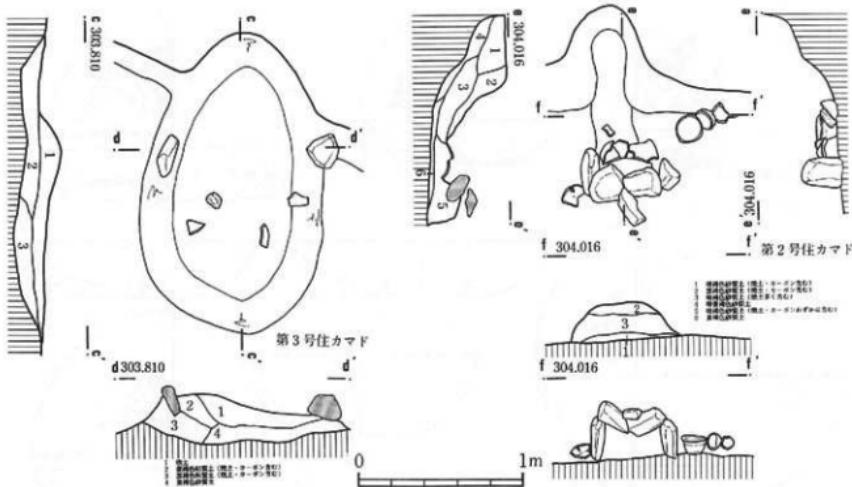
1) 住居跡

◎第2号・3号住居跡（第64～65図）

C-5、B-C-6・7グリッドに位置する。第2・3号住居跡は重複し、第3号住が第2号住に切られている。第2号住居跡は、長辺5.0m、短辺4.0mの隅丸長方形を呈する。第3号住居跡は、住居跡北東側が重複しているため、不明であるが長辺5.2m、短辺3.8mの隅丸長方形を呈すると思われる。床面は2軒ともほぼ同一レベルで、全体的に良好である。壁高は、第2号住で高さ50cmで緩やかに立ち上がり、第3号住は40cm程でほぼ垂直に立ち



第64図 第2・3号住居跡



第65図 第2・3号住跡カマド

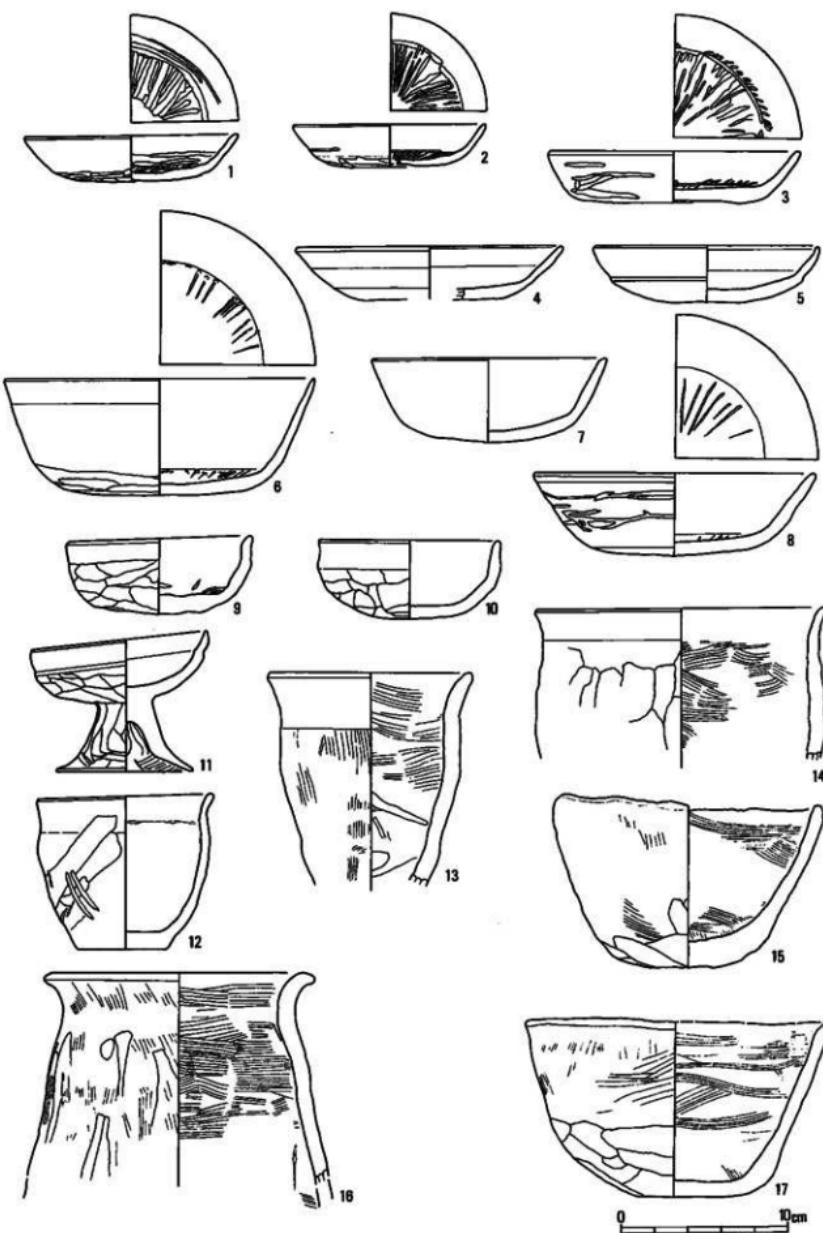
上がる。

ピットは、第2号住で2基、第3号住に伴うもの3基が確認されている。第2号住は住跡中央部に2基確認されており、ピット1は直径0.50m、深さ0.30m。ピット2は長径0.50m、短径0.40m、深さ0.25mを測る。第3号柱は確実に伴うと思われるものは3基で、ピット1は、長径0.40m、短径0.30m、深さ0.15m。ピット2は、直径0.45m、深さ0.15m。ピット3は、直径0.40m、深さ0.10mを測る。カマドは、第2号住は北側壁中央に構築されており、残存状態は良好である。袖石は左右一対、天上石も見られるが中央で崩落している。焼土は10cm程度体積している。第3号住も住跡北側壁に構築されていたと思われるが、長径1.80m、短径1.10mの掘り込みが確認され、焼土やカーボンが混在していた。遺物は、第2号住からは壺・高壺・甕・紡錘車・甑など豊富に出土している。第3号住は甕・高壺などが若干出土している。2軒ともここでは奈良時代としているが、第2・3号住は切り合っているため、第2号住が新、第3号住が古、となると思われるが、第66・67・68図の遺物が混在しているかもしれない。

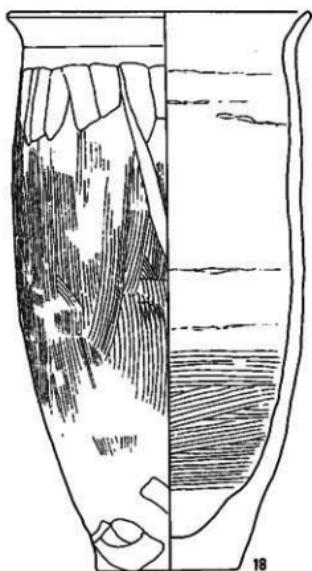
○出土遺物

第2号住跡（第66～67図・第103・7図）

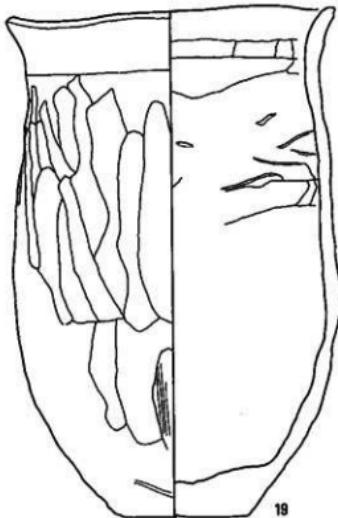
1～10は壺、11は高壺、12～14・16・18・19・21は甕、15・17は鉢、20は甑。1は口径12.8cm、器高2.8cm、底径7.4cm。外面上半及び内面上半ナデ調整、外面下半ヘラ削り、みこみ部にミガキによる放射状暗文が施される。色調は明褐色を呈する。2は口径11.7cm、器高2.7cm、底径6.6cm。器面調整は1と同じであるが、器体部下半に稜が見られる。色調は、明褐色を呈する。3は口径15.0cm、器高3.1cm、底径9.6cmで盤状を呈し、底部の縁が角ばかり口縁に至る。器体部外面には、ミガキが施され、みこみ部に放射状暗文が施される。色調は明褐色を呈する。4は口径16.2cm、器高3.3cm、底径8.6cmを測る。色調は、明褐色を呈する。5は口径13.6cm、器高3.5cm、底径4.0cmを測る。口縁部が内湾し、立ち上がる。器体部下半に稜を持ち、いわゆる鬼高の様相を持つが、1・2のように体部が球形ではなく、皿状を呈す。6は口径18.6cm、器高7.2cm、底径11.2cm。口唇部が鋭く尖る。器体部外面上半ナデ調整、底部外面ヘラミガキ、みこみ部にミガキによる放射状暗文が施される。色調は、明褐色を呈する。7は口径14.2cm、器高4.9cm、底径6.0cmを測る。色調は、赤褐色を呈する。8は口径17.0cm、器高5.0cm、底径9.6cm。器体部外面ミガキ、内面ナデ調整、見込み部には、暗文が施される。色調は、明褐色を呈する。9は口径11.2cm、器高4.6cm、底径6.8cm。外面上半及び内面ナデ調整、外面下半ヘラ削りが施される。



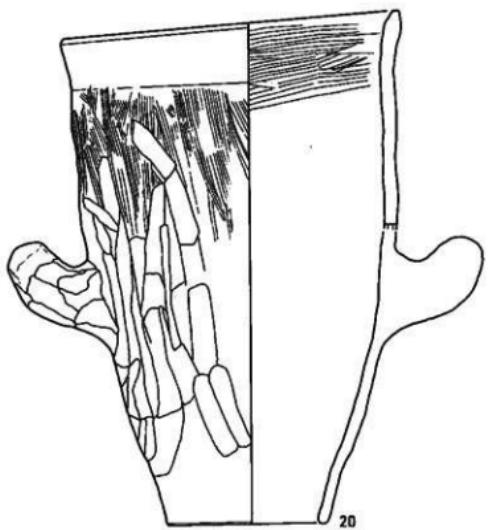
第66図 第2号住居跡出土土器(1)



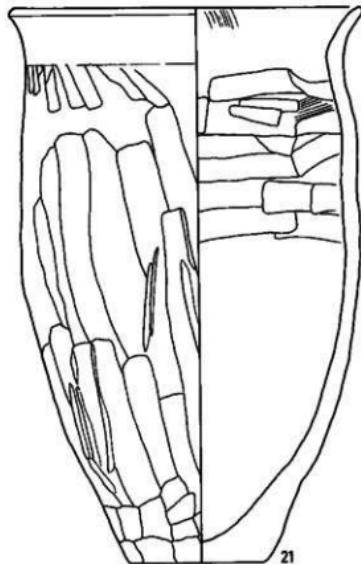
18



19



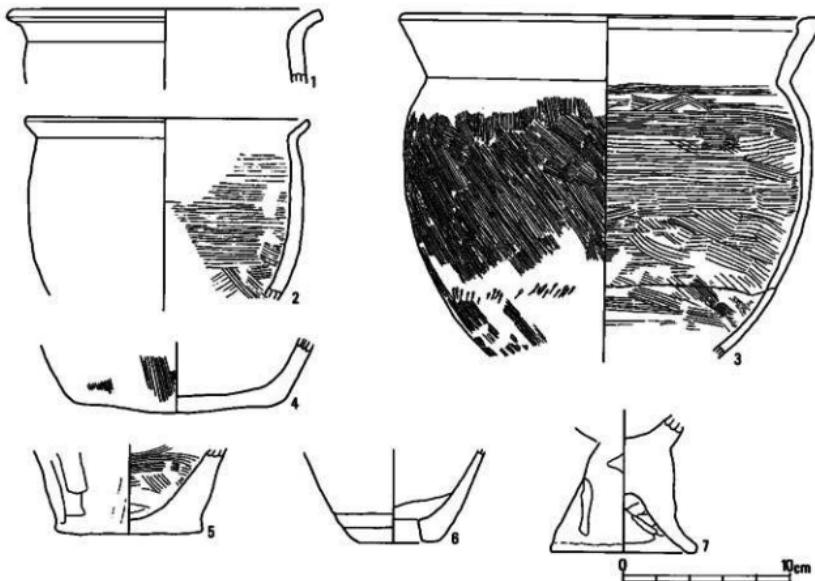
20



21



第67図 第2号住居跡出土土器 (2)



第68図 第3号住居跡出土土器

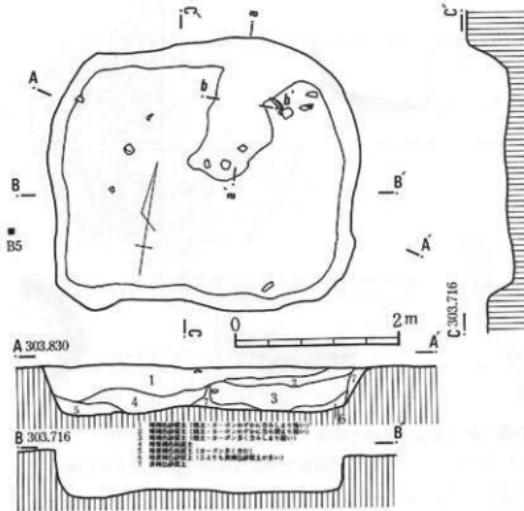
色調は赤褐色を呈する。10は口径11.2cm、器高4.7cm、底径3.2cm。口縁部がやや外反し開く。器面調整は9と同じである。色調は明褐色を呈する。11は口径10.5cm、器高8.0cm、底径8.2cm。坏部上半及び内面ナデ調整、坏部下半及び脚部にかけてヘラ削りが施される。脚部内面には指ナデ調整が見られる。色調は、暗褐色を呈する。古墳時代後期鬼高型の高环と思われ、おそらく混入品と思われる。12・13は小型の甕で、口径10.5cm、器高9.4cm、底径5.5cm。14・16は甕の上半部で、16は口縁部が折り返し、朝顔状に開く。15は口径16.2cm、器高9.7cm、底径6.0cm。内外面ナデ調整後、ハケ調整が見られる。色調は茶褐色を呈する。17は口径18.4cm、器高10.6cm、底径5.0cmを測る。器体部内外面上半ハケ調整、下半部はヘラ削りが施される。色調は明褐色を呈する。18は長胴の甕で、口径18.0cm、器高33.6cm、底径8.4cm。口縁部にはナデ調整、器体部上半ヘラ削り、下半部はハケ調整内面下半は、ハケ調整が施される。色調は黄褐色を呈する。19は下半部に膨らみを持つ。口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整が施される。20は口径20.2cm、器高30.6cm、底径9.5cm。口縁部ナデ調整、外面上半ハケ調整、下半ヘラ削りが施される。胸部中央に把手が見られ、色調は明褐色を呈する。21は口径21.0cm、器高33.5cm、底径7.5cm。口縁部ナデ調整、器体部内外面ヘラ削りが施される。色調は赤褐色を呈する。

○第3号住居跡（第68図）

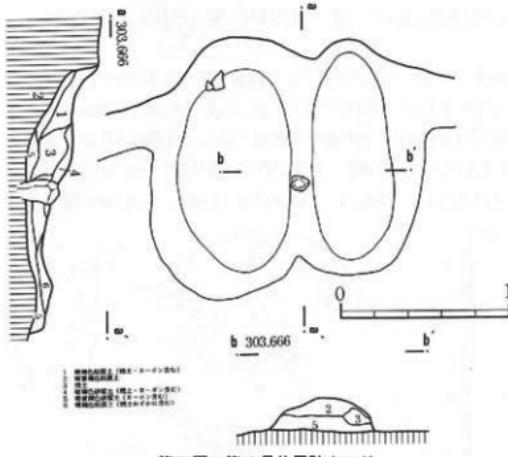
1～5は甕、6は瓶、7は高环の7点を図示した。1～3は甕の上半部で、1は口径18.0cm。口縁部は外反し開く。内外面ナデ調整が施され、色調は褐色を呈する。2は口径17.0cm。口縁部ナデ調整、内面にハケ調整が施される。3は口径25.6cm。口唇部が折り返り、頸部が「く」の字状に屈曲する。口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施され、口縁形態から、いわゆる駿東型の様相を呈し、色調は明褐色を呈する。4・5は甕の底部破片で、6は瓶で内外面ナデ調整、色調は赤褐色を呈する。7は高环の脚部で、底径8.8cmで粗雑な作りである。

○第4号住居跡（第69・70図）

A-4・5、B-5グリッドに位置する。長辺3.8m、短辺3.2mの隅張りの隅丸長方形を呈する小型の住居跡である。床面は黄褐色土を呈し、貼り床などの踏み固められたような痕跡はなく、状況はよくなかった。壁高は50



第69図 第4号住居跡



第70図 第4号住居跡カマド

1は土師器環で口径16.6cm、器高5.0cm、底径9.2cm。色調は、黄褐色を呈する。2は鉢?で口径17.2cm、器高10.6cm、底径10.0cmで頭部が「く」の字状に屈曲する。また、胴部中央に稜が見られる。口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整が施される。色調は、黒褐色を呈する。3は甕の胴部破片で、外面ハケ調整後ヘラ削りが施される。色調は赤褐色を呈する。

◎第11号住居跡（第73図）

D・E-12グリッドに位置する。長辺5.8m、短辺5.1mの隅丸長方形を呈する。住居跡南東側は攪乱によりプランは確認できなかった。床の状況も軟弱で、安定していなかった。壁高は20cmで立ち上がる。ピットは、本住居

cm程で、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドは住居跡北側の東側コーナー付近に構築されている。袖石などは確認できなかつたが、石製の支脚が検出されている。焼土の堆積は20cmほど見られた。壺・甕・瓶などが出土している。

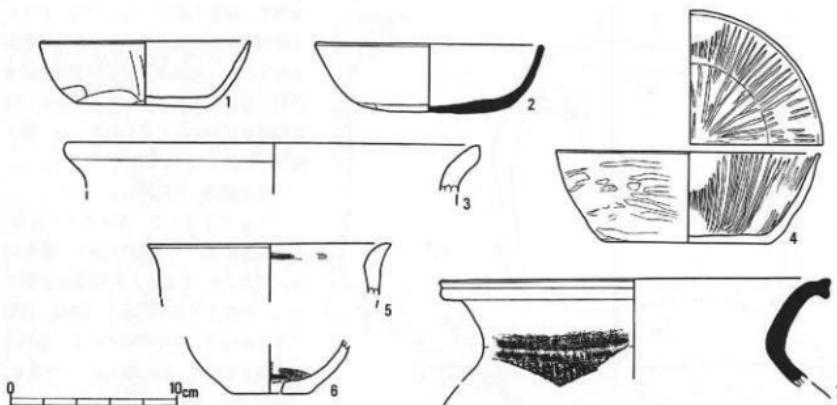
◎出土遺物（第71図）

1・2・4は壺で、3・5・7は甕、6は瓶である。1は口径12.8cm、器高3.9cm、底径7.9cmを測る。口唇端部が鋭く尖る。外面上半及び内面ナデ調整、外面下半にはヘラミガキが施される。色調は明褐色を呈する。2は須恵器の壺である。口径13.9cm、器高4.1cm、底径5.3cmを測る。内外面ナデ調整、底部にはヘラ削りが施される。色調は灰白色を呈する。3・5は甕の口縁部破片で、4は口径16.0cm、器高5.5cm、底径10.1cmで、口縁端部が鋭く尖る。器体部外面ミガキが施され、内面及び見込み部にはミガキによる放射状暗文が施される。色調は黄褐色を呈する。6は瓶の底部で、底径4.4cmを測る。7は須恵器の甕で、口径23.4cmを測る。色調は明灰色を呈する。

◎第10号住居跡（第72図）

E-9・10、F-9・10グリッドに位置する。一辺が3.0mの隅丸方形を呈する小型の住居跡である。床面は全体的に軟弱で、壁高は依存状態はよくなく10cm程で立ち上がる。カマドは、住居跡北側に構築されているが、袖石などは検出できなかった。掘り方は0.6m×0.4mで焼土の堆積は見られず、カマド覆土中に散在していた。

◎出土遺物（第74図）

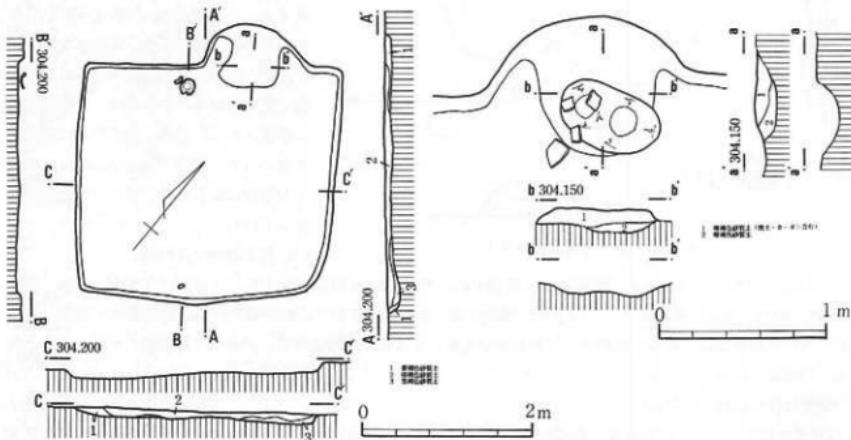


第71図 第4号住居跡出土遺物

跡に伴うものと思われるものは、3基確認されている。ピット1は、長径0.50m、短径0.40m、深さ0.30mを測る。ピット2は、長径0.55m、短径0.50m、深さ0.25m。ピット3は、長径0.65m、短径0.60m、深さ0.30mを測る。カマドは北側壁と南西側壁に2基構築されている。カマド1は、住居跡北側の壁に構築されており、掘り込み部分が浅いものの3カ所検出されている。焼土の堆積は10cm程見られる。カマド2は、住居跡西側壁中央に構築されている。焼土は15cm程堆積していたが、袖石などは検出できなかった。遺物は壺・甕などが出土している。

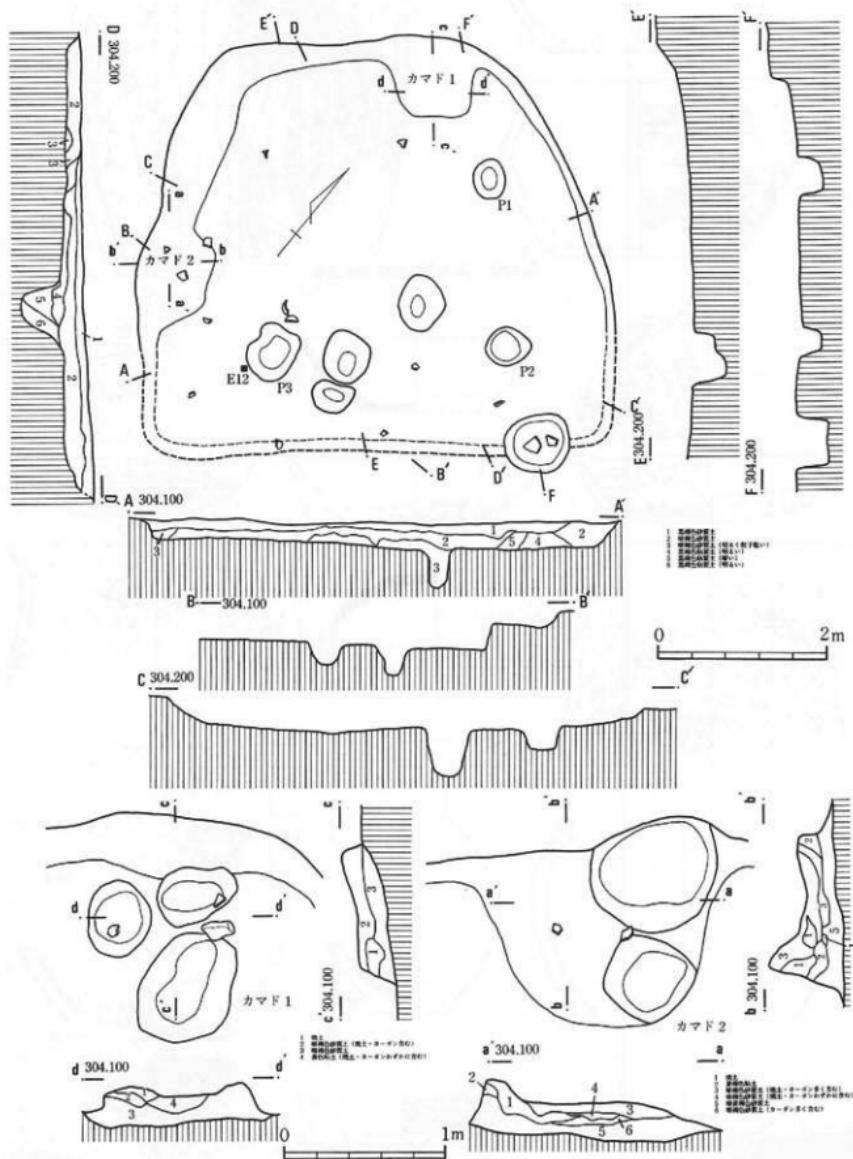
○出土遺物（第75図）

1～4が壺、6が須恵器壺蓋、5・7～13が甕である。1は口径16.0cm、器高4.0cm、底径14.0cmを測る。口縁部ナデ調整、器体部内外面ミガキ、見込み部にはミガキによる放射状暗文が見られる。色調は黄褐色を呈する。2は須恵器の壺で、口径14.2cm、器高4.3cm、底径7.5cmを測る。内外面ナデ調整を施し、色調は灰褐色を呈する。3は口径15.5cm、器高3.7cm、底径8.5cm。外面上半及び内面ナデ調整、外面下半ヘラ削り及びミガキが施され、口縁部先端が尖る。色調は黄褐色を呈する。4は口径14.5cm、器高3.5cm、底径13.0cmを測る。器体部内外面ミガキ



第72図 第10号住居跡・同住居跡カマド

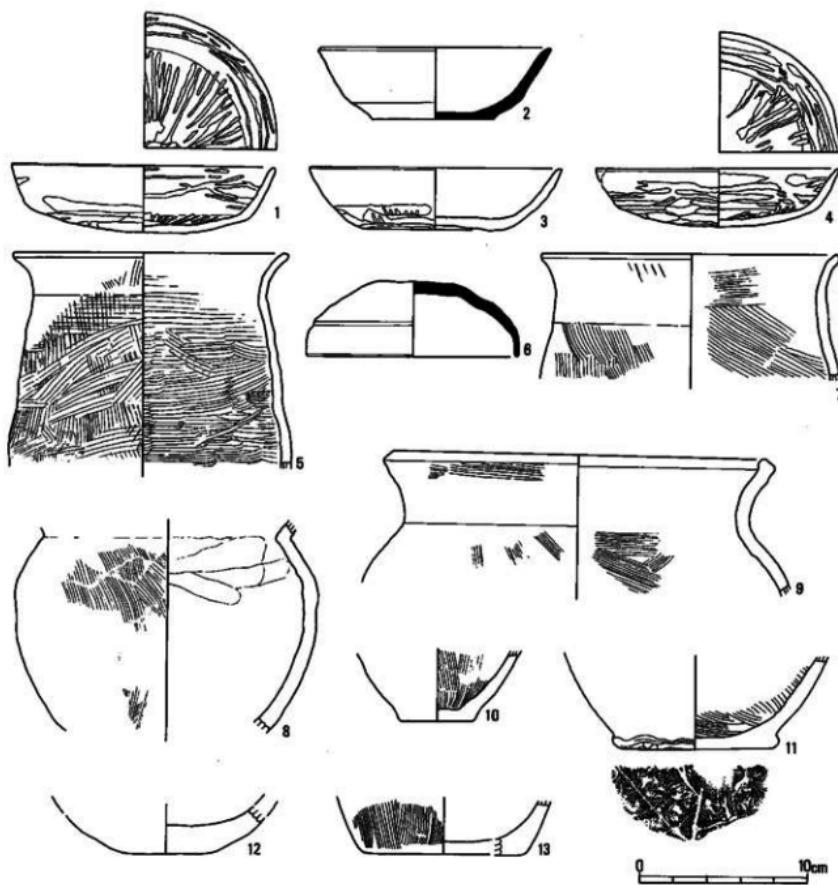
が施される。また、見込み部には、放射状暗文が見られる。色調は、黄褐色を呈する。5は甌の上半部で口径



第73図 第11号住居跡・同住居跡カマド



第74図 第10号住居跡出土土器



第75図 第11号住居跡出土土器

16.5cm。口縁部ナデ調整、内外面にはハケ調整が施される。色調は、茶褐色を呈する。6は須恵器環蓋で、口径13.0cm、器高4.5cm。器体部内外面ナデ調整が施される。色調は、灰褐色を呈する。7も甕の上半部で、口縁部ナデ調整、胴部内外面にはハケ調整が見られる。8は甕の胴部破片、9は甕の口縁部で、口径24.0cm。頸部はなだらかにくびれる。口縁部先端が内湾する。口縁部の形態から駿東型の甕と思われる。色調は黄褐色を呈する。10~13は甕の底部破片で、11は底部に木葉痕が見られる。

◎第12号住居跡（第76図）

D-11、E-11・12グリッドに位置する。長辺3.9m、短辺3.2mの小型の隅丸方形を呈する。床の状況は軟弱で安定していない。壁高は20cm程で、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドやピットは検出できなかった。遺物は、壙が2点ほど確認されている。

◎出土遺物（第77図）

1は須恵器の壙で、口径14.0cm、器高4.2cm、底径7.0cm。内外面ナデ調整、色調は灰褐色を呈する。2は、大型の壙で口径17.5cm、器高6.7cm、底径12.0cmを測る。器体部外面全体及び内面にミガキが施され、見込み部にミガキによる放射状暗文が施される。また、内面には初痕、底部にはペン先状工具による線刻が「井」の字状に施される。

◎第27号住居跡（第78図）

I-12・13グリッドに位置する。推定で4.2mを呈するものと思われる。カマド周辺で壁が確認できたほかは、攪乱を受けているため確認はできなかった。床面は、カマド周辺部が安定している。壁もカマド周辺以外は確認できなかった。カマドは住居跡北西側の壁中央部に構築されていたと思われ、掘り込みが長径0.8m、短径0.75mの規模で確認され焼土が5cm程堆積していた。遺物は、カマド周辺及び内部から甕が出土している。

◎出土遺物（第79図）

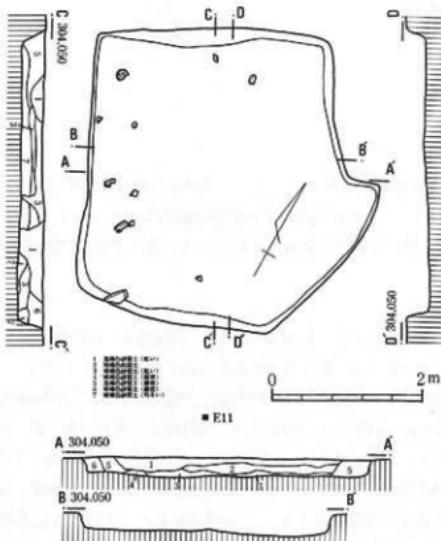
1は甕の底部で、底径10.2cm。外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。色調は、茶褐色を呈する。2・3は、甕の口縁部で口径24.0cm。内外面にナデ調整が施される。色調は暗褐色を呈する。3は口径25.4cm。口縁部ナデ調整、外面ハケ調整、内面ヘラ削りが施される。色調は黄褐色を呈する。4は甕の上半部で、口径28.0cm。口縁部ナデ調整、器体部外面ハケ調整、内面ヘラ削りが施される。色調は明褐色を呈する。

◎第28号住居跡（第80図）

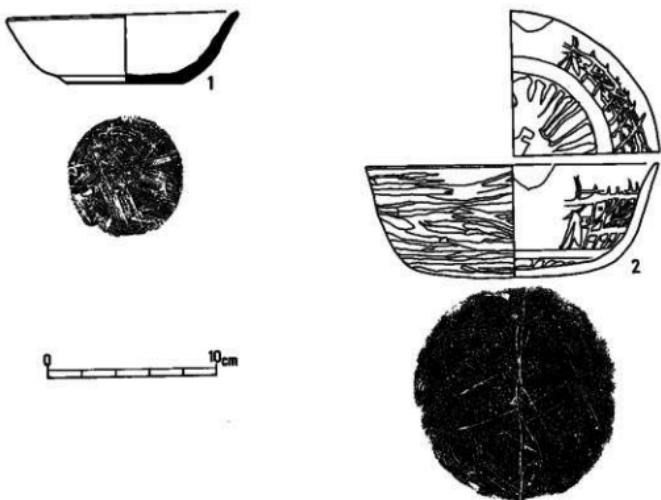
F・G-8・9グリッドに位置する。長辺3.1m、短辺2.4mの小型の住居跡で、隅丸方形を呈する。床面は全体的に軟弱で安定した床面は検出できなかった。壁高は25cmで緩やかに立ち上がる。カマドは住居跡北側壁東側コーナー付近に構築されている。カマド左側に袖石が見られたが、他の施設は確認できなかった。長径0.75m、短径0.60mの規模で掘り込みが確認されている。遺物は、カマド内及びカマド周辺に見られる。

◎出土遺物（第81図）

1・2・4が壙、3・5・6が甕である。1は口径15.4cm。内外面ナデ調整が施される。色調は明褐色を呈する。2は口径16.0cm、器高5.8cm、



第76図 第12号住居跡



第77図 第12号住居跡出土土器

底径10.0cm。内外面ナデ調整が施され、色調は明褐色を呈する。3は小型甌の上半部で、口径12.0cmを測る。口縁部ナデ調整、外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。色調は赤褐色を呈する。4は口径20.0cm、器高5.0cm、底径12.0cm。内外面ハケ調整が施される。色調は明褐色を呈する。5は底径5.2cm。外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。6は胴部破片で、内外面ハケ調整が施される。

第5節 平 安 時 代

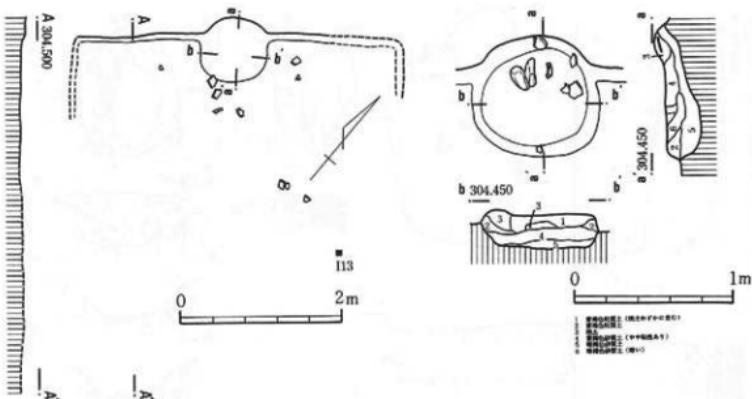
1) 住 居 跡

○第15号住居跡（第82図）

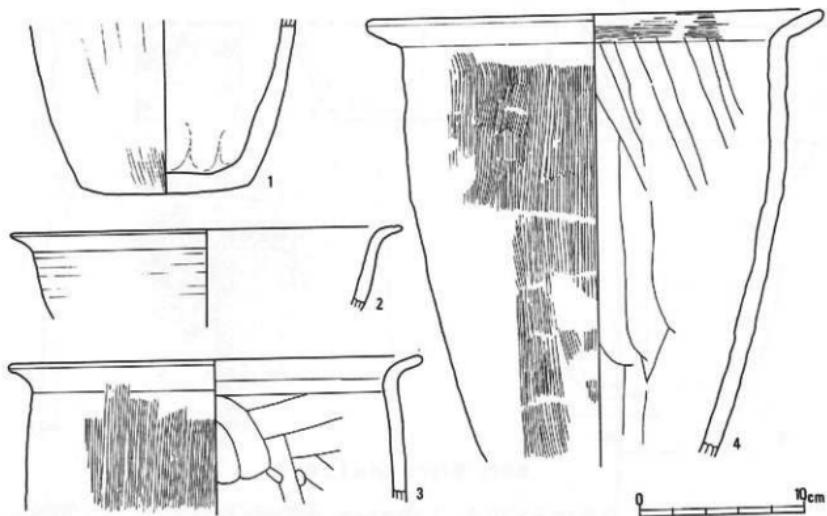
E・F-8・9グリッドに位置する。第14号・第20号住居跡と重複している。一辺が4.2mの隅丸方形を呈すると思われる。住居跡プランは、はっきりつかめなかったが、カマド周辺は依存状態は良好であった。カマドは、住居跡北西壁中央に構築されている。袖石は、右側に2枚、左側に3枚検出されている。焼土は最大で10cm程堆積している。

○出土遺物（第83図）

遺物は、1・2・4・5が壺、3は皿、6は甌、7は羽釜である。1は口径12.6cm。口縁部が玉縁状を呈する。内外面ナデ調整が施され、色調は褐色を呈する。2は口径17.0cm。器体部上半及び内面ナデ調整、下半部はヘラ削りを施す。色調は褐色を呈する。3は口径11.4cm、器高2.2cm、底径5.8cm。内外面ナデ調整、底面には回転糸切り痕が見られる。色調は赤褐色を呈する。4は口径12.6cm、器高3.7cm、底径5.8cm。内外面ナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は赤褐色を呈する。5は口径15.0cm、器高4.8cm、底径7.8cm。内外面ナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は明褐色を呈する。6は口径30.0cm。口縁部ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施される。胎土はやや粗く、色調は赤褐色を呈する。7は鉢径33.9cm、口径28.0cm。口縁部外面ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施される。色調は暗褐色を呈する。



第78図 第27号住居跡・同住居跡カマド



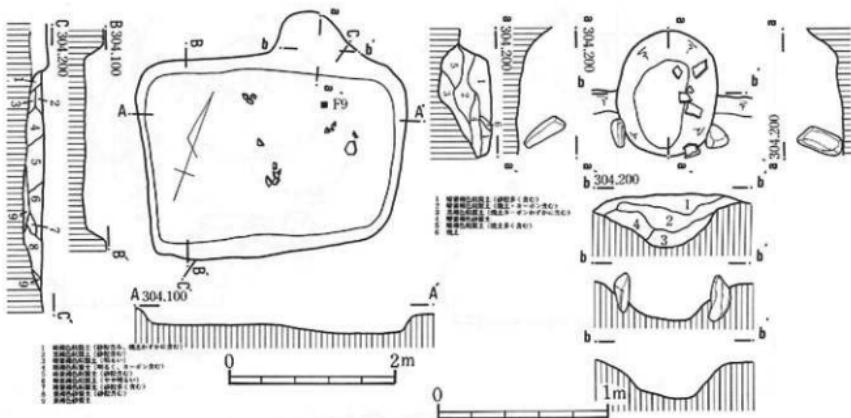
第79図 第27号住居跡出土土器

◎第16号住居跡（第84図）

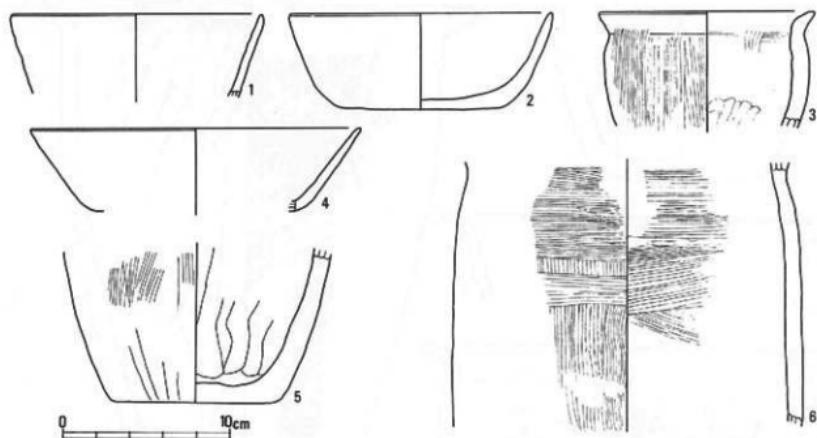
B-8 グリッドに位置する。擾乱によって住居跡全体の形状・規模は全く不明で、カマドの部分でしか確認できなかったが、おそらく東側の壁にカマドは構築されていたものと思われる。カマドの左側に袖石は3枚、右側には2枚検出されている。焼土の堆積は、ほとんど見られない。掘り込みが長径0.9m、短径0.65mの規模で検出されている。カマド内からは羽釜が出土している。

◎出土遺物（第85図）

1・2が環、3が灰釉の皿、4が甕、5は鉢、6～8が羽釜、9が常滑の片口鉢である。1は口径15.6cm、器高5.4cm、底径7.6cm。内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は褐色を呈する。2は口径15.0cm、



第80図 第28号住居跡・同住居跡カマド

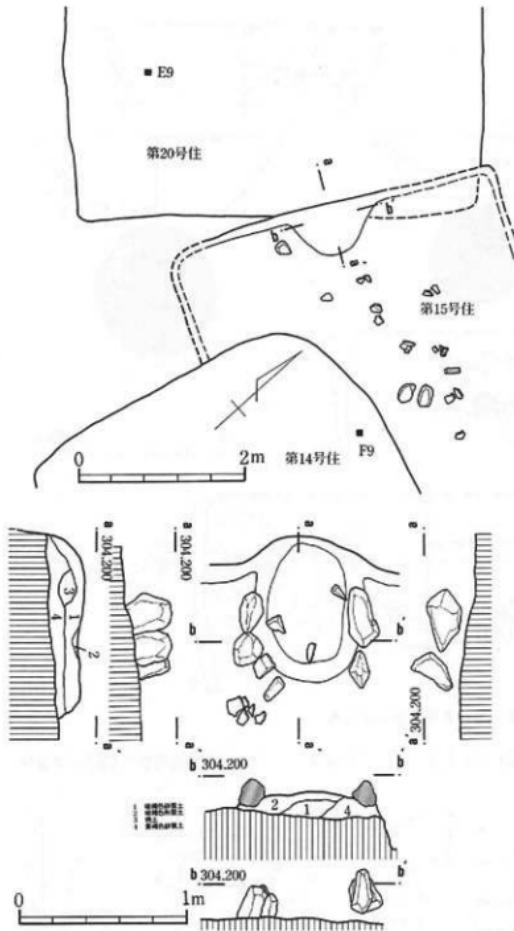


第81図 第28号住居跡出土土器

器高4.2cm。内外面ナデ調整、色調は褐色を呈する。3は底径8.4cm。色調は明灰褐色を呈する。4は口径29.2cm、口縁部外面ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施される。色調は赤褐色を呈する。5は口径23.2cm、器高9.3cm、底径9.4cm。外面ナデ調整、内面ハケ調整が施される。色調は茶褐色を呈する。6は鉢径28.8cm、口径22.0cm。口縁部及び鉄部はナデ調整、内面ハケ調整が施される。色調は赤褐色を呈する。7は鉢径29.0cm、口径24.2cm。鉄部及び内面ナデ調整、外表面はハケ調整が施される。色調は暗褐色を呈する。8は鉢径33.2cm、口径29.2cm。外表面はナデ調整が施される。色調は茶褐色を呈する。9は口径37.6cm。色調は明褐色を呈する。

◎第17号住居跡 (第86図)

A-8 グリッドに位置する。搅乱によって住居跡全体の形状・規模は不明である。16号住居跡同様、カマド周辺部が確認できただけである。おそらく、カマドは住居跡東側壁に構築されていたと思われる。袖石は崩壊している。掘り込みが確認でき、長径0.73m、短径0.50mを測る。カマド内の焼土は、5cmほど堆積し、検出できた。



第82図 第15号住居跡・同居跡カマド

3は口径13.0cm、器高3.4cm、底径5.4cm。内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は、茶褐色を呈する。4は底径5.0cmを測る。底部には回転糸切り痕が見られる。色調は、明褐色を呈する。6は口径28.0cm、内外面ハケ調整が施され、胎土はやや粗い。色調は外面茶褐色、内面赤褐色を呈する。7は鉢径29.6cm、口径24.4cmを測る。外面ナデ調整、内面ハケ調整が見られる。色調は明褐色を呈する。8は口径28.4cm。口縁部ナデ調整、器体部外面ヘラ削り、内面ナデ調整が施される。色調は、外面茶褐色、内面赤褐色を呈する。9は口径27.4cm、外面ヘラ削り、内面ナデ調整が施される。色調は、外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。

◎第23号住居跡（第90図）

K・L-11グリッドに位置する。長辺4.4m、短辺3.8mの隅丸方形を呈する。第2号方形周溝墓及び第25号住居跡と重複している。依存状態は比較的良好で、覆土は暗褐色砂質土を呈する。壁高は10cm程度で緩やかに立ち上が

カマド内からは、羽釜が出土している。

◎出土遺物（第87図）

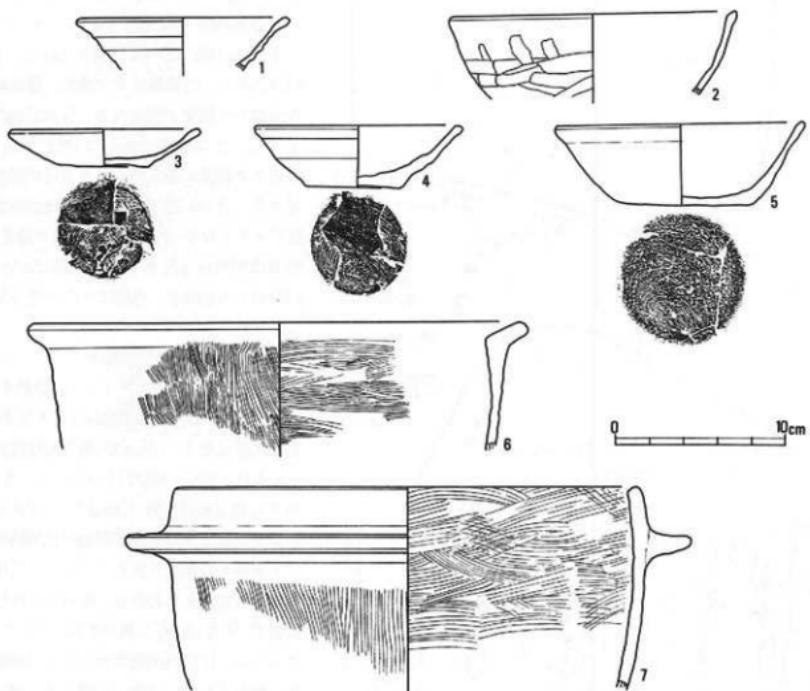
1・3は甕、2・4は羽釜である。1は口径25.0cm。口縁部はナデ調整、器体部内外面はハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。2は鉢径27.4cm、口径22.2cm。内外面ナデ調整が施される。色調は明褐色を呈する。3は口径29.4cm、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。内外面ハケ調整が施され、色調は明褐色を呈する。4は鉢径37.8cm、口径31.0cmを測る。色調は、明褐色を呈する。

◎第19号住居跡（第88図）

D-9・10、E-9グリッドに位置する。長辺4.6m、短辺4.5mの隅丸方形を呈する。依存状態は悪く、住居跡北側部分は攪乱などにより、プラン確認にとまどった。また、第1号掘立柱建物跡（第95図）と重複しているが、ピットの1基が第19号住居跡のカマド下部から検出されたため、第19号住居跡以前の遺構と思われる。床面は全体的に軟弱で、壁も10cm程度で緩やかに立ち上がる。カマドは、住居跡南側のコーナーに構築され、袖石は右側に2枚、左側に1枚確認されている。掘り込みは、わずかであるが、確認されている。

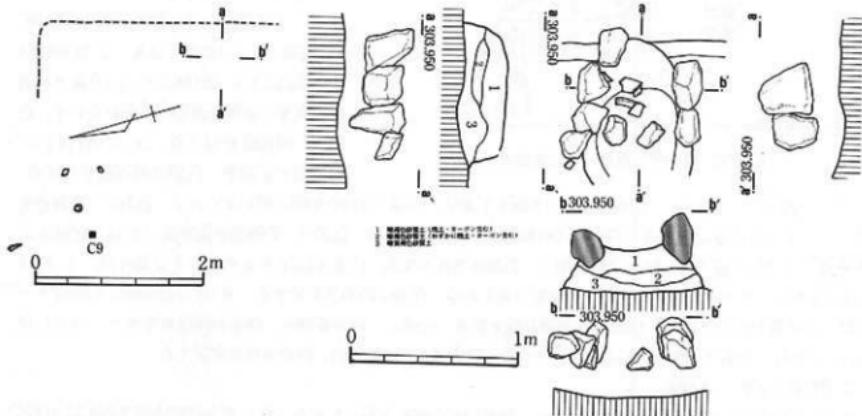
◎出土遺物（第89図）

1～4は甕、5は灰釉の小瓶、6は甕、7は羽釜、8・9は鉢である。1は口径13.4cm、器高9.3cm、底径6.0cm。内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は、明褐色を呈する。2は口径14.2cm。内外面ナデ調整、色調は明褐色を呈する。

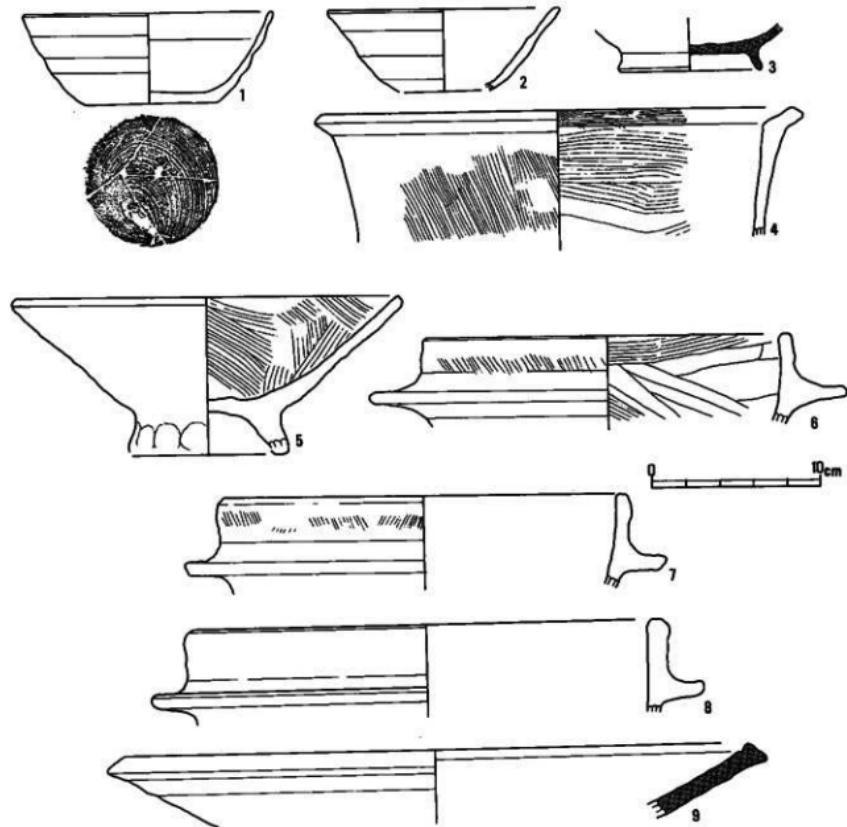


第83図 第15号住居跡出土土器

る。床面は、全体的に安定しており黄褐色砂質土を呈する。ピットとは考えにくいが、住居跡中央壁際に 2 基確



第84図 第16号住居跡・同住居跡カマド平面図

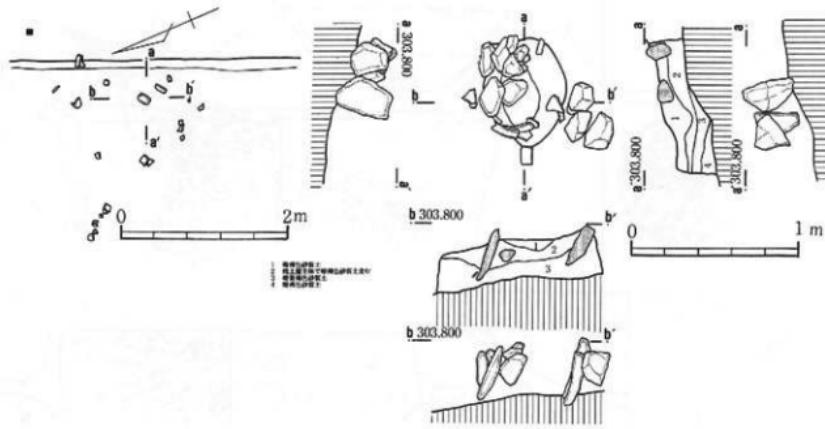


第85図 第16号住居跡出土土器

認されている。ピット1は長径0.60m、短径0.55m、深さ0.20m。ピット2は、長径0.85m、短径0.60m、深さ0.30mを測る。カマドは住居跡南東コーナーに構築されているが、袖石などの施設は検出されなかった。焼土は最大で15cmほど堆積しており、カーボンを多く含んでいる。また、掘り込みが長径1.55m、短径0.88mを測る。

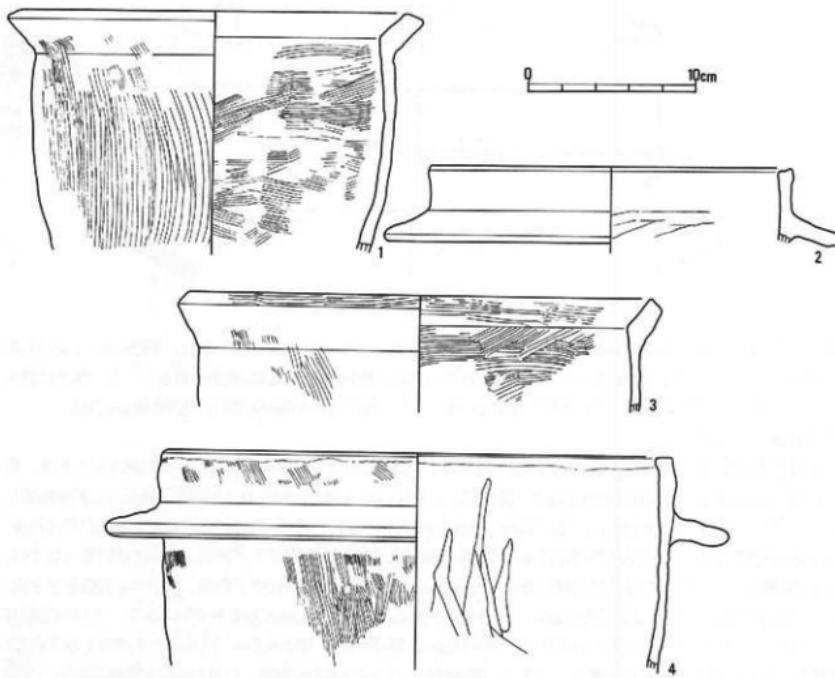
○出土遺物（第91図）

1は壺で口径12.2cm、器高3.5cm、底径6.0cm。内外面ナデ調整が施され、底面には回転糸切り痕が見られる。色調は赤褐色を呈する。2は壺で口径13.0cm、器高3.7cm、底径6.6cmを測る。内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕が見られる。3は壺で口径15.6cm、器高4.3cm、底径7.8cm。内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は暗褐色を呈する。4は壺で口径14.8cm、器高4.2cm、底径7.2cm。内外面ナデ調整、色調は赤褐色を呈する。5は壺で口径15.6cm、器高4.0cm、底径7.6cm。内外面ナデ調整、色調は赤褐色を呈する。6は皿で口径11.6cm、器高2.1cm、底径5.8cm。内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕が見られる。7は灰陶陶器の口縁部で、口径12.2cm。8は大型の壺で、口径16.2cm、器高6.0cm、底径10.2cm。内外面ナデ調整が施される。色調は、黄褐色を呈する。9は甕の上半部で、口径32.6cm。口縁外側ナデ調整、口縁内部及び器体部外側ハケ調整が施される。色調は、赤褐色を呈する。10は羽釜で銅径35.6cm、口径29.4cm。内外面にハケ調整が施される。

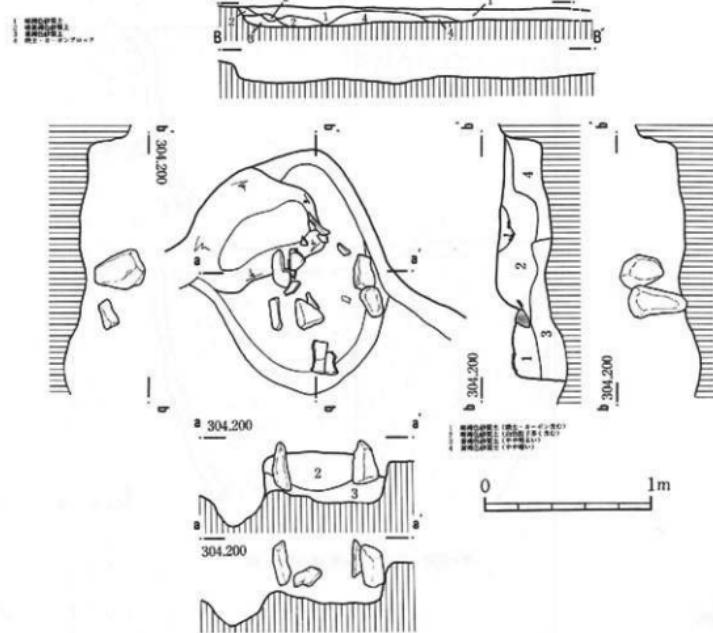
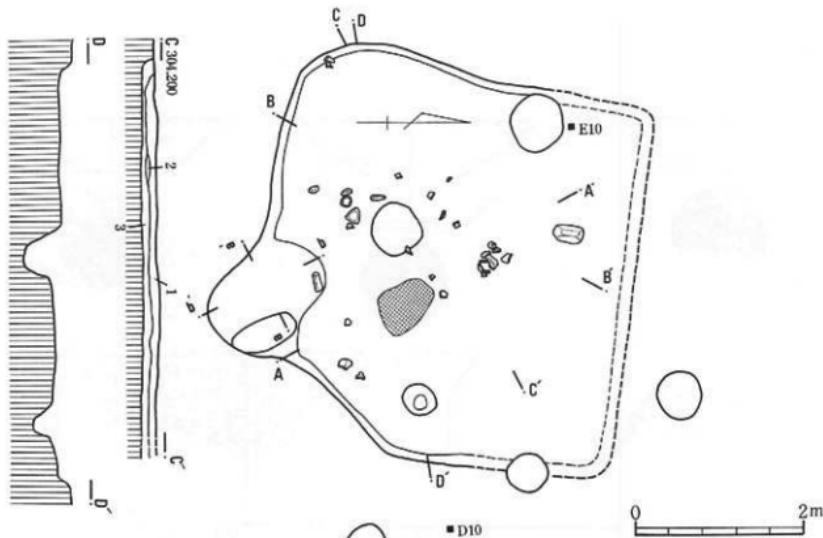


第86図 第17号住居跡・同住居跡カマド

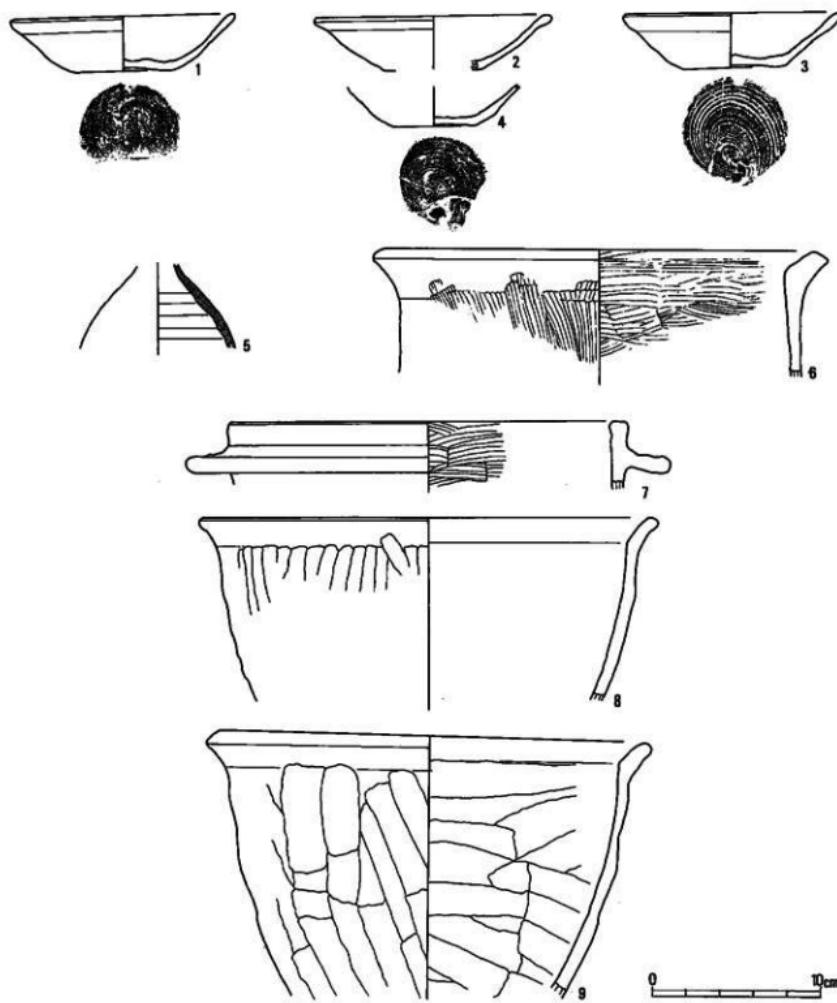
色調は、外面暗褐色、内面明褐色を呈する。



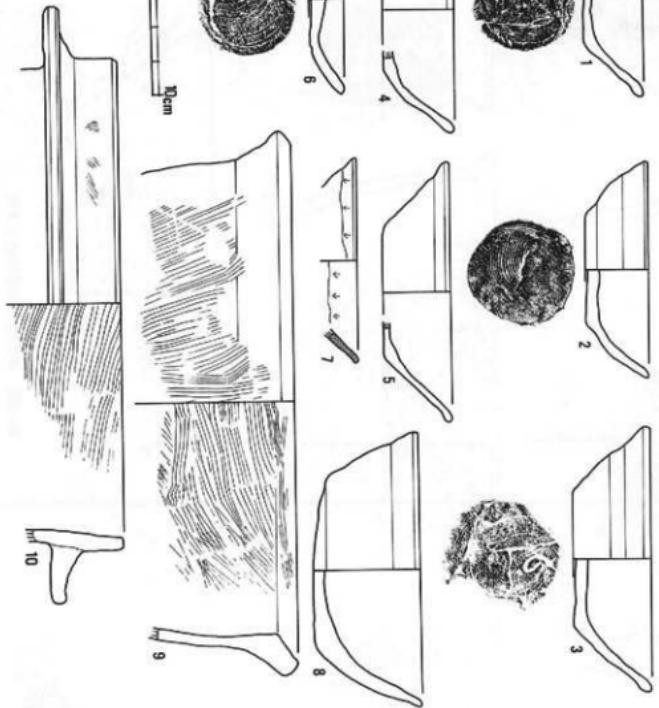
第87図 第17号住居跡出土遺物



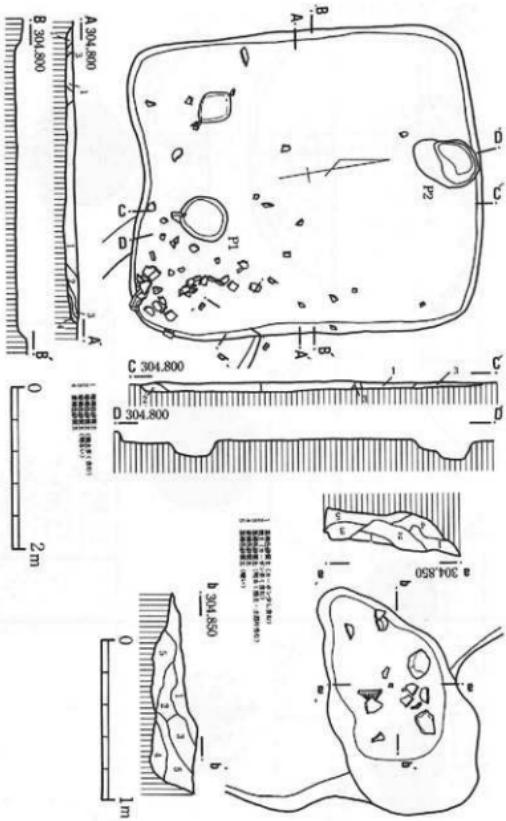
第88図 第19号住居跡・同住居跡カマド



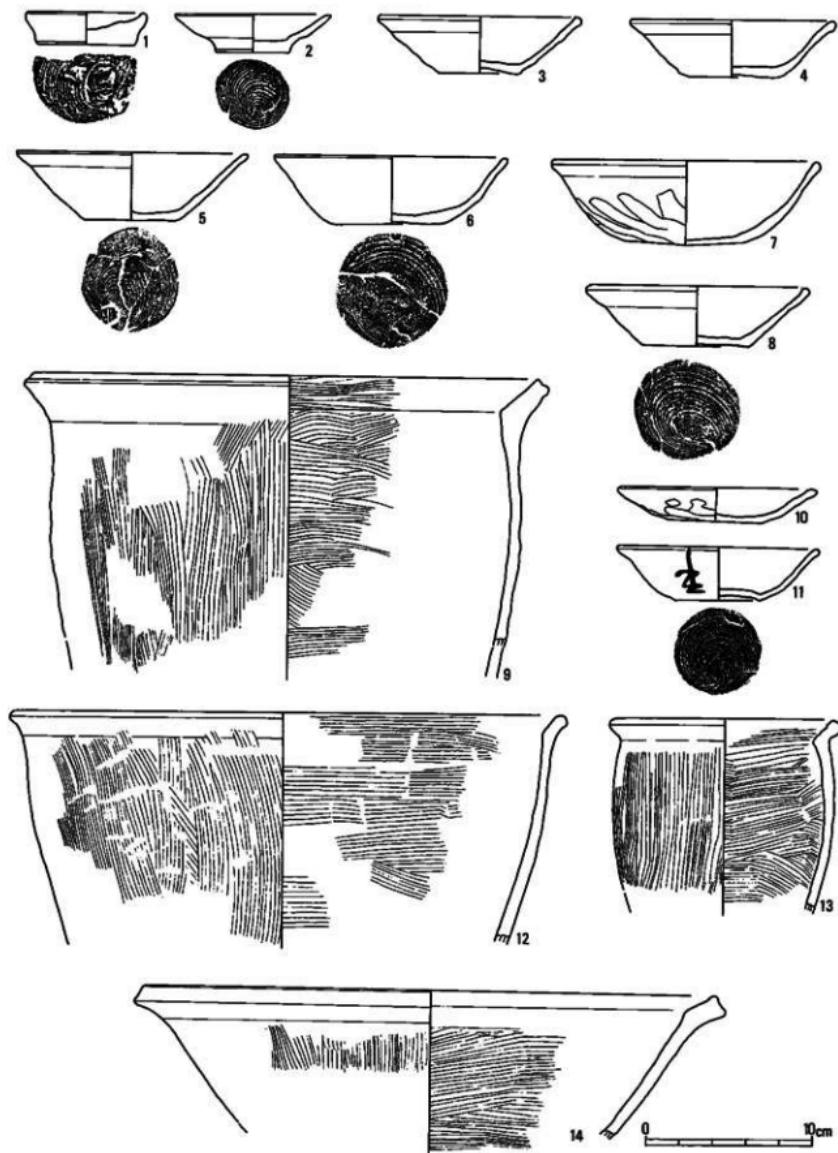
第89図 第19号住居跡出土土器



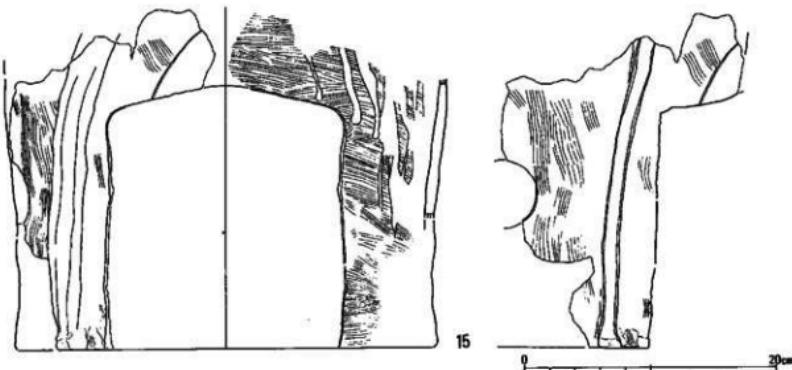
第91図 第23号住居跡・同住居跡カマド



第90図 第23号住居跡・同住居跡カマド



第92図 平安時代造構外出土土器 (1)



第93図 平安時代遺構外出土土器 (2)

2) 遺構出土土器 (第92~93図)

1は土師質の皿で口径7.3cm、器高1.9cm、底径5.5cmで内外面ロクロによるナデが施され、内面には稜が見られ、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は暗褐色を呈する。2も土師質の皿で、口径9.4cm、器高2.3cm、底径4.4cm。底部には、回転糸切り痕が見られる。1・2は12世紀代の土師質土器である。3~8・11は、土師器坏で3は口径11.8cm、器高3.5cm、底径5.0cm。口縁部が玉縁になり肥厚する。内外面ナデ調整が施される。色調は赤褐色を呈する。4は口径12.0cm、器高3.5cm、底径5.5cm。口唇部が玉縁となり肥厚する。内外面ナデ調整が施され、色調は明褐色を呈する。5は口径13.2cm、器高4.1cm、底径5.2cm。内外面ナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は、淡褐色を呈する。6は口径14.2cm、器高4.1cm、底径6.3cm。内外面ナデ調整、色調は明褐色を呈する。底部には、回転糸切り痕が見られる。7は口径15.6cm、器高5.1cm、底径7.1cm。外面上半及び内面にはナデ調整が施され、外面下半には、ヘラ削りが見られ、口縁部が玉縁になり肥厚する。色調は褐色を呈する。8は口径13.0cm、器高3.6cm、底径6.2cm。内外面にはナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕が見られる。色調は、暗褐色を呈する。9は甕の上半部で、口径32.0cmを測る。口縁部外面ナデ調整、外面器体部及び内面にはハケ調整が施される。口縁部は肥厚する。色調は、褐色を呈する。10は土師器の皿で、口径12.0cm、器高2.0cm、底径5.7cmを測る。外面上半及び内面ナデ調整、外面下半にはヘラ削りが施される。色調は明褐色を呈する。11は口径12.3cm、器高3.2cm、底径5.1cm。内外面ナデ調整が施される。器体部外面には「平」の墨書きが見られる。底部は凹み、回転糸切り痕が見られる。色調は、明褐色を呈する。12は甕の上半部で、口径33.2cm。口縁部外面ナデ調整、器体部及び内面ハケ調整が施される。胎土は粗く、色調は褐色を呈する。13は小型甕で、口径13.0cm。口縁部外面ナデ調整、器体部外面及び内面ハケ調整が施される。色調は褐色を呈する。14は鉢で口径35.8cm。口縁部内外面ナデ調整、器体部内外面ハケ調整が施され、口縁部は肥厚する。色調は外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。15は竈形土器の破片で、推定底径34.0cm、焚口18.4cmを測る。焚口の正面は長方形を呈し、底は釜孔の近くに見られ、前方に突出する。器体部側面部に円形の把持孔が見られる。外面縦ハケ、内面横ハケによる調整が施される。また、焚口は長方形を呈するが、焚口の上部に線刻が見られ、おそらく焚口を切り開く際に製作過程においてつけられた、焚口の成形ラインと思われる。色調は、赤褐色を呈する。

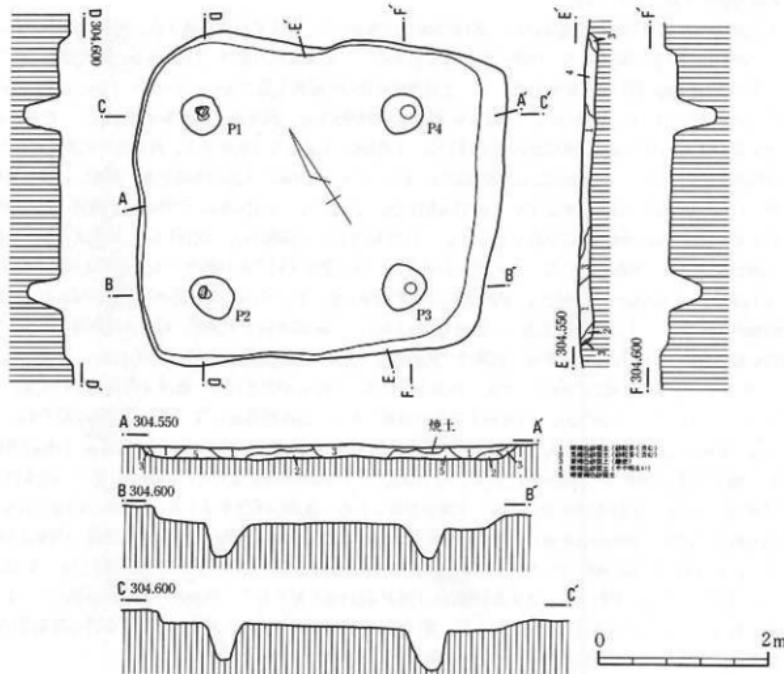
第6節 時期不明の遺構

1) 住居跡（第94図）

◎第26号住居跡

I・J-10・11グリッドに位置する。長辺4.5m、短辺4.0mの隅丸方形を呈する住居跡で、床面は全体に軟弱である。壁高は、20cm程でゆるやかに立ち上がる。住居内の施設については、炉やカマドの施設は確認できず、ピット4基が住居内に確認されたのみである。また、本住居跡覆土中からは、焼土やカーボンは全く見られなかった。ピット1は、住居北側のコーナー付近に見られ、直径0.5mの円形を呈し、深さ0.45mを測る。底面は丸底を呈する。ピット2は、長径0.55m、短辺0.45mの不整円形を呈し、深さ0.45mを測る。底面は丸底を呈する。ピット3は、長径0.55m、短辺0.50mのほぼ円形を呈する。底面は、丸底を呈し、深さ0.50mを測る。ピット4は、直径0.45mの円形を呈し、深さ0.40mの丸底を呈する。

◎出土遺物 本住居跡からの出土遺物は、全くみられず、住居跡の時代・時期などは全く不明である。

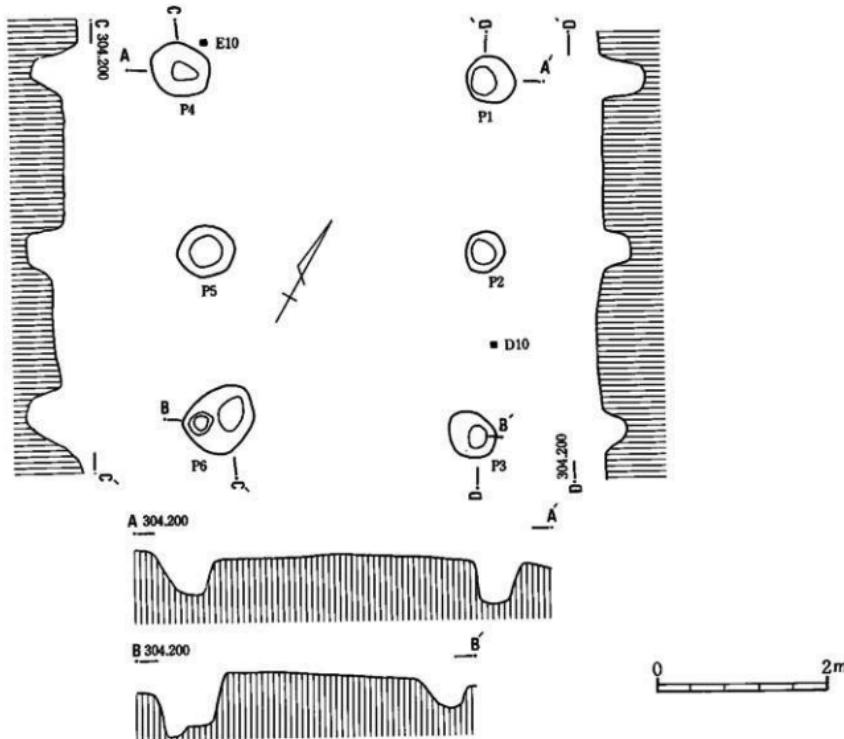


第94図 第26号住居跡

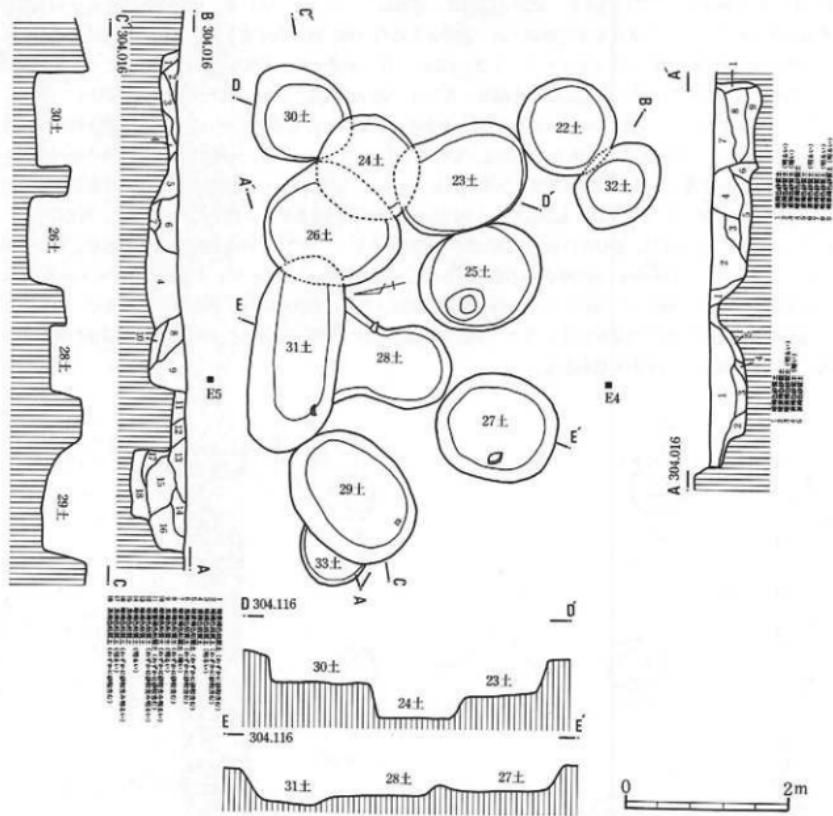
2) 挖立柱建物跡

○第1号掘立柱建物跡（第95図）

D・E-9・10グリッドに位置する。第19号住居跡と重複している。ピット6が、第19号住居跡カマド下部より検出されている。ピットは合計6基確認され、北西から南西方向に棟を有する1間×2間の建物跡と考えられる。全体的な規模は、桁行（ピット1—ピット3）4.2m、（ピット4—ピット6）4.2m、梁行（ピット1—ピット4）3.6m、（ピット3—ピット6）3.2mを測る。各ピット間の距離は、（ピット1—ピット2）2.0m、（ピット2—ピット3）2.2m、（ピット5—ピット6）2.1mを測る。各ピットの規模は、ピット1は、長径0.60m、短径0.55mの円形を呈し、深さ0.55mを測る。底面は、丸底を呈する。ピット2は、長径0.50m、短径0.45mの円形を呈し、深さ0.30mを測る。断面形態は箱型を呈する。ピット3は、長径0.60m、短径0.50mの楕円形を呈する。底面は、丸底を呈する。ピット4は、長径0.75m、短径0.65mの不正円形を呈し、深さ0.30mを測る。断面形態は、箱型を呈する。ピット5は、長径0.70m、短径0.60mの楕円形を呈し、深さ0.45mを測る。ピット内に、小ピットが見られ、底面は丸底を呈する。各ピット等からの出土遺物は全く検出されず、遺構の時期・性格は不明である。但し、ピット6が、第19号住居跡（11世紀前半）カマド下部より検出されていることから、第19号住居跡以前の建物跡であることは、間違いないものと思われる。



第95図 第1号掘立柱建物跡



第96図 第22~32号土坑

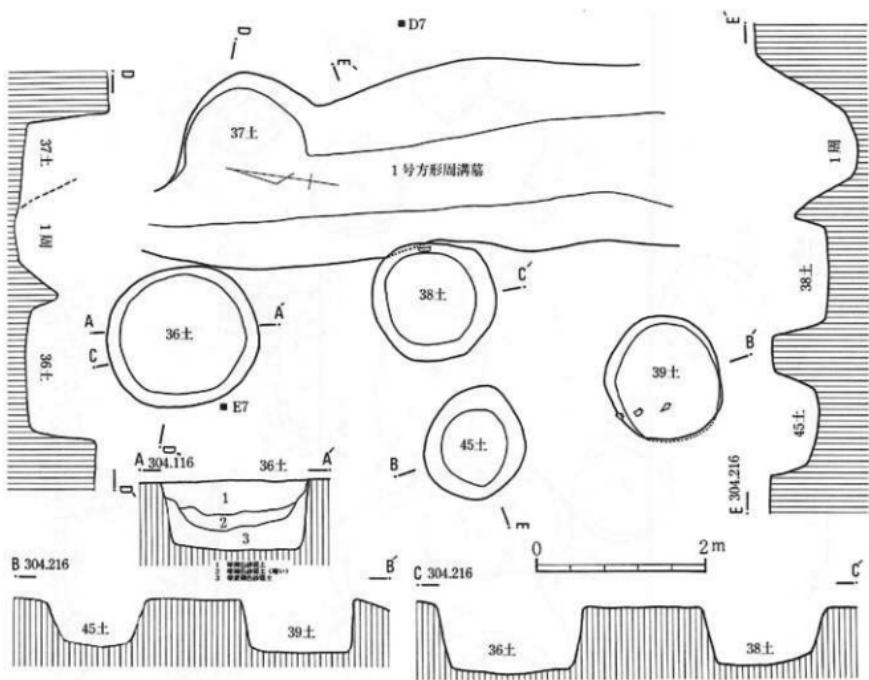
3) 土 坑 (第96図~第102図) (第1表 土坑一覧表)

土坑は、全部で114基確認されている。その内、縄文時代に位置づけられるもの3基、古墳時代に位置づけられるもの3基で、残り108基の土坑について出土遺物は見られず、土坑の時期・性格などは全く不明である。土坑の詳細は(第1表土坑一覧表)を参照とされたい。

4) 溝状造構

◎第1号溝 (第57図)

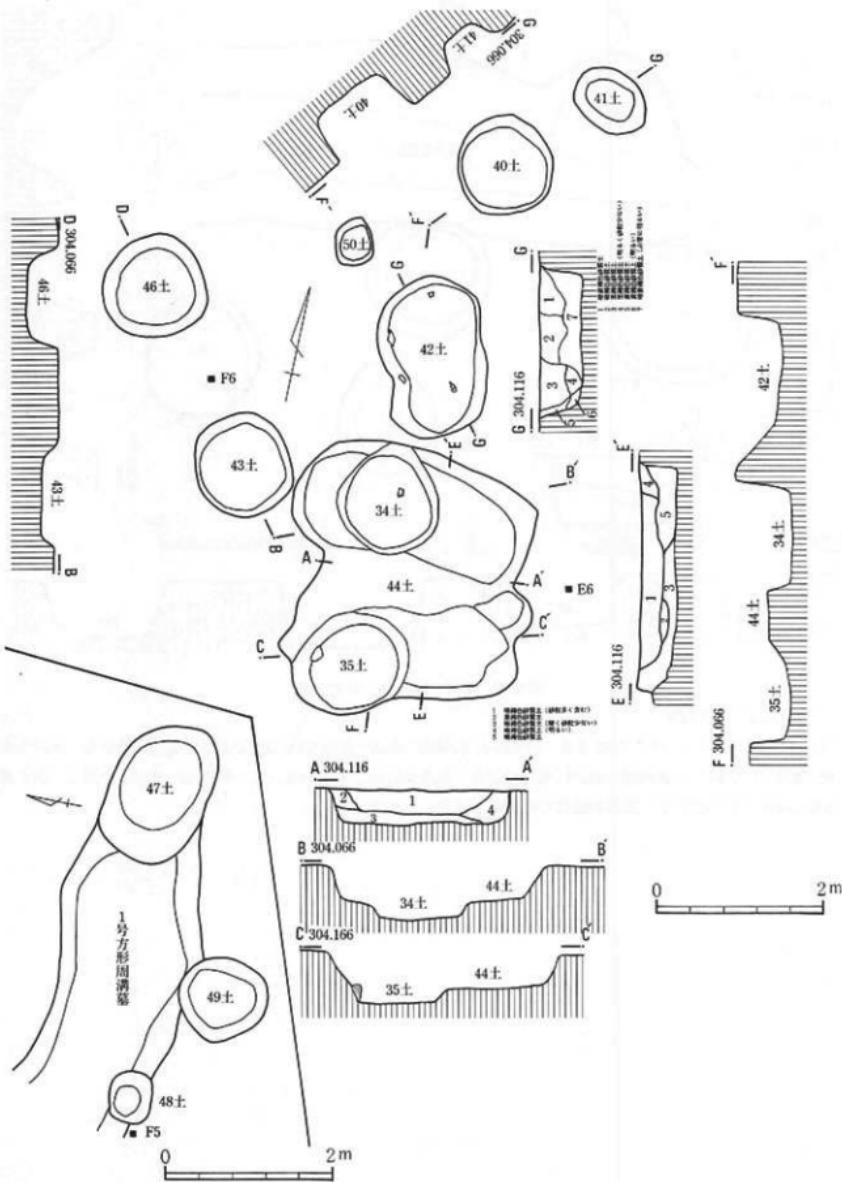
A・B-6グリッドに位置する。調査区南東~北西方向には直線に延びる。溝の北西側が第2号住居跡と重複しているため、全体の形状規模は不明である。現存長7.70m、幅0.4~0.6m、深さ0.25m~0.30mを測る。出土遺物などは検出されず、造構の時代や性格などは全く不明である。



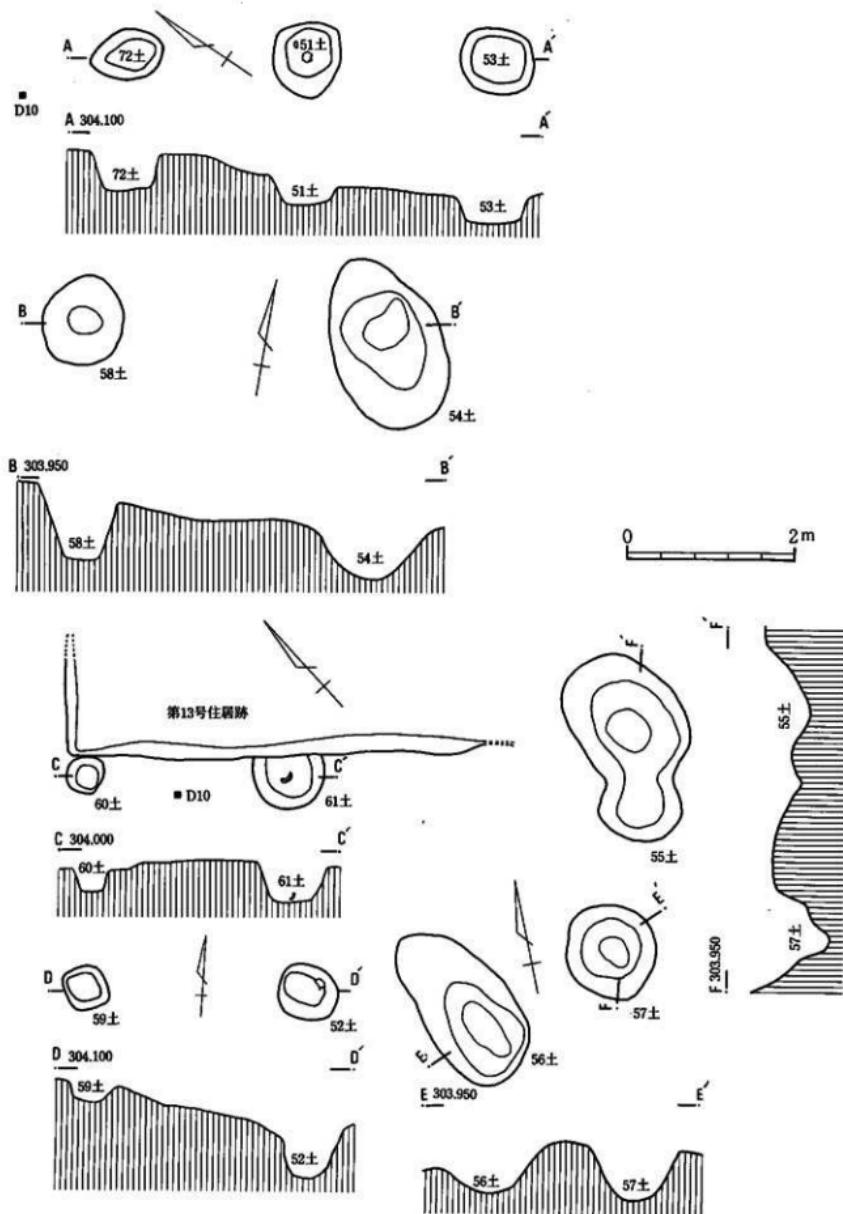
第97図 第36・38・39・45号土坑

◎第3号溝（第100図）

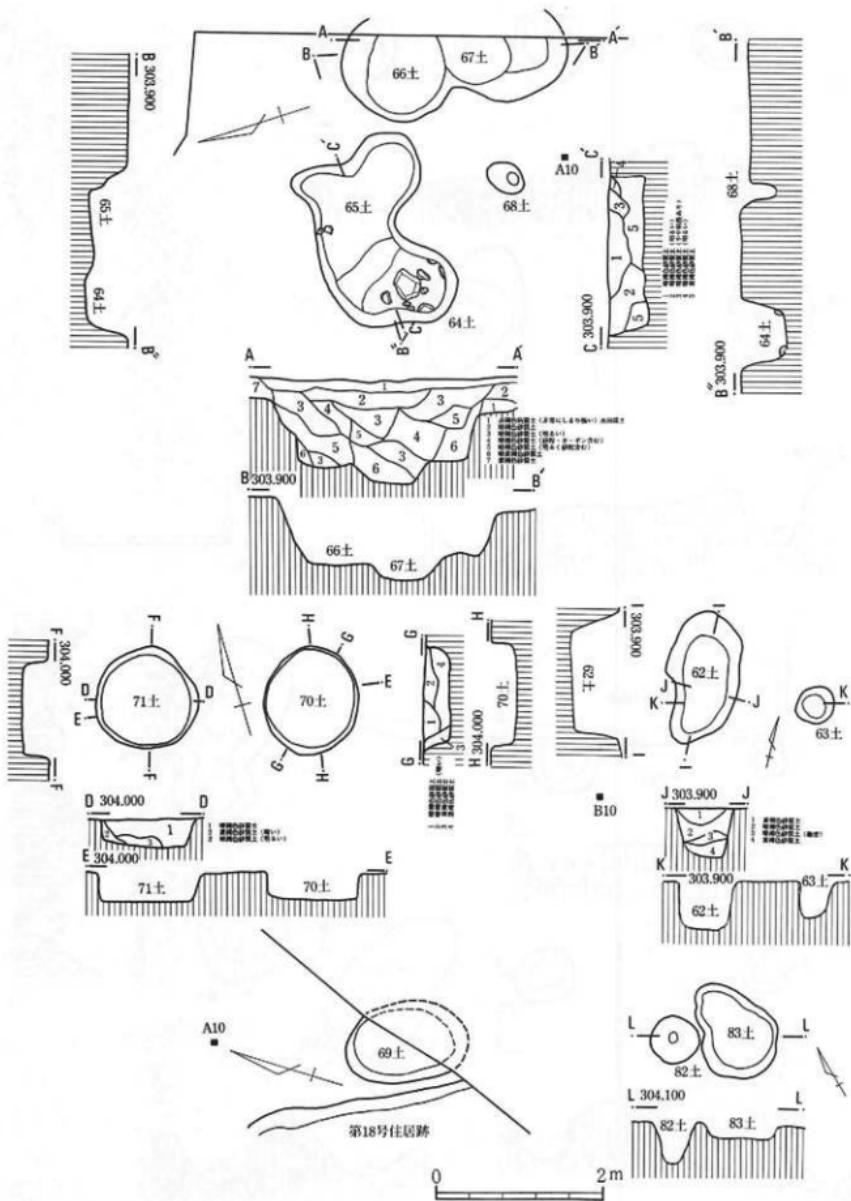
K・M-12・13グリッドに位置する。調査区の北西隅に南東～北西方向にほぼ直行する形に延びる。溝の南東側が第24号住居跡に、北西側は調査区外に延びる。現存長8.0m、幅0.5～0.7m、深さ0.15～0.25mを測る。出土遺物などは全く検出されず、造構の時代や性格などは全く不明である。



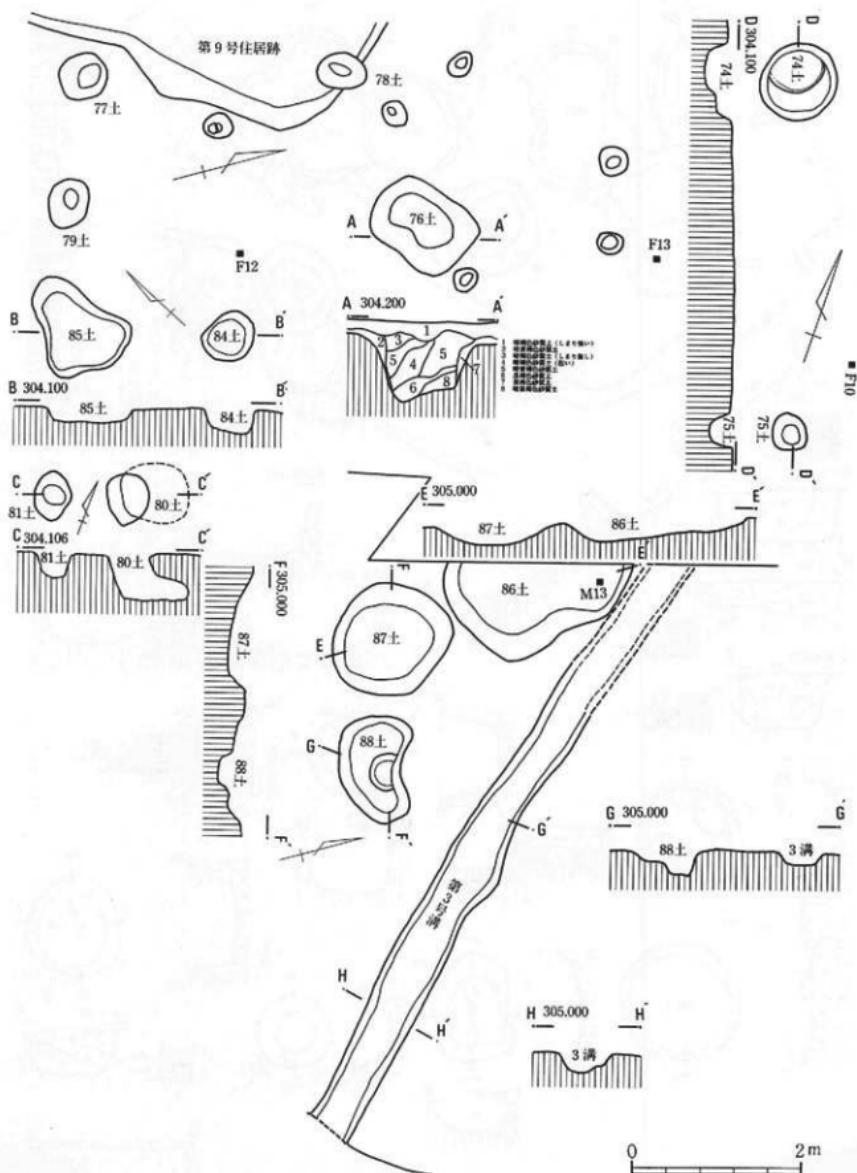
第98図 第40~44・46~50号土坑



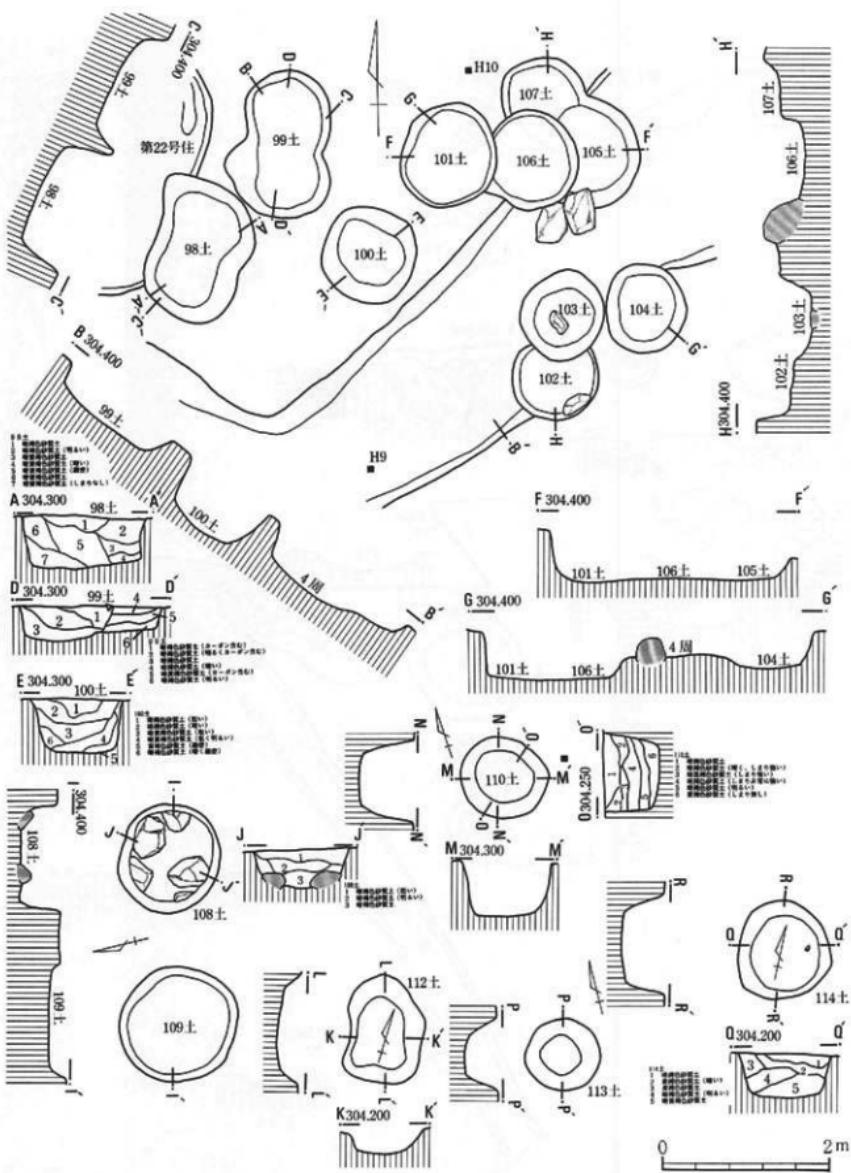
第99図 第51~61号土坑



第100図 第62~71・82・83号土坑



第101図 第74~81・84~88号土坑・第3号溝



第102図 第98~110・112~114号土坑

第1表 土坑一覧表

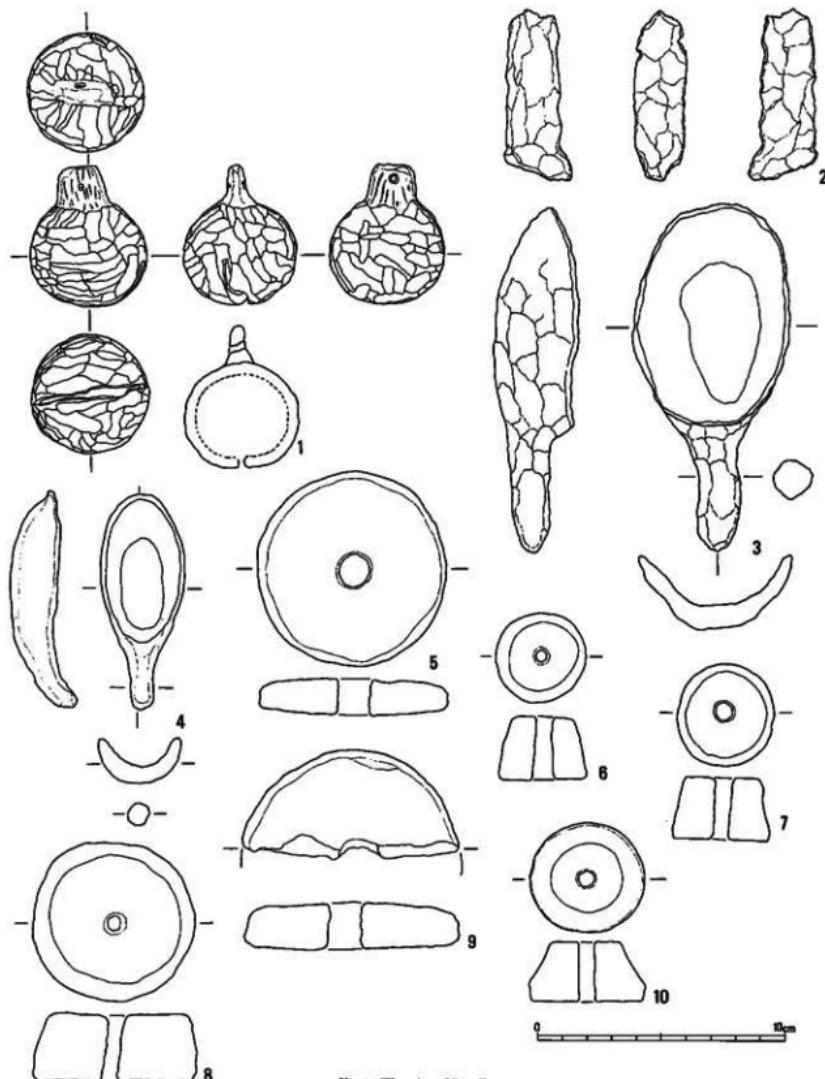
(単位 m)

遺構名	位置	平面形	長径	短径	深さ	断面形	備考
1号土坑	C-4・5	円 形	1.30	1.15	0.35	錐 形	
2号土坑	B-6	円 形	0.95	0.85	0.55	錐 形	重複古墳
3号土坑	B-5・6	円 形	1.05	0.90	1.10	皿 形	
4号土坑	B-5	円 形	0.50	0.45	0.35	錐鉢形	
5号土坑	A・B-5	楕円形	0.72	0.55	0.35	錐 形	
6号土坑	A-5	楕円形	0.65	0.50	0.30	錐 形	
7号土坑	B-6	楕円形	0.65	0.40	0.35	不定形	
8号土坑	B-7	正円形	0.95	—	0.50	錐鉢形	
9号土坑	A・B-6	楕円形	0.65	0.50	0.25	錐 形	
10号土坑	B-6	椭円形	1.05	0.85	0.20	皿 形	
11号土坑	A-6	正円形	0.35	—	0.30	円筒形	
12号土坑	A-6	正円形	0.45	—	0.25	円筒形	
13号土坑	A-6	椭円形	0.40	0.30	0.30	円筒形	
14号土坑	C-4	椭円形	1.88	1.20	0.38	錐 形	古墳前
15号土坑	C-4	円 形	1.40	1.20	0.30	浅鉢形	
16号土坑	C-4	不正円形	1.32	1.00	0.40	錐 形	古墳前
17号土坑	C・D-4	円 形	1.40	1.35	0.58	錐 形	重複
18号土坑	A-6	円 形	0.40	0.35	0.20	円筒形	
19号土坑	F-11	椭円形	0.40	0.30	0.20	円筒形	
20号土坑	F-12	椭円形	0.35	0.25	0.40	円筒形	
21号土坑	C・D-4	円 形	1.40	1.30	0.30	錐 形	重複
22号土坑	D-4	正円形	1.20	—	0.10	皿 形	重複
23号土坑	D-4	椭円形	1.70	1.25	0.30	皿 形	重複
24号土坑	D-4	円 形	1.30	—	0.40	錐鉢形	重複
25号土坑	C・D-4	椭円形	1.60	1.20	0.15	皿 形	小ピット
26号土坑	D-4	円 形	1.70	—	0.50	錐 形	重複
27号土坑	D・E-4	椭円形	1.50	1.30	0.35	錐 形	重複
28号土坑	D・E-4	不定形	1.40	1.05	0.40	皿 形	重複
29号土坑	E-4	椭円形	1.75	1.25	0.55	錐 形	重複
30号土坑	D-4	椭円形	1.35	1.20	0.30	錐 形	重複
31号土坑	D・E-4	椭円形	2.50	1.10	0.40	浅鉢形	重複
32号土坑	D・3・4	椭円形	1.20	0.90	0.45	皿 形	重複
33号土坑	E-4	椭円形	0.90	—	0.24	錐 形	重複
34号土坑	E・5・6	円 形	1.35	1.25	0.65	錐 形	重複
35号土坑	E-5	円 形	1.45	1.20	0.45	錐 形	重複
36号土坑	D-6・7	円 形	1.80	1.60	0.82	錐 形	綱 文
37号土坑	D-7	椭円形	1.70	—	1.00	円筒形	重複
38号土坑	D-6	正円形	1.50	—	0.65	錐 形	
39号土坑	D-5・6	椭円形	1.50	1.35	0.60	錐 形	
40号土坑	E-6	椭円形	1.25	1.15	0.60	錐 形	綱 文
41号土坑	E-6・7	椭円形	0.95	0.70	0.35	錐鉢形	
42号土坑	E-6	椭円形	1.95	1.25	0.50	錐鉢形	綱 文
43号土坑	E-5	正円形	1.25	—	0.20	浅鉢形	
44号土坑	E-5・6	椭円長方形	3.30	2.20	0.35	錐 形	重複
45号土坑	D-6	椭円形	1.35	1.15	0.50	錐鉢形	
46号土坑	F-6	円 形	1.25	1.20	0.35	錐 形	
47号土坑	E-5	椭円形	1.75	1.18	0.45	浅鉢形	重複
48号土坑	E-5	椭円形	0.64	0.50	0.15	皿 形	重複
49号土坑	E-5	椭円形	1.08	1.02	0.30	錐 形	
50号土坑	E-6	不正円形	0.55	0.45	0.20	円筒形	
51号土坑	C-9	円 形	0.90	0.80	0.35	錐鉢形	
52号土坑	C-9	円 形	0.75	0.65	0.60	円筒形	丸底
53号土坑	C-9	円 形	0.95	0.75	0.30	錐 形	重複
54号土坑	B-C-9	椭円形	2.10	1.30	0.70	錐鉢形	丸底
55号土坑	B-9	瓢箪形	2.30	1.25	0.50	錐鉢形	丸底
56号土坑	B-8・9	椭円形	2.10	1.20	0.60	錐鉢形	丸底
57号土坑	B-9	円 形	1.20	1.10	0.65	錐鉢形	丸底
58号土坑	C-8	円 形	1.10	1.00	0.95	錐鉢形	
59号土坑	C-8	正円形	0.50	—	0.25	皿 形	
60号土坑	D-10	円 形	0.48	0.44	0.28	錐鉢形	
61号土坑	C-9	椭円形	0.90	0.60	0.45	錐鉢形	
62号土坑	A・B-10	椭円形	1.60	0.70	0.60	錐 形	
63号土坑	A-10	円 形	0.50	0.45	0.45	円筒形	
64号土坑	A'・A-10	椭円形	1.50	0.95	0.50	錐 形	重複
65号土坑	A'・A-10	不定形	1.60	0.85	0.40	錐 形	重複
66号土坑	A' - 10	正円形	1.35	—	0.80	錐鉢形	重複
67号土坑	A' - 10	椭円形	1.60	1.30	1.00	錐鉢形	重複
68号土坑	A-10	椭円形	0.45	0.35	0.40	円筒形	
69号土坑	A' - 9	椭円形	1.50	0.95	0.38	錐鉢形	
70号土坑	F-8	円 形	1.30	1.15	0.30	錐 形	
71号土坑	F-8	正円形	1.25	—	0.25	錐 形	
72号土坑	C-9	椭円形	0.88	0.62	0.48	錐 形	
73号土坑	F-12	椭円形	0.35	0.25	0.20	円筒形	
74号土坑	F-10	正円形	0.90	—	0.25	錐 形	丸底
75号土坑	F-9	円 形	0.45	0.40	0.25	錐鉢形	
76号土坑	F-12	椭円形	1.20	0.90	0.77	錐鉢形	
77号土坑	F-11	円 形	0.60	0.50	0.15	錐 形	
78号土坑	F-12	椭円形	0.60	0.40	0.45	錐鉢形	
79号土坑	F-11	椭円形	0.60	0.50	0.45	錐鉢形	
80号土坑	F-9・10	椭円形	0.60	0.50	0.50	—	病状
81号土坑	F-9	椭円形	0.60	0.45	0.30	錐鉢形	
82号土坑	E-10	円 形	0.60	0.55	0.50	錐鉢形	
83号土坑	E-10	椭円形	1.25	0.95	0.15	錐 形	
84号土坑	E-9	椭円形	0.65	0.55	0.30	錐 形	
85号土坑	E-9・10	不定形	1.30	0.75	0.15	錐 形	
86号土坑	I・K-2・II	瓢箪形	2.20	—	0.30	錐 形	
87号土坑	L-12	円 形	1.45	1.25	0.25	錐 形	
88号土坑	L-12	椭円形	1.25	0.75	0.15	錐 形	小ピット
89号土坑	F-12	円 形	0.35	0.30	0.30	錐鉢形	
90号土坑	J-9	椭円形	1.13	0.95	0.20	錐鉢形	古墳前
91号土坑	F-12	円 形	0.35	0.25	0.20	錐 形	
92号土坑	I-8	円 形	0.85	0.75	0.10	錐 形	
93号土坑	I-7・8	円 形	0.95	0.85	0.15	錐 形	
94号土坑	I-7・5	椭円形	1.60	1.10	0.65	錐 形	
95号土坑	I-7	正円形	1.15	—	0.70	錐 形	
96号土坑	H-8	椭円形	0.85	0.70	0.14	錐 形	
97号土坑	H-7・8	正円形	1.30	—	0.30	錐 形	
98号土坑	H-9	瓢箪形	1.65	1.10	0.68	錐 形	
99号土坑	H-9	瓢箪形	1.75	0.95	0.35	錐 形	
100号土坑	H-9	正円形	1.10	—	0.70	錐 形	丸底
101号土坑	G・H-10	円 形	1.25	1.20	0.68	錐 形	重複
102号土坑	G-9	正円形	1.05	—	0.48	錐 形	重複
103号土坑	G-9	円 形	1.10	1.00	0.40	錐鉢形	重複
104号土坑	G-9	円 形	1.10	0.95	0.45	錐鉢形	
105号土坑	H-9	正円形	1.30	—	0.55	錐 形	重複
106号土坑	G-9	正円形	1.20	—	0.25	錐冰形	重複
107号土坑	G-9・10	正円形	1.00	—	0.20	錐 形	重複
108号土坑	G・H-12	円 形	1.30	1.20	0.50	錐 形	
109号土坑	H-12	正円形	1.40	—	0.20	錐 形	
110号土坑	H-9・10・11	円 形	1.05	1.00	0.65	円筒形	
111号土坑	I-8	椭円形	1.00	—	0.25	錐 形	重複
112号土坑	H-11	不定形	1.30	0.88	0.30	浅鉢形	丸底
113号土坑	G-7	正円形	0.90	—	0.40	錐鉢形	丸底
114号土坑	G-8・9	円 形	0.90	0.85	0.50	錐 形	

第7節 その他の出土遺物

1) 土 製 品 (第103図)

本遺跡からは各種の土製品が出土している。各々について概観することにする。1・土鉢：第14号住居跡出土。



第103図 土 製 品



第104図 石

縦5.7cm、横4.7cm、重さ47.9gを測る。全体にミガキによる器面調整が施される。土鉢内部には、小石が見られる。色調は暗褐色を呈する。2・棒状土製品：A-9グリッド出土。長さ6.9cm、幅2.8cm、重さ30.2gを測る。器面調整は、指頭による圧痕が見られる。色調は暗褐色を呈する。3・スプーン状土製品：第14号住居跡出土。長さ13.9cm、最大幅6.4cm、重さ94.7gを測る。指頭による圧痕が明瞭に見られ、全体には粗雑な作りである。色調は、明黄褐色を呈する。4・スプーン状土製品：第7号住居跡出土。長さ8.7cm、最大幅3.4cm、重さ23.3gを測る。3と同様、スプーン状土製品であるが、器面調整はミガキが施され、丁寧な作りである。色調は、明褐色を呈する。5・紡錘車：E-11グリッド出土。長径7.8cm、短径7.7cm、厚さ1.4cm、重さ118.5gを測る。平面形はほぼ正円を呈し、断面は円盤状を呈する。胎土は粗く、色調は、明褐色を呈する。6・紡錘車：F-11グリッド出土。直径3.7cm、厚さ2.5cm、重さ35.6gを測る。断面形は台形を呈する。胎土はやや粗く、色調は暗褐色を呈する。7・紡錘車：第2号住居跡出土。長径4.1cm、短径3.9cm、厚さ2.5cm、重さ45.4gを測る。断面形は台形を呈し、色調は、褐色を呈する。8・紡錘車：F-12グリッド出土。長径6.6cm、短径6.4cm、厚さ2.7cm、重さ137.6gを測り、断面形は台形を呈し、色調は淡褐色を呈する。9・紡錘車：第1号方形周溝墓出土。現存径8.9cm、厚さ1.9cm、

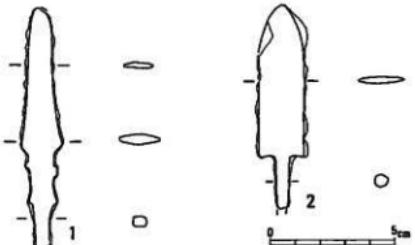
重さ73.9gを測る。色調は褐色を呈する。10・紡錘車：第9号住居跡出土。長径4.6cm、短径4.5cm、厚さ2.4cm、重さ47.9gを測る。色調は褐色を呈し、丁寧にミガキが施される。

2) 砥 石 (第104図)

本遺跡からは住居跡及び造構外から砥石が出土している。図示した12点について概観することにする。1：第2号住居跡出土。縦9.7cm、横4.7cm、厚さ3.9cm、重さ392.8gを測り、花崗岩製で4面使用が認められる。2:D-2グリッド出土。縦5.3cm、横2.3cm、厚さ2.1cm、重さ41.9gを測る。安山岩製で4面使用が認められる。3：第6号住居跡出土。縦5.8cm、横2.5cm、厚さ2.4cm、重さ46.2gを測る。安山岩製で4面使用。4：第7号住居跡出土。縦5.4cm、横4.8cm、厚さ2.9cm、重さ95.8gを測る。花崗岩製で4面使用。5：第1号方形周溝墓出土。縦9.4cm、横4.6cm、厚さ3.3cm、重さ233.1gを測る。凝灰岩製で4面使用。6：A-9グリッド出土。縦5.7cm、横3.3cm、厚さ0.8cm、重さ26.0gを測る。凝灰岩製で2面使用が認められる。7：A-8グリッド出土。縦2.7cm、横3.2cm、厚さ0.9cm、重さ97.7gを測る。花崗岩製で1面のみ使用。8：B-3グリッド出土。縦8.8cm、横4.2cm、厚さ4.3cm、重さ120.2gを測る。安山岩製で4面使用。9：C-3グリッド出土。縦7.6cm、横3.8cm、厚さ3.0cm、重さ98.6gを測る。安山岩製で4面使用。10：D-3グリッド出土。縦8.4cm、横2.7cm、厚さ2.6cm、重さ94.1gを測る。安山岩製で4面使用が見られる。11：D-8グリッド出土。縦7.1cm、横4.4cm、厚さ1.9cm、重さ64.7gを測る。凝灰岩製で2面使用が見られる。12：D-2グリッド出土。縦8.9cm、横4.5cm、厚さ2.6cm、重さ113.1gを測る。安山岩製で3面使用が見られる。

3) 鉄 製 品 (第105図)

本遺跡からは住居跡及び造構外から鉄製品が出土している。図示したものは2点であるが、細片などは掲載していない。1・刀子：第4号住居跡出土。現存長9.6cm、最大幅1.6cm、最大厚0.35cmを測る。茎部の一部と、刃部の大半を欠いている。刃は楔形を呈し、基部で最も幅が広くなる。2・鉄鎌：第1号方形周溝墓出土。現存長7.1cm、最大幅1.8cm、最大厚0.5cmを測る。茎部を欠損する以外は、ほぼ完形に近い。鎌身は、槍先状を呈し、鎌身は6.0cmを測る。茎部は、直径0.5cmを測り、丸型を呈する。



第105図 鉄 製 品

第Ⅳ章 まとめ (第106~108図)

本遺跡では、今回の調査で弥生時代後期1軒、古墳時代前期1軒、古墳時代後期12軒、奈良時代8軒、平安時代5軒、時期不明1軒の合計28軒の住居跡や、古墳時代前期の方形周溝墓4基、土坑114基、溝状造構3条、掘立柱建物址1棟などが検出され、出土遺物も質量ともに多大な成果が得られた。本地域は、「千塚」の地名が示すとおり、かつて相当数の古墳が築造された地域であるとされているが、これまで、本地域あまり発掘調査が実施されたことがなく、不明な点が多くあった。しかし、今回の桜田遺跡の調査によって、古墳時代後期の住居跡が本地域の古墳築造と軌を一にするものであり、今日では消滅してしまったものの数多くの古墳があったとされる裏付けになったことは間違いない。ここでは、住居跡の変遷や調査や整理を通して気づいたことについて若干触れてみたい。

第1節 住居跡の変遷について

確認された住居跡のうち1軒については、遺物が全く出土せず、時期不明の住居跡については変遷の対象から外すことにして、対象となる住居跡27軒について変遷を行ってみたい。まず、時代別に行ってみると次のようになる。弥生時代後期1軒、古墳時代前期1軒、古墳時代後期12軒、奈良時代8軒、平安時代5軒であり、さらに、時期別に細分すると次のようになる。

I期	弥生時代後期	1軒 (25号住)
II期	古墳時代前期	1軒 (22号住)
III期	古墳時代後期1	5軒 (1・5・9・13・24号住)
IV期	古墳時代後期2	5軒 (6・7・18・20・21号住)
V期	古墳時代後期3	4軒 (2・3・8・14号住)
VI期	奈良時代1	1軒 (2号住)
VII期	奈良時代2	5軒 (10・11・12・27・28号住)
VIII期	奈良時代3	1軒 (4号住)
IX期	平安時代	5軒 (15・16・17・19・23号住)

各期の編年は次のとおりである。

[I期] 大型の壺型土器が出土している。壺型土器は、幅広の複合口縁に棒状浮文が4本1単位で4方向に施し、肩部には網文を回転し、ボタン状貼付文が2点1単位~4点1単位が2カ所及び4カ所に見られる。胴部は球形もしくは無花果形を呈する。いずれの壺型土器も東海東部地域のものである。弥生時代後期後半に位置づけられる。

[II期] 出土遺物は非常に少ないが、S字状口縁台付壺の口縁部の破片が見られる。S字状口縁台付壺は口縁端部が鋭くとがり、口縁部各段は明瞭になる。口縁部外面には刺突文がみられる。胴部が不明ではあるが、赤塚分類のA類新段階の範疇に収まる。3世紀中葉に位置づけられる。

[III期] 出土遺物は壺・甕・瓶・椀・鉢などが出土している。壺は、いわゆる須恵器壺蓋を模倣したもので、口縁部が直立したもの、口縁部が外傾あるいは外反するもの、口縁部が内湾するものなどに分類される。いずれの壺も外面下半はヘラ削り、上面半及び内面にはナデ調整が施される。また、内外面赤色塗彩、外面のみ赤色塗彩、外面赤色塗彩で内面が黒色処理が施されるものが多く見られる。甕は、球胴甕・長胴甕・小型甕が見られる。珠胴甕は、口縁部以外は外面縦ハケ、内面は横ハケに調整が施される。長胴甕は、外面ヘラ削り、内面横ハケによる調整が施される。小型甕は、口縁部ナデ調整、胴部内外面にハケ調整が施される。甕は、大型の甕で口縁部ナデ調整が施され、器体部内外面にハケ調整が施される。把手が対で見られる。椀や鉢は壺と同様に、体部

と口縁部の境目に稜が見られる。6世紀後半に位置づけられる。

〔IV期〕出土遺物は坏・高坏・甕・瓶・鉢・碗が見られる。坏は〔III期〕と同様に口縁部との境目に稜が見られるが、器高と口縁部との比率が口縁部の方が高くなり、口唇部の湾曲が目立つようになる。外面に赤色塗彩されるものと、内部に黒色処理されるものがわずかではあるが見られる。高坏は、坏部が鉢状に口縁部にかけて外反しながら開く。坏部下半と脚部上半部にヘラ削りが施される他は、ナデによる調整が見られる。第20号住居跡出土の高坏には坏部内面に黒色処理が施されている。甕は長胴甕が目立ち、外面はヘラ削りによる器面調整が行われている。胴部が球窓を呈するものには口縁内面端部にくびれをもつ、いわゆる「駿東型」の甕も見られる。瓶は、鉢形を呈するものと小型甕形を呈するものがあり、それぞれ底部には小単孔と多孔とに見られる。鉢と碗は、内外面にナデ調整を施すもの、外面にヘラ削りを施すものや、ハケ調整を施すものが見られる。6世紀末～7世紀初頭に位置づけられる。

〔V期〕出土遺物は坏・甕・高坏・瓶・小型甕・鉢が見られる。坏及び高坏には鬼高特有の稜が若干見られる。坏及び高坏は外面下半及び高坏脚部にヘラ削りによる器面調整が施される。甕については、ほとんどのものが、長胴型を呈し、頸部のくびれはあまりみられない。VI期にみられる「駿東型」の甕が該期にもみられるが、口縁内面端部のくびれが明瞭である。7世紀後半に位置づけられると思われる。

※なお、該期の2号住・3号住は切り合い関係にある。2号住が3号住を切っているため、該期の2号住の遺物と考えられていたものは3号住の所産とも考えられる。

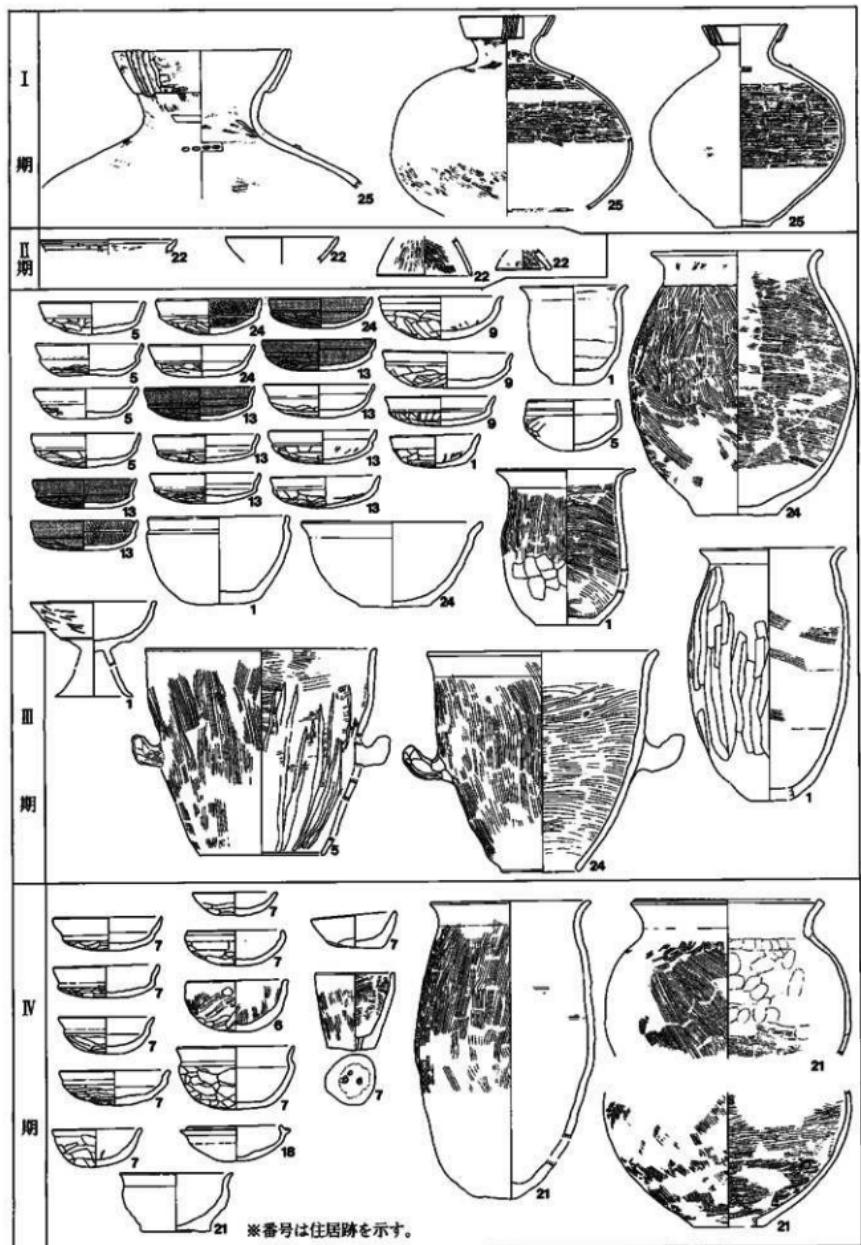
〔VI期〕2号住一括資料遺物で、坏・小型甕である。坏はいわゆる盤状を呈する坏で、身部の深い坏も見られる。両者とも底部端に丸みをもつ大きな平底を呈する。該期に見られる坏は、ミガキによる器面調整が外面全体に丁寧に施される。また、みこみ部には放射状の暗文がみられる。8世紀中頃に位置づけられる。

〔VII期〕該期に属すると思われる住居跡は5軒で、坏・須恵器坏蓋・須恵器坏・甕である。坏は、VI期同様ミガキが丁寧に施され、内外面全体に施される。VI期に比べ底部が小さくなり、身部が深くなる。8世紀末に位置づけられる。

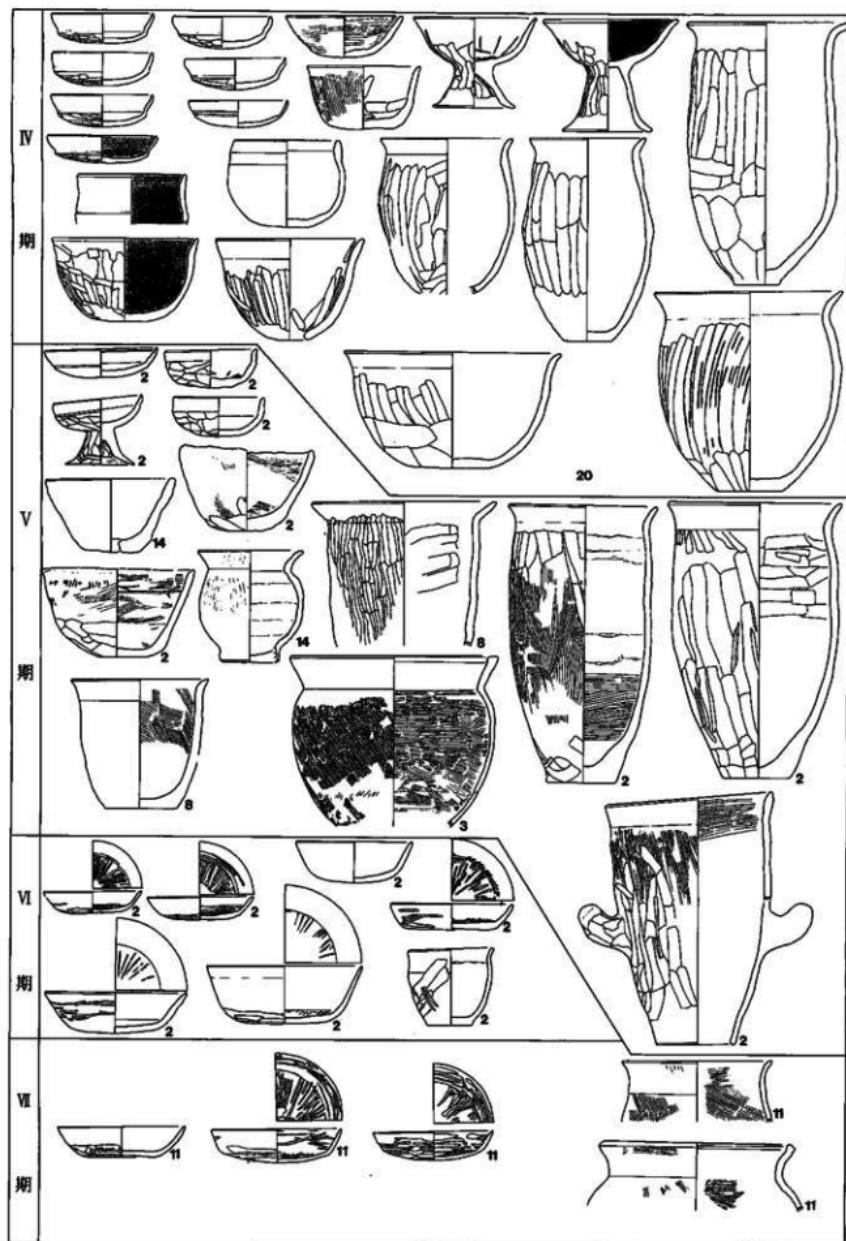
〔VIII期〕該期に属する住居跡は第4号住居跡1軒のみで坏・甕など見られるが、資料に乏しい。坏は、底径が縮小し箱型を呈するものが見られる。箱型の坏は内外面にミガキが緻密に施され、みこみ部に放射状の暗文が施される。9世紀初頭に位置づけられる。

〔IX期〕該期の住居跡は5軒確認されている。坏・甕・鉢・羽釜などが見られる。坏は、いわゆる「甲斐型坏」といわれるものであるが、この時期の土師器は、暗文やヘラ削りなどの器面調整は見られない。底部には回転糸切り後のヘラ削りは行われておらず、いわゆる「切りっぱなし」の状態である。口縁部も、玉縁形から丸形へと変化している。甕は、口縁部が肥厚するのみではなく、胴部についても口縁に比例して厚くなる。胴部から口縁にかけて、頸部のくびれは直線的になる。これについては、羽釜・鉢についても共通している。11世紀前半に位置づけられる。

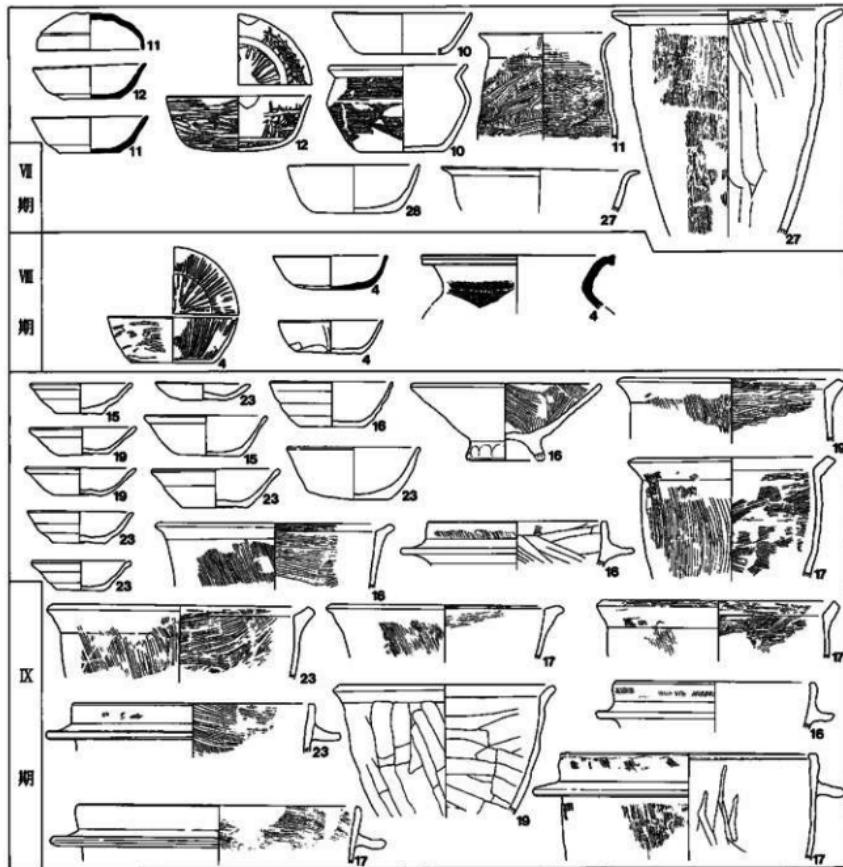
このように、本遺跡はI期～VIII期にかけて連續ではないものの、各期にわたり集落が形成されていたことが解る。本地域においては、住宅などの密集地であることから分布調査や発掘調査がなかなか困難な地域であることは否めない。しかし、今回の櫻田遺跡の発掘調査によって、本地域に数多くあったとされる古墳と集落のかかわりが、今まで不明であったものの、櫻田遺跡の発掘調査によって、後期古墳の存在の裏付けや、古墳を築いていた集落が少なからずとも、明らかになったことは大きな成果と言える。



第106図



第107圖



第108図

参考文献

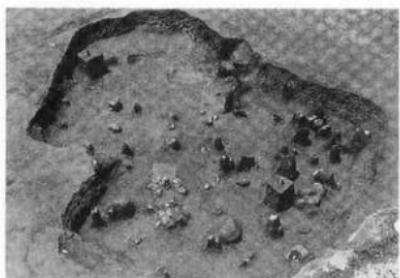
- ニューサイエンス社 1992 月刊『考古学ジャーナル』「特集・一鬼高式土器の諸問題ー」
- 東国土器研究会第4回研究集会 1994 「東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向」資料集
- 甲府市史編さん委員会 1989 『甲府市史史料編第1巻原始・古代・中世』
- 山梨県教育委員会ほか 1985 『手古松遺跡』ほか（山梨県埋蔵文化財センター調査報告第9集）
- 山梨県教育委員会ほか 1987 『二之宮遺跡』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告第23集）
- 山梨県教育委員会ほか 1987 『姥塚・姥塚無名塚』（） 第24集）
- 石和町教育委員会ほか 1990 『松本塚ノ越遺跡』（石和町埋蔵文化財調査報告第1集）
- 一宮町教育委員会ほか 1990 『大原遺跡発掘調査概報』
- 山梨県教育委員会ほか 1994 『新居道下遺跡（概報）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告第89集）

図 版





片山より桜田方面を望む



第2・3号住居跡遺物出土状況



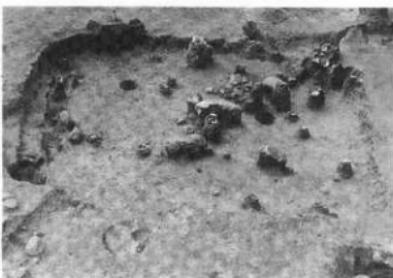
第2号住居跡完掘状況



第5号住居跡疊混入状況



同左完掘状況



第7号住居跡遺物出土状況



遺跡調査風景



第14号住居跡土鉢・土製スプーン出土状況



第20号住居跡遺物出土状況



同左カマド周辺部遺物出土状況



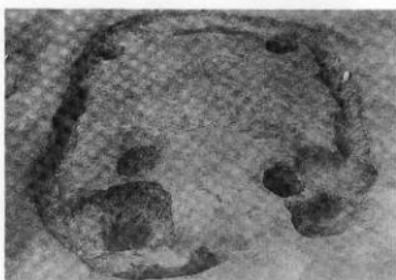
第20号住居跡完掘状況



遺跡調査風景



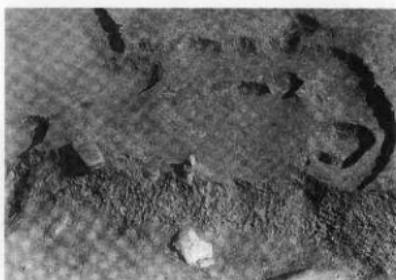
第21号住居跡完掘状況



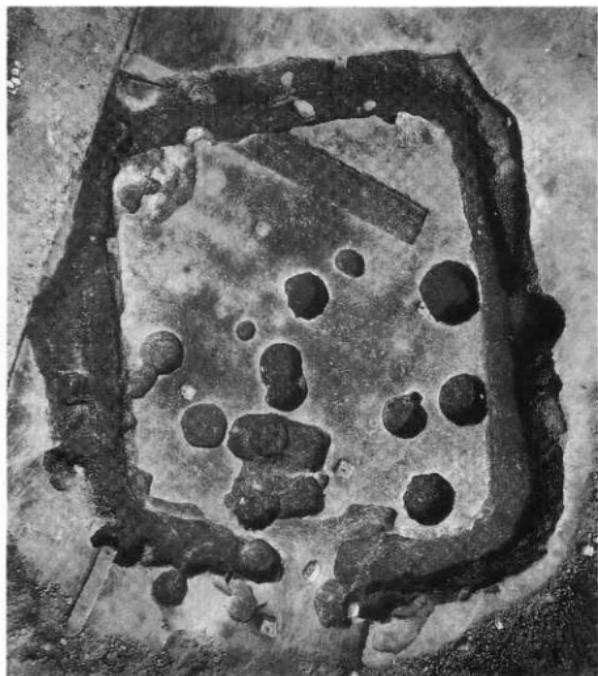
第22号住居跡完掘状況



第25号住居跡遺物出土状況（南東から）



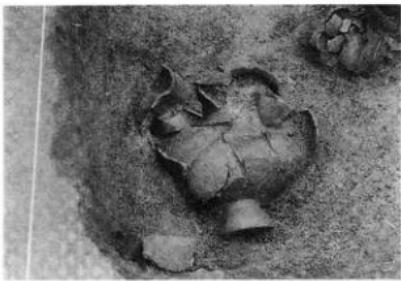
同左（南西から）



第1号方形周溝墓完掘状況（上空より）



第1号方形周溝墓「有段口縁壺」出土状況



同左「台付壺」出土状況



第2号方形周溝墓完掘状況



第2号方形周溝墓「有段口縁壺」出土状況



同左焼成後底部穿孔状況



第2号方形周溝墓東側コーナー遺物出土状況



同 左



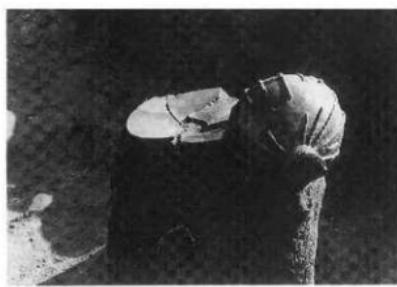
第3号方形周溝墓作業風景



第3号方形周溝墓・周溝内土坑完掘状況



第4号方形周溝墓全掘状況（上空より）



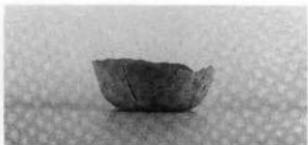
第4号方形周溝墓「装飾隆带壺」出土状況



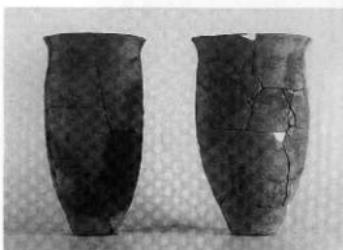
遺構外出土「装飾器台」出土状況



第1号住居跡出土土器



第2号住居跡出土土師器坏



第2号住居跡出土甕



同上



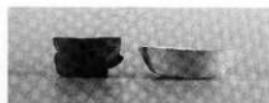
第2号住居跡出土鉢・甌類



第2号・3号住居跡出土土器



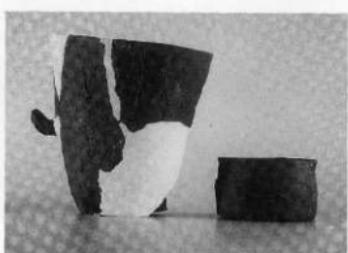
第5号住居跡出土土師器坏



第4号住居跡出土土師器坏



第7号住居跡出土土師器坏



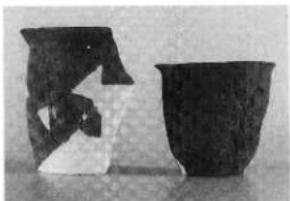
第5号住居跡出土甌類



第7号住居跡出土甕



第7号住居跡出土土師器·小型甌



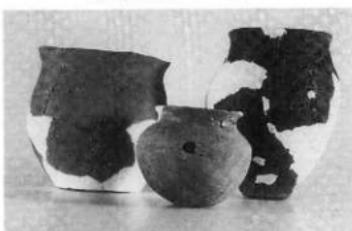
第8号住居跡出土土器類



第9号住居跡出土土器



第10号住居跡出土土器



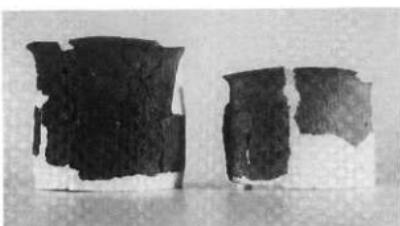
第9号住居跡出土土器類



第12号住居跡出土土器



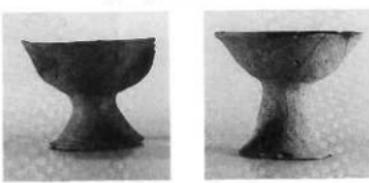
第11号住居跡出土土器



第13号住居跡出土土器類



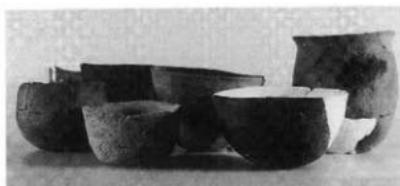
第13号住居跡出土土器



第20号住居跡出土土器



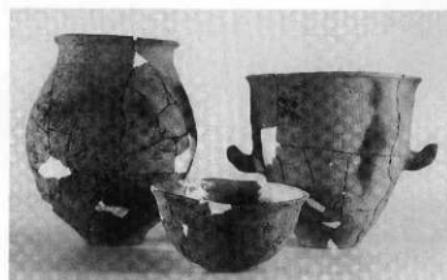
第20号住居跡出土土器類



第20号住居跡出土土器類



第21号住居跡出土土器



第24号住居跡出土土器



1



2



3

1 ~ 3 第25号住居跡出土土器



1



2



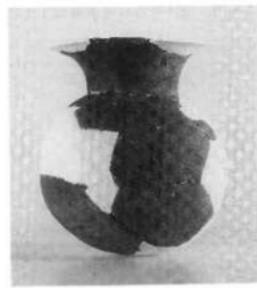
3



4



5



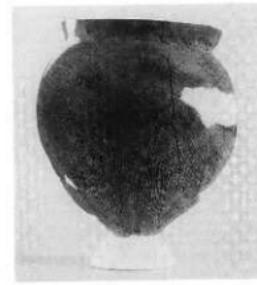
6



7



8

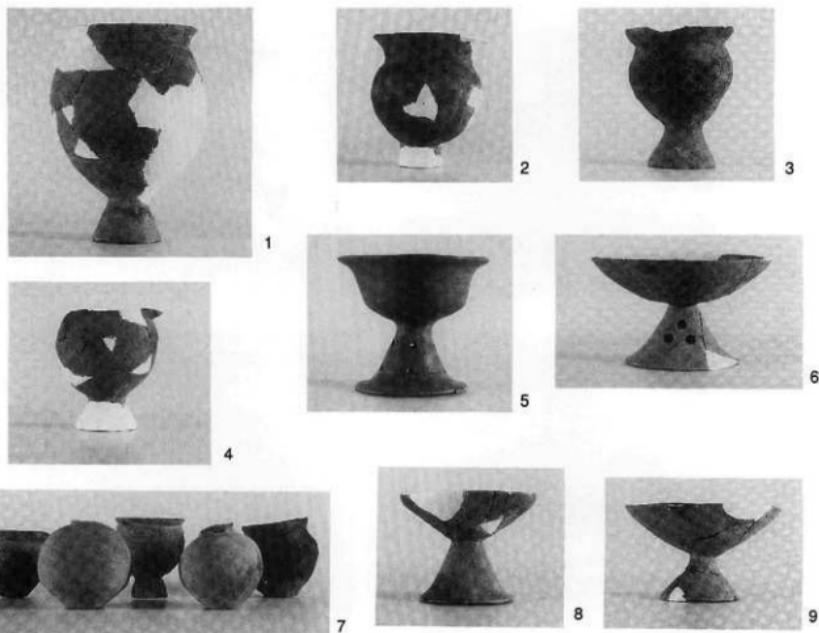


9

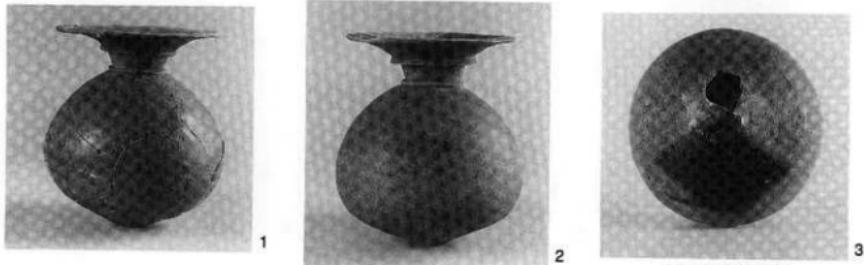


10

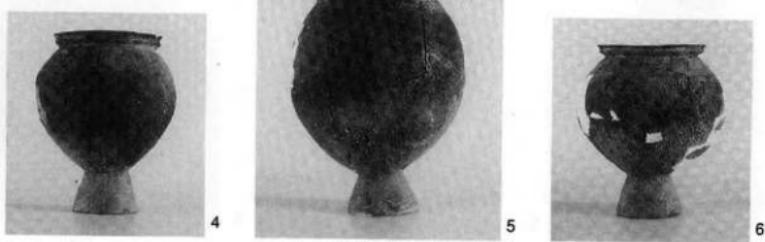
1 ~10 第1号方形周溝墓出土土器



1 ~ 9 第1号方形周溝墓出土土器



同左底部穿孔状况



1 ~ 6 第2号方形周溝墓出土土器



1



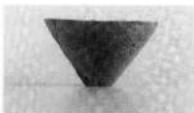
2



3



4



7



5



6



8



9

1～9 第2号方形周溝墓出土土器



1



2

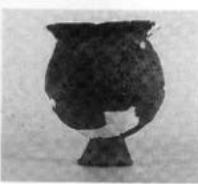
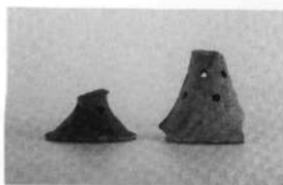
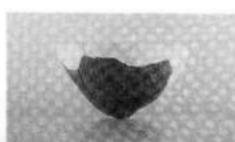
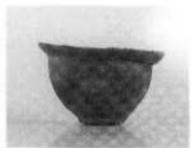
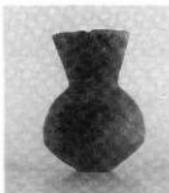
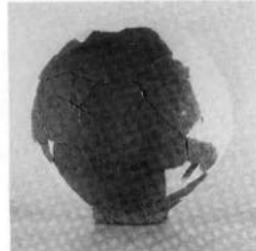


3

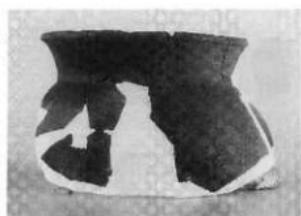


4

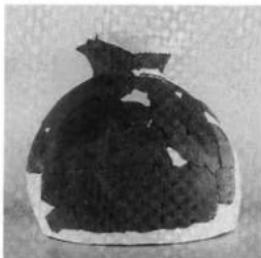
1～4 第3号方形周溝墓出土土器



1～16 第4号方形周溝墓出土土器



1



2

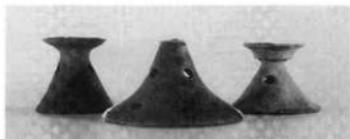


3

1・2・3 土坑内出土土器



1



2



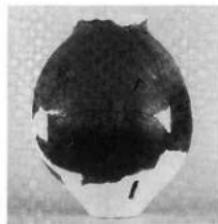
3



4

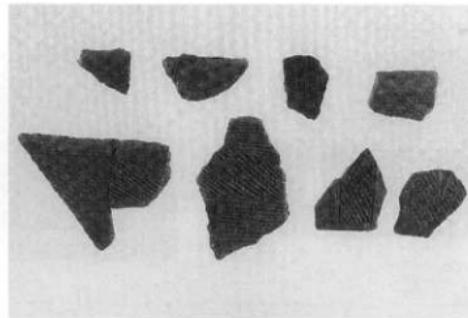


5

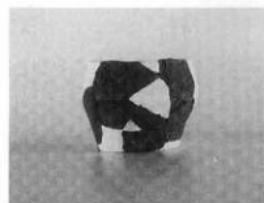


6

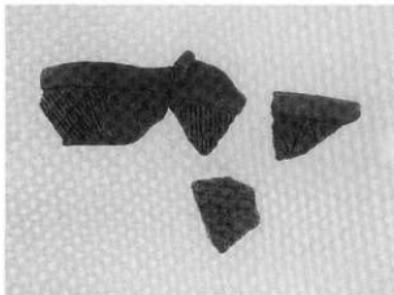
1～6 遺構外出土土器



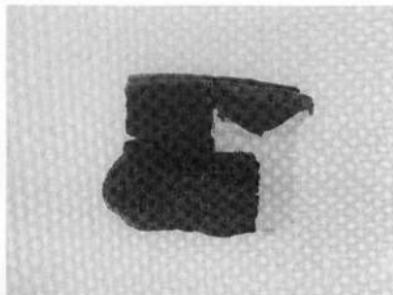
土坑内出土縄文土器



1

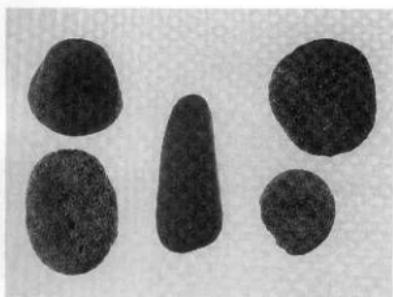
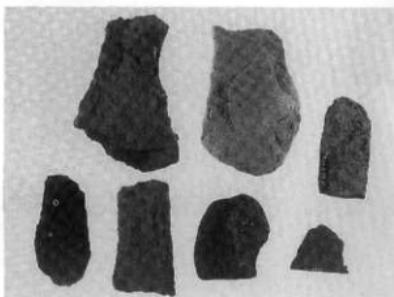


2



3

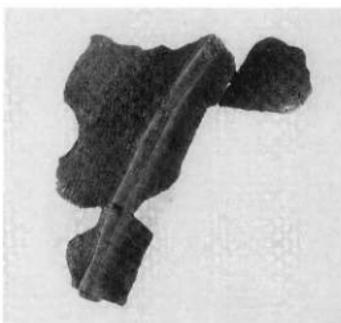
1・2・3造構外出土縄文土器



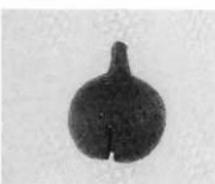
縄文時代出土石器



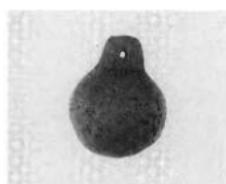
遺構外出土切痕土器



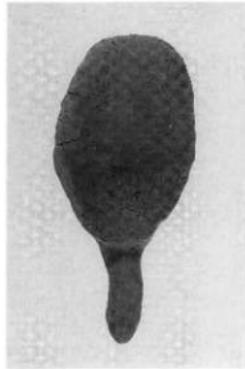
遺構外出土置きカマド



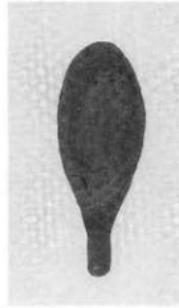
第14号住居跡出土土鈴



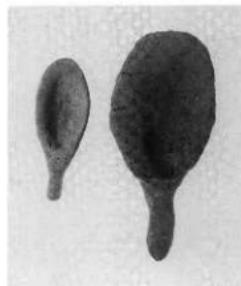
遺構外出土土製品



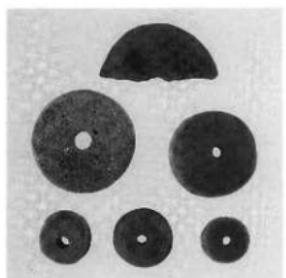
第14号住居跡出土土製スプーン状土製品



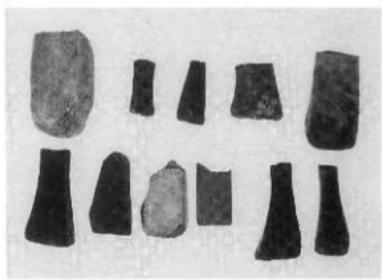
第7号住居跡出土土製スプーン状土製品



同 左



土 製 破 鏟 車



砥 石

報告書抄録

フリガナ	エノキダ イセキ
書名	櫻田遺跡
副題	ツリータウン千塚団地建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第105集
著者名	高野玄明・橋田重男
発行者	山梨県教育委員会・山梨県住宅供給公社
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話番号	400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL0552-66-3881・66-3016
印刷所	株式会社ヨネヤ
印刷日・発行日	1995年3月20日・1995年3月31日
遺跡所在地	山梨県甲府市千塚5丁目9番地内
1/25000地図名・位置	甲府北部 東経138°32'26" 北緯35°41'10" 標高305m
概要	主な時代 縄文時代前期末・中期初頭・後期、弥生時代後期、古墳時代前期・後期 奈良時代・平安時代
	主な遺構 住居跡28軒（弥生時代後期1、古墳時代前期1、古墳時代後期12、奈良時代8、平安時代5、時期不明1） 土坑114基（縄文時代中期初頭3、古墳時代中期4、時期不明107） 溝状遺構3条（古墳時代前期1、時期不明2）掘立柱建物跡1棟
	主な遺物 土器（縄文時代前期～後期、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代） 石器（縄文時代前期～後期、古墳時代、奈良時代、平安時代） 土製品（古墳時代後期） 鉄製品（古墳時代～平安時代）
	特殊遺構・遺物 遺構 方形周溝墓（古墳時代前期） 遺物 古墳時代前期（特殊器台・有段口縁壺・隆帶裝飾壺・手焼り型土器） 古墳時代後期（土鉢・土製スプーン） 平安時代（竈型土器）
調査期間	試掘調査 1991年9月9日～9月20日
	本調査 1992年4月22日～11月30日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第105集

榎 田 遺 跡

印 刷 日 1995年3月20日

発 行 日 1995年3月31日

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

発 行 山梨県教育委員会

山梨県住宅供給公社

印 刷 株式会社 ヨネヤ
